



# 連続フォーラム「チョゴリときもの」 ～医療と介護の現場で～

財団法人 京都市国際交流協会



## はじめに

第十五回目のテーマは「医療と介護の現場で」というテーマを選んだ。

その理由のひとつは、日本人一般とは比較にならない就職難が、「」く当り前だつた在日韓国・朝鮮人の中では、何らかの「手に職をつける」か、在日でもとれる「資格」を取得してそれを就職に生かす、ということがとても真剣な課題である、ということをよく聞いていたからである。もうひとつは私自身が在日の福祉の現場に多少ともかかわつたり、医師として活躍している人を何人か知つていたことによる。そして、その現場での活躍ぶりを多くの市民に知つてほしい、また、在日同胞の皆さんにも知つてほしい、という気持ちもあつた。

けれども最初の回から私の希望や期待が実に薄っぺらいものであることが分かつた。

初回の「大学・病院に勤務する医師として」では、職場での専門家としての医療活動だけでなく、阪神大震災の現場へ行つて第一線の現場にたつて日本人・在日を問わず救援活動に立つた経験、また、まったく自分たち夫婦だけの医師としての使命感と許される家計をやりくりして北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の病院や医療機関へのボランティア活動へ献身的な活動を続けてきた体験が語られた。

第二回目は、精神科の病院の院長として全病棟を開放病棟とするという先進的な医療の試みの実践や、地域のクリニックとして比較的在日の集住が多い地域での日本人・在日の診療にあたる日々の報告が語られた。○

いずれのお話しも、専門の仕事もさることながら、ひとりひとりのパネラーご自身の生きてこられた姿が率直、かつ赤裸々に語られたことによって、このフォーラムの中でひときわ感動的な報告となつたと思う。それは誰もが向き合わねばならない病気や老後に立ち会う現場であつたことにもよう。そして、その中で人間にとつて一番大切なことは何か、を考えつつ、仕事をしてきた人間としての在日の確かな生き方を聞くものに深い感動をよんだのであろう。

報告をしていただいた八人の方々に感謝とともに、私たち一人一人の「生」をより豊かなものにするために今回のお話を役立てたい。

京都造形芸術大学客員教授

仲尾 宏

## 目 次

「チヨゴリときもの」 ～医療と介護の現場で～

第一回 「大学・病院に勤務する医師として」

第二回 「地域医療機関ではたらく」

第三回 「介護と学校養護の現場から」

第四回 「看護師の勤務から」



## 第一回 「大学・病院に勤務する医師として」

パネリスト

金 郁喆氏（キム ウッチヨル 在日二世。  
京都府立医科大学 整形外科）

李 美於氏（リ・ミオ 在日二世・

病院勤務 呼吸器外科）

コーディネーター  
仲尾 宏氏（子力オ ヒロシ）  
(京都造形芸術大学客員教授)

二〇〇八年二月十五日（金）開催



## チヨゴリときもの

司会：定刻になりましたのでただいまから連続フォーラム「チヨゴリときもの」を開催いたします。一九九二年に開始いたしましたこのフォーラムも今回で一五回目となりました。現在ではインターネット、テレビなどでアジア諸国との情報を簡単に得ることができます。また、多くの方がその国々へ観光に行く機会も増えてまいりました。このフォーラム開始の数年前の一九八八年ソウルオリンピックの韓国を始めアジアの諸国への関心が高まっていく契機になりましたが、国際、あるいは国際交流という言葉が頻繁に謳われだしました一九九二年当時はまだその言葉の対象は欧米のことでした。そして国際化という言葉が飛び交うようになりましたが、世界の中での日本あるいは外国人が新たに来日したことと想定するという形でのクローズアップそういうものが多くなってきました。そんな中それ以上に最も近い朝鮮半島との長い歴史そしてそこにルーツを持つて数十年この日本にいっしょに住まわれる方。その方たちへの理解を深めることこそ真の国際化の一歩ではないだろうかという思いの下このフォーラムは始められました。

現在では五世の方もいらっしゃいます、在日韓国・朝鮮人の方の歴史は実は日本の歴史でもあるからです。このフォーラムは学会ではなくお話をいただく方は皆さん、在日外国人研究の専門家ではありません。そして、在日韓国・朝鮮人の方全員の代表者でもありません。



数十年前に日本に来られた方。日本で生まれて育つた方。そういうご本人から「自分の言葉で生活、意見、お考え、言い換えれば貴重な個人史の一部を直接伺つて理解を深めていただく機会にしようとするものなのです。

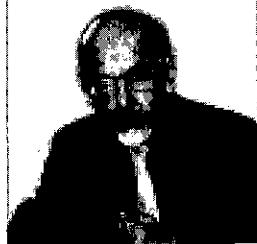
今回は「医療と介護の現場で」と題付け実施いたしますが、本日、第一回目は「大学・病院に勤務する医師として」をテーマに二名の方からお話を伺います。今回医療と介護を取り上げましたのは大きな理由があります。

一つは、医療や介護の問題は国籍とか文化の違いを越えて人が生まれてきて、そしてどのように長期を迎えるかという私たちの生活に非常に密着したことだからです。その中で国籍を越えて社会に貢献する一人の人としての侧面と、日本に生まれた外国人としての思いをお聞きしようと思つたからです。

それでは本日のパネリストとコーディネーターをご紹介させていただきます。お一人目は京都府立医科大学整形外科医としてご活躍の金 郁喆（キム ウツチヨル）様です。そしてお二人目は市内病院で呼吸器外科医で勤務されている李 美於（リ ミオ）様です。そしてコーディネーターをお願いしておりますのはフォーラム第一回目からお願いしております京都造形芸術大学客員教授仲尾宏先生です。なお、一部終了いたしましたら皆様からのご質問ご意見を元に第二部の質疑応答の時間を予定しております。お手元の用紙をご利用下さい。また途中に事業記録のため写真を撮らせていただく場合がございます。ご理解賜りますようにお願いいたします。

仲尾 宏氏

仲尾 宏氏



仲尾 宏：今、ご紹介いただきました仲尾宏でございます。司会の岡村さんから言われましたように今年でこのフォーラム一五回目でございます。毎年色んなテーマを考え付くんですけれども、まだまだ尽きることがないくらい色々なケースといいますか、あるいは場面といいますか、あるいは生き方といいますか、そういうことが統いて出てくるようなことがあります。特に今年は専門職を目指して、そして専門職についておられる方。そういうことでとりわけ昨今非常に大きな問題を様々な抱えている医療と介護の現場でご活躍の在日コリアンの方にお話をいただくことに致しました。第一回目の今日は大学や研究機関に勤務されている方、第二回目は地域医療の現場で、つまり開業医として活躍されている方。三番目は介護と学校の養護の、養護教員の立場の方。それから四回目は看護師の方。そういう四

つのグループにくくつてお話を聞いていただきます。特に第一回目と第二回目、医師の方々については非常に高度な専門的な知識と修練が要求されます。それの、つまり医師としての国家試験を受けてそして合格して現場に立たれるわけですけれどもそれなりの受験のことにも含めて思ひ、あるいは志があつてその道に進まれたわけだと思います。それからこの大学の医局というのはお話にもお二人から出てくるかと思いますが、例えば一九六〇年代の大学の紛争も東京大学医学部が発端なんです。非常に保守的といいますかそういういつた雰囲気のある職場でもあります。もちろん今は時代が変わっていますから少しは変化しているかもしれませんし、あるいはまた元通りに収まつてしまつたかもしれません。いずれにしても日本のそうした医療といいますか、医学教育と研究の現場そのものを体験し、そして今第一線でご活躍の方々の中には在日の方もおられるという状況であります。そんなわけで今日は勤務医としてご活躍のお二人にお話を伺うことにいたします。今、京都府内には京都府立病院。それから京都市立病院、それから丹後のほうには与謝海病院といふんですか、三つの公立病院がござります。まず最初は、京都府立医大の整形外科で第一線に立つておられる金 郁喆(キム ウッチョル)さんからお話を伺うことにします。どうぞ宜しくお願いします。



金 郁喆氏

金 郁喆：こんにちは金 郁喆(キム ウッチョル)と申します。スライドをちょっとお見せしながらお話をしたいと思うのですが、こちらにちょっと操作しないといけないので座らせて、着席でお話をさせていただきたいと思います。私は京都生まれ京都育ちで皆さんも行かれた学校があるかもしれません、朱雀第四小学校を卒業して朱雀中学を出て山城高校を卒業後、近畿予備校を経て二年くらいで医学部に入学しました。幼稚園から高校までは「カナアイクヨシ」と日本名で行つております。幼稚園のところから在日のキリスト教教会が西院にあるんですが、そこに通つておりましたので、韓国人の仲間の中には早くから溶け込んでいました。いつか本名で行こうと思っていましたが、大学から決めて今の本名を名乗りました。今も金 郁喆をカタカナでキム ウッチョルと読むのが難しくて困るんですが、今もこの名前で通しています。僕は赤ちゃんとか子供をよく診察しているので、小学生くらいの子どもは

「キムタク、キムタク」と言つてくれるんですねけれど、お母さんがニタツと笑つて「違うよ」と言われるんです。まあそつちはいいんですけど、もうちょっと大きい子どもになると「キムチ、キムチ」といいますね。まあどちらもおいしいんですが、いろんなニックネームをつけてくれます。

apseortはキムウツチヨルですが、そのスペルがまた難しいんですよ。大学は、信州大学です。六年間行つたんですが、残念ながら京都大学は入れてもらえなかつたんです。最近、論文とか書きますが、僕のこの「喆」という名前がワープロの漢字水準に無いために、ご覧のように「吉」（キチ）が「吉吉」（キチキチ）ですね。面白いから「吉」ひとつにしようとか、あと「詰」にしどうとか、あとよく分かつてはる人はこの「喆」という字が昔の哲学の「哲」という古い言葉なんで、哲に変えている人もいます。うちの親父が感心していました。これを哲と読めるのは学があるなど。これがまた英語の論文で書くと喆の『teol』が『oel』になつたり「金先生の名前まあいいか、ローマ字読みで書いとけ」つて書いてあることもありました。ですから僕の名前で業績を検索すると、いろんな種類があるんです。自分でどうか分からんんですけども、この前、韓国へ国際学会に行つた時は下の『Wook Chul (ウツチヨル)』になつてますね。正式にはこの『Chul (チヨル)』と書くみたいですね。といふうに自分自身の名前がいろいろあります。でも中身は一つです。皆さんもこれからは金郁喆 (Kim Wook Chul) と言う名前を覚えてください。現在の仕事に關してですが、府立医大に二年間研修医として入り、あの一〇年ぐらいいは外傷病院をまわっていました。最初は近江八幡市民病院に二年、そのあとは大阪の吹田済生会に二年近くいて、そのあと湖北総合病院という滋賀県の北の病院です。そこに三年半ぐらいいました。名神高速道路とか、北陸自動車道のインターのそばにある病院が多かつたので、外傷がいっぱい運ばれてきました。外傷は結構魅力があって、それ以上患者さんを悪くすることはありません。足が曲がっているのをまつすぐにして喜ばれる。ただ、緊急で呼ばれることが多いので体力が必要で、すごく若い間はいいかなと思います。今、大学ではV-I-Pの外傷ばかりを扱つています。病院関係者とか教授の知り合いとかは「金にさせろ」という形で来ますけれど、普段はほとんど先天性疾患ですね。赤ちゃんの股関節脱臼とか、先天性内反足、生まれながらに足が曲がっている子どもです。また、首をまつすぐしようとまつすぐできない傾いたままの、ピサの斜塔のようになつて筋性斜颈のような疾患を扱つております。それ以外に、またちょっと最近話題になつてはいるのが脚延長です。大学に戻る一五年前ぐらいにちょっと米国

に留学してて研究したのが、この脚を延長する機械の力学的な研究でした。ひずみとか、強度とかを測定する研究でした。日本に帰ってきてからはお前がやれということで脚延長をしております。ちょっと紹介しましよう。ただ紹介したからと言つて、僕のほうに患者さんをたくさん送らないようにしてください。この左の写真、金属の棒が入ったようになつて見えますが、この子は悪性の骨肉腫で小学校の六年生くらいに手術されて、こういう人工の関節を入れているんです。その後、足は成長しないので五センチ程短くなつてしましました。本人がどうしても足を長くして欲しいと願うのですが、金属が骨の中に入つていて、伸ばそうとしてもどこを伸ばしても良いか分からんですが、このわざか膝から下のすねのところだけ骨が残つているんです。じゃあそこでしかないと。かなりのリスクはあるんですが、骨髄の中の血流は少ないし、周りの筋肉などの部分は腫瘍で一部取つていますので、血流が乏しく心配でしたが伸ばしました。一日一ミリくらいのスピードで、こういう二つのリングを上下につけまして伸ばしております。そうするとご覧のようにどんどんと骨が出来ております。四ヶ月ぐらいで五センチ伸びて、そのまま通学しながら、また勤務しながら病院に通つております。こういう方法で骨が伸びるというので、曲がっている首もまつすぐにできるだらうと、曲がっている短いほうを伸ばせば、長いほうと同じ長さになつてまつすぐになりますよ。単純に言えばそういう考え方で、この子は骨髄炎で足が成長しなくなつた子どもですけれどもそれをまつすぐになりました。これは一〇年ぐらい前の症例ですが、交通事故で前にも横にも曲がっている。おまけに骨髄炎を起こして放つておかれたという症例です。まつすぐにして欲しいと思春期の青年でした。術後、正面から見ても横から見てもまつすぐな形に矯正しました。これは大腿の右のほうの太ももに傷があるのが見えますが、交通事故で骨をしまして瘢痕（ハシコ）のために成長が悪くなつて、太ももの骨が曲がつちやつたんです。これを太ももの骨をまつすぐにして八ヶ月後には立つた時に体重がかかる線がきちっと、正常な反対の足の形と同じ様に調整しました。大体曲がる前は性格が偏つているんですね。少し内向的なんです。戻してやると急に明るくなる。人間の気持ちの変化にはびっくりします。九歳くらいの男の子で内股の子があつて、運動嫌いですぐ転ぶので運動しなくなつて、どんどん太つていったんですが、どうしても内股がいやだということで一〇歳の時に手術して足が外に向くようにしてやつたんです。そうすると急に男っぽくなつてラグビー やサッカーをやり出しました。人間の心と体は比例するもんだなと思わされました。

これは悪性腫瘍で、骨盤にできた悪性骨腫瘍ですが、昔は右の図のように切断してしまって足を取つてしまふんです。最近は人工のものを入れて人工の骨盤を作つたりするんですが、人工のものは感染しやすいんです。人口物は入れ歯のように緩んできたりしますから、自分の骨で再建してやると左の様な機械をつけて足が短くなつた分を、下の方で同時に伸ばします。この女性は骨盤の悪性腫瘍で術後正座もでき、普通に生活しています。左下の様に足が少し変形していますけれども、足の長さは正常で機能的には全く問題ない。この子は結婚して子供が出来たと報告に来ましたけれど、高校の時代に同じく骨肉腫の手術をして同時に足を四センチ程伸ばしました。自由に階段を上れます。脚延長は骨のないところも骨で埋めることができ、人工のものを使わないので一生自分の骨で不足分を補つて使える足を作るという技術です。

この黄色い部分が悪性腫瘍と考えて下さい。この部分を切断しますと短くなりますよね。左のほうを見てもらいますと、短くなつたところよりさらに下で骨を切つて、徐々に上に持つていくわけです。ピンクの四角い箱が新しくできた骨です。上にあがつて切除したところも新しい骨で埋めます。これを「ボーントランスポート」と言います。この治療期間中は自分の足の長さは一切変わらないです。

これは四六歳の女性で、軟骨肉腫で骨を切除して上のほうを切つて下のほうに一日一ミリずつ引き下げていきました。このように骨が修復されています。この子は世界で最初じゃないですかね、まだ報告していないんですね。二二歳の女の子です。ひざの裏側に白く見えるのが骨肉腫です。これが神経、血管を巻き込んでいるんですね。ひざの裏側に大事な神経、血管がありますので、これを取ると神経や、血管も同時に取らないといけないわけです。そうすると本来なら足は切断しかなく、切断を勧めたなんですが、本人は是非残して欲しい。そこで二二歳の女の子なので、だるま落としのようにこの右のピンクの線で浮いたところを切除しまして短縮して神経、血管を全部マイクロで縫合し、足に血が行くよう、神経がもう一回通うようにしました。この状態で六週間後に足の短縮を補うため、二箇所で伸ばしました。それで元の長さに戻しました。その後、人工の膝関節を入れてひざも動くようにしよう、という計画を立てたわけです。これは手術中の写真です。一日一度ずつひざを曲げる機械をつけました。これ正面の写真です。この子は現在も就職して頑張っています。時々顔を出してくれます。

」のようなことを僕はやっていますが、社会的活動としては、阪神大震災のときに出動命令が出まして、震災の翌

日一八日に出動しました。一七日が震災の日で、丁度その日教授回診がありまして、白い巨塔のようなものを想像されると思いますけれども、本当に大名行列のように長い、実際にそうなんですが、「」の患者の血の検査はどうだ。」とか「レントゲンはどうだ。」とか喋りながらやっているんです。回診後に僕がその教授に「先生、我々はこんな事をしていていいんですか？向こうでは人がいっぱい死んでいますよ。」と言いましたところ、「わかつていい。けれど府からの命令が出ないとうちは行けない。」と言われました。府からの命令が何で遅いんだろう思ついたら、次の日の朝に命令が出まして僕が教授に尋ねた責任上、お前が団長になれと、一八日の昼に出動するから全部材料を揃えろと命令されました。そこで、手術器具、副本木、ギブスあらゆる事態を想定して、肋骨骨折用のバンドとかも全部そろえました。みんな持ち出しです。一時くらいにそろつて出動ということでいつたんですけど、「府庁に来い」と、なんですか？と尋ねたら辞令、訓示がおりることと、そんなことしてないで早く行きましょうと、僕は言つたんですが、KBSやらみんな取材に来ていまして「出動する訓示です。」と、出動するのは分かつてるんですね。朝に辞令がでたんだから早く行こうと言つたんです。府庁のお偉いさんがじやあ頑張つてきて下さい。と言つままで出れないとのこと。僕はその横でずっと文句をKBSに言つたんですが、そこはテレビでは全部カットされていました。というようにお役所仕事は遅いです。前日の一七日に出動した日赤のグループは渋滞の中、翌日の一〇時くらいに着いたんです。僕らは一八日の三時に出動したんですけども、阪神高速とか名神が近畿自動車道も含めて一応通行禁止になつていきました。通れるんですけどね、そこを京都府警の先導でバーツと飛ばして行きました。神戸の神戸線に着いたところでびたつと渋滞で止まつたんですが、このまま動かなかつたら來た意味が無いということで僕が団長だつたので、兵庫県警に電話して京都から応援に来ただけど進まない。なんとかしてくれと言つたら、近くのパトカーを捕まえて京都府警、兵庫県警を通じて連絡をしたら、そのパトカーが僕らを先導して反対車線を逆走するんです。逆走するとあけてくれます。と言うことで日赤グループが前の日に行きましたけれど、僕らが着いたのが四時くらいでした。あまり差がなく着きました。芦屋市民病院つていうのが唯一壊れていないということでそこを拠点にしました。芦屋市民病院に行く前に芦屋市の消防局が本部になつていますので、その本部のガラスもかなり壊れていましたが、そこへ三〇人ぐらいで行つたんです。それぞれ食料を分けて、もし、もう一度災害があつてもここに戻ると言う命令の元に皆に食料を配給したんです。いつバラバラになるかわからない

から、芦屋市民病院に行つていろんな場所に配置されました。病院に行きますと廊下もぎゅうぎゅう詰めでして、誰が誰かわからないですし、病気・怪我の区別もつかないので、先ず初期活動として患者さんの名簿と、その患者さんのがどこが悪いのかが一瞬で分かるように全部調査して、名前つけてカルテ作りました。

初期に大変多くの方が亡くなられましたが、かわいそうな患者さんもおられたと思うのは、中途半端な知識で血が出たら上を縛れと。例えば指から血が出ていたら上を縛れと言うんですけれども、縛り方が甘いと静脈だけとめて動脈は止まらないんです。そうすると傷口の静脈から動脈のように出血するわけです。それで出血多量で亡くなつた方がいると、僕が行つた時も足から同じように血が止まらなくて、危ない方がおられました。これは絞め方が悪いといふことです。止血を解除して、けがして血が噴いているところを五分程抑えるたら出血が止まつたんです。これは皆さん動脈が切れてても静脈が切れても、その部位を抑えたら止まるんです。ですから長くても一五分くらい抑えたら止まります。それで止まらなかつたら、そこだけを縛るとかそういうことをしなければいけないんです。震災後の座談会でも同じ事言つたんですけど、間違つたインフォメーションを与えることで亡くなつた人もたくさんおられたんですね。あと整形外科領域では「コンパートメントシンドローム」と言いまして筋肉の内圧が高くなつて、筋肉が壊死を起こす「クラッショングループ」と同じなんですねけれども、そういう病態がありまして、整形外科医が行つて切つて、除圧のために筋膜を切つて開いておくんです。そうすると血が流れ筋肉が助かるわけですが、次の日、外科のグループの先生が行つたらそれを縫つていたんです。こんなのが開いていたらあかんだろうと、縫わはつたとのことです。その後に、整形外科医のグループが行つた時、これ縫つたらあかんだろうと言つてまた開いた。そういうときにカルテの徹底が無かつたので、かわいそうな思いをした患者さんもいたと思います。そういうことで初期活動としてまともな事をしていたのか、なかなか疑問の残るところです。

ショックだつたのは、子供さんとかお母さんが助かつて運ばれているんですけど、足の骨折とか肩の骨折とか鎖骨が折れるだけで済んでよかつたね、と慰めを言つたのですが、小さい男の子は「お兄ちゃんは死んじゃつた。」と、また、奥さんは「旦那が覆いかぶさつて私を助けてくれた。」と、こちらが慰める言葉がないくらいの、地獄のような精神状態でした。また、検死グループがありまして、検死グループはそういう震災の中でも殺人があるかもしないという、しようもないことを警察は考えるわけですね。この忙しいのに医者一人を検死に回すんですよ。どさ

くさにまぎれてこれは殺した死体じゃないのかと。そんなのないと思うんですね。そういうのもしないといけない。警察も大変だと思うんですが、その検死に行つたのが僕と同期の先生でした。検視では頭や体がペツシャンコ、漫画でローラーに轢かれてピューになりますね。ああいう状態。それで怖いのは血が出でないんです。ということはジワーッと漬れているんです。ですからグシャツといかないで出血しないわけです。親子三人川の字でそのままペツシャンコというのも聞きました。生き別れよりは一緒でよかつたかなと言っている人もいました。というような悲惨な状態でした。僕はキムで派遣されているのですが、どういうわけか僕が団長なんです。それで女房に電話で今日の朝、辞令がでたから着替えとか持つてきてくれ、ちょっと食べ物も入れておいてくれ、ひょっとしてまた向こうで余震が起つたりするからと言いました。外来の受付に行つたらちやんと荷物が届けてありました。えらいなと思つたんですが、外来の看護師が「置いてさつと帰らはりました」と。俺と最期の別れかもしれないのにとか思いましたけど。無事に帰ると思つていたんでしようね。実際向こうに行つたら震度五のような余震が二回もありました。ギブスを巻いていたら、隣の窓ガラスからガラス片がブワーッと落ちてきまして、僕らはびっくりしましたけれども、患者さん達はもうそれぐらいでは驚かなくなつていました。それにもまた驚かされました。自分達が持つていつた食べ物はみんな置いていきました。患者さんたちは何も食べていませんからその前で食べられないです。行つた人間はみんな食べないで患者さんに配りました。みんな風邪をひきましたけれども。患者さんたちは二日後くらいから大量の食料が運ばれてきたんです。僕は次の日に来る先発隊というか後続隊に電話をして、食料を持つてきてくれと。明日の朝屋の食料はないから一緒に持つてきてくれといつたら、「それは管轄が違います」と府の担当者に断られました。管轄が人を助けるわけではないから「管轄とは何?」って聞いたらそれは「食糧を供給する管轄です」と言うわけです。私達医療部隊ではだめですとのことです。黙つて持つて来いと言つたんですが、「朝昼晩パン一人五個食べるくらいのつもりで持つてこい。」それぐらいは自分で持つてこいと、そうしたら患者にあげられると言つて、皆にたくさん持つてこさせたんですが、実は持つてきた次の日の夕方くらいから、食料はいっぱい来まして困りました。ライフラインを絶たれると本当に大変で、水が流れないと、レントゲンも一人一枚しか撮れない大変な状況でした。ということで、今、社会的な奉仕活動について話しましたが、医療に国籍条項ついているの?つて疑問に思います。実際に外国籍でも大学受験はできます。医師の国家試験も受けられます。看護師も同様に受けられ

ますが、国公立に就職するに当たつて、都道府県で看護師になれない県があるんですよ。京都も最近ですよね。ナイチンゲールになれない。そんなことがあるんですか、という気になりますよね。その辺は行政のほうで決めちゃつたり、法律で決まっているかも知れないのですが、こういうことは人道的に許されるのかなと思いました。あと僕は整形外科ですが、整形外科の准教授という肩書きを貰つてますが、外国籍だと准教授になるときには期限付きなんですね。それは知らなかつたです。初め。「金先生は韓国人なので二年ごとに更新が要ります。」とのことでした。じゃあ二年後に辞めさせてくださいと言つたんですよ。教授会で毎回更新して許してやろうということです。期限付の資格については、僕も初めて知つたんで皆さんも初めてだろうと思います。

日本で生まれて日本で育つて日本の環境、日本の文化の中に染まつていましたから、そういうことがあるつていうのはがつかりしました。また、外国人の採用は学生にも微妙な話なんすけれども、大学によつて人数制限を行つているんですよ。公表されていないんですね、きっと。昔は女性の数も決めていたようです。女性は何人以上入れない。かわいそうでしょ。今は女性の方がよく勉強しますので、三割五分から四割は女の子です。おかげで結婚されたら医療をされない女医さんもおられるので医師の数は減つていますが、その辺は問題なのかもしれません。それはやはり国がサポートして、女医として生活できる環境を作ることを並行していかないと、日本はまだまだ遅れているかなと思います。学会でも金先生日本人やつたらなあと冗談ぽく言われたことがあります、何か関係あります?それ以上言うと喧嘩になりそなうので言うのやめましたが、こういう偏見は今もあるということです。法律とか条例で決まつているものに対して、僕ら外国人は何にも言えない。それを決めたのは日本人社会なので、日本の人人が直して下さい。選挙権を外国人にくれて僕らのこと代弁してくれる代議士さんがいたら、変えられるかもしれません。僕らに選挙権がありませんのでどこにも訴えるところはないんです。ですから法律や条例で悪いとか、また裁判でおかいといふものがあれば、それは制度として直していかなければいけないと思います。それが最低な基本的人権かなと僕は思います。あいつが好きこいつが嫌い。生理的に好き嫌いというのは誰でもありますので、朝鮮人嫌い言うたら、じやあ俺も日本人嫌いや。それは別にいいんです。ただ同じ仕事しているのに同じ給料が得られない、同じ昇進がないというのはこれは差別です。そういうことがないようにして欲しい。差別されている側も差別する側も、いろんな問題が多いと思うんですが、構造的でない問題としては気持ちの問題ですね。歴史教育の問題で、きもの側の日

本の方はまったく知らない方もたくさんおられますし、そういう差別の実態を知らない振りする人もいますし、知つても、また、関わっていても深入りたくない。私は関係したくないわ。という方もおられると思います。僕の友達というか周りにもそういう人がたくさんいました。

チョゴリ側も問題ですね。日本人として生きていくんだからその話題から避けたい、逃げたい。ちょっと着物は着てもチョゴリは着ない。結婚式でもチョゴリを着て行かない子もいます。まあそれやつたらさつさと「帰化」してしまおうという方もおられますが、隠したい人にとっては「帰化」したという事実がまた残るところがもう問題なんです。それが戸籍に残るんです。何で残るのか仲尾先生は「存知か」と思います。やはりこの人たちは自分しか見えてない人たちですよね。日本人も韓国人も同じなんですね。ただ、自分がどんなところにいるのか、というのをいつも高い位置から自分を見るようにしないと、いつまでも直らない問題かなと思います。勿論こういう人権研修とかいうのも大事ですけれども先ず人に関心を持ち、人も自分と同じだという事を知る。同じ人間として一緒に生きていると、いう意識が必要かなと思います。そういう意識を持つための関心や情熱は、どうやって出来るのかはなかなか僕も分からぬですが、日々の生活に皆さんも追われて大変だと思います。医療的な立場から言うと、僕は赤ちゃんとか未熟児とかを足が曲がっているために、ギプスを巻いて治療します。一生懸命足が曲がっていたのをまつすぐにするんです。毎週ギプス巻きをおしたり、三日に一回治療したりするんですが、計らずしも心臓に問題があつて二歳でなくなつたとか、六ヶ月でなくなつたとかつてあるんです。でも、お母さんは先生ありがとうございましたと言わはるんですね。一生懸命やりましたけどギプスを巻いて子供をいじめただけかもしません。ギプス巻くつていつても矯正すると痛いです。かわいそうな事をしたかな。まだまだ生きられるという前提で一生懸命治療するのですが、お母さんがおっしゃるのは「棺桶に入れる時にまつすぐになつている足が、私は欲しかった。」と言ふんです。お母さんというのは子どもの奇形は、自分の責任やと思うんです。私がこういう子を生んだと。そういう気持ちがあるのかなと思いました。ですから治療する意味は、お母さんを慰めてあげて、また生きる活力を持つていただくため、という意味ではないのかなと思います。命は一瞬で亡くなります。昨日まで元気だったのに、次の日には亡くなつたといふことはたくさんあります。大人でも子供でもそうです。先ほど言いましたけど足が曲がっている子が、足をまつすべにするだけで性格が変わるというのは本当にあります。女性なんかはいいと思うんですよね。化粧したらまた違う

自分になれるという、男も違う自分が一つくらいあれば楽しいかなと思うんですけど。ですから女装する人も時々出できますよね。

一回やつてみて練習してみようかと思うんですが、違う自分が見れる、持てるのはいいんです。でもそれが逃避にならなければ。違う自分も、今の自分もそれぞれ良さを出せるような生き方が一番大事だと思います。人間は感情の生き物です。本当に感情だけで人間の心も病気も急によくなります。他人の感情を大切に思う気持ちが重要だと思います。

僕が大学に戻された時に、一二歳の同和地区の子供がバイク盗んで骨折したんですね。開放骨折で太ももの骨が飛び出すような事故で、もう痛くて足が全く動かせない。全く曲がらないんです。ひざが三〇度くらい曲がったまま、伸びも曲がりもしないんです。一度僕が留学から帰ってきて、その担当者の先生が代わりにアメリカに行っちゃつたんで、キムその患者を担当しると言わされました。これはどうしようもないだろうが、かわいそうだけどキム頼むわとか言わされて、よく話を聞くとその子は盗んだことにものすごく罪の意識を持つていたんですね。盗んだのは自分だと。実は共犯の友達がおると、一緒に盗んだんですが、男の子同士の約束とか友達を裏切ることは絶対しないので、黙つて俺がやつたというんですね。それが子供心にこらえきれないんでしよう。罪悪感を自分の足に押し付けている、どう見ても骨は着いているし、関節も動く可能性があるのに、何で動かさないのかということでちよつといろいろ調べたら、そういう犯罪による外傷は、自分を罰していると、そういう子供は足を罰して動かさないのだと。ホンマかなということで、あるとき、その子の周りに誰もいない時「もうこの足許してやつたら。ぼろぼろになつたやないか、もういいよ、ここまでいじめたら。」って言つたら、次の日から動き出した。びっくりしましたよ。キムは神様だといわれましたね。半年したらもうちゃんと普通に動いて、今お父さんの跡をついで土建屋をやっています。やんちゃになつてまた警察の厄介にならなければいいんですね。元気でいればうれしいです。というふうに感情で病気というのは変わるのはわかりました。あと、生きてることは奇跡です。これは本當だと思いますね。毎日、僕らはバイ菌と戦う免疫というもので体を守つています。ちょっと免疫が崩れればあつという間にやられちゃいます。世界中で今テロや言うてますけど、バイ菌の方が恐ろしいテロリストです。じゃあどうやつたら情熱を持つて生きられるか、自分はかけがえのない命を持っているのだと思うこと。他の人も偶然のようにこの奇跡故に同じ世界に

生きているということ。これはもう喜ぶべきことで、感謝すべきことやということから始まらないと共に生きる生活も、自分も大事、人も大事ということが始まるんではないかなと思います。長くなりましたが僕のお話しとさせて頂きます。どうもありがとうございました。

仲尾 宏：ありがとうございました。さりげないお話の中に専門の医療の現場それから貴重な阪神淡路大震災でのご体験を交えていろんな教訓をお話しいただいたと思います。それでは引き続き李 美於（リ ミオ）さんからお話しを頂きます。



李 美於氏

李 美於：引き続きましてお話しさせて頂きます。スライドに入る前に簡単に自己紹介させて頂きます。東京に生まれまして、大学は一九八六年に卒業しました。それで京都に、卒業してすぐに京都に来ましたので医者になって二〇年。小学校は東京にある朝鮮学校、小学校、中学校、高校まで一二年間朝鮮学校に通いました。朝鮮学校では勿論日本語も習うんですけれども、一般的な教育の内容は日本の学校のものとは全く異なります。子どもの頃から私は文章を書いたり読んだりするのが好きだったので、新聞記者になりたいなど思っていました。それは子供らしいといふかそういうものだったんですけども、ちなみに保育園は世田谷区立世田谷保育園という所に行きましたで、両親共働きだったので〇歳から保育園にはいっていました。だから日本の教育を受けたのはその最初の六年間だけですけれども、その六年の保育園の最後のアルバムのところに大きくなつたら何になるかっていう欄がありまして、そこを見ますと他の女の子たちはお嫁さんになりたいとか保育園の先生とか、自分の周囲を見てお母さんになりたいとか、お嫁さんになりたいとか。私はバスガイドになりたいと、当時のバスガイドつて必ずバスに運転手さんとバスガイドさんがいて、黒い大きなかばんを持っていて、そのかばんにすごく憧れていたという気持ちが今はするんですけども、それを首からぶら下げているような絵も、漫画ですけれども描いていて、そういうものに憧れている本当に普通の女の子だったと思います。小学校から保育園の友達と別れて、自分だけ朝鮮学校に行くっていうのは自分として

も、それまで自分が朝鮮人つていう事を意識しなかつたので、違うんだなという事に最初に気付いた時だつたのではないかと思います。子供というのは環境にはすぐ慣れるので、朝鮮学校に行つて高校まで周りが全部朝鮮人ですで、普通の日本の友達ともほとんど付き合いもなく「一年間を過ごしました」。朝鮮学校を卒業する段階になりましたで、実際自分がどういう風に生計を立てて生きていくかと云うことに直面したんですけども、文章を書いたりするにはまず学校に行かなければいけない。学校に行くには日本の大学は全く考えていなかつたんですけども、それ以上朝鮮学校の大学に行かなければいけないんですが、そこに行くには朝鮮総連の学校で受けたいいろんな教育をそのまま大学でも習わなければいけないということが分かつたんですね。自分としてはもう少し広い世界を見たい。しかも、日本の中だけではなくもつと世界で、地球上で役立つ仕事をしたいという風にだんだん芽が開いていきました。その時に当時ブラックジャックという漫画がとてもはやつていました、週間チャンピオンに連載していたんですけども、それがとても好きで毎週楽しみにしていました。「これがいいな。」っていうのをその時、高校三年の時ですけれども、初めて医者になりたいという気持ちになりました。そこから受験勉強を始めたんですけど受験をするにしても朝鮮学校の卒業生が入れる、受験資格のある大学が日本には教科しかなくて、しかも全部かなり高いレベルの大学しかありませんでした、先ずは受験資格を取らなければいけない。そこから始まりました。それから受験資格を取りまして、大学に入りました。地方の山形大学という所に入りました。京都大学の中に呼吸器疾患の専門の先生がいて、そこは呼吸器はばかりやつていて、からきつと勉強になりますよ。ということを教えてくださつたので、京都大学の方に呼吸器科の勉強に行くことになりました。そこからもう一〇年、京大からはいろんな他の病院に派遣されたりして、今は京大の方に戻つてきていますが、日々大学の仕事をしながらもずっと心の中に引っかかっていたのが、自分のやりたい仕事をできる環境にはいたのですけれども、そういうしているうちに、日本における北朝鮮に対する情報がどんどん雲行きが違つてきまして、私としても朝鮮学校卒業してからずっと北朝鮮のことは全く分からぬ状態で來ていたんですが、日本のマスクミが流す報道が本当に正しいのかどうか。それが自分の目で見ないと分からない、本当に信用できないのではないか、というよう

に感じ始めました。自分で行つてみることができないかどうかということから、北朝鮮の事に少しまた関心を持ち始めたんです。それまで、二〇〇〇年ぐらいまでは日本での医師としての勉強と仕事のほうに本当に忙しくて、外に目を向ける余裕が全くありませんでした。自分の生活すらも二四時間ほとんど病院に縛られるような生活だったので、外に目を向けることが出来ませんでした。きっかけといふと、私自身が腰痛を持ち始めまして、仕事の過酷さもあるんですねけれども、腰痛が出た時に自分が出来ること、手術をするということも大事なんだけども、それ以外に何かボランティアで出来ることがないかということを考え始めました。それで勤務をしながら休みの時間を使って北朝鮮への医療支援をできたらいいなということを考えて、当時結婚して夫がいるんですが、夫が協力というか、夫もそういうことをしてみたいと言つていきましたので、そこで一致しまして北朝鮮に医療支援をするという活動を一人で始めました。活動は二〇〇二年の六月から始めたんですけども、最初に考え始めたのは二〇〇〇年ぐらいから考え始めていたんですが、実際に実現したのは二年かかりました。その二年の間にいろんなところに働きかけて、北朝鮮に行くこと�이ことが難関だったのです。そこから仕事が始まりました。勿論勤務は普通に続けている状態で二人とも働きながらボランティアを続けていました。高 康浩（コ・カンホ）というのは私の夫です。医療支援の動機なんですが、本当に素朴な疑問からの出発です。北朝鮮の普通の人々が見えない。電話することも出来ませんし、今の日本で手に入る情報というのは、日本のマスコミからのものしかないので、自分の目でどうしても確かめてみたいと思いました。実際その医療現場はどうなっているのか、結核というのは私が専門にしているんですけども、結核はどうなっているのか、というのが一番知りたかったことです。入国は本当にできないのだろうか。実際入国するにはとても難しい手続きが必要ですけれども、入国することはできました。それから向こうに行つて医療支援を誰かしているのだろうか。日本からあるいはそれ以外の国から支援をしているのがどうか、知りたくて医療支援をしようということになりました。医療支援の原則なんですが、これは夫婦二人で考えたんですけども、医療現場に直接必要なものを届ける。その時に何が必要なのか、現場で働く医療従事者と必ず相談して決めることにしました。可能な限り現場を見せてもらつて、現状に合うものを持つていく。それから対等で人間的な信頼関係を築く。これはどうしてもボランティアの場合、相手に押し付けになつたりすることがありますし、逆に相手の言いなりになつて、無理をするというようなこともあると思うんですけれども、あくまでも対等で人間的な信頼関係を築くということを守ろうと一人で

最初に行つたのは二〇〇二年の六月。これは観光ツアー、この時は二〇〇一年W杯がありまして、それに伴つて北朝鮮ではアリランというイベントがありました。そのアリランイベントに一般の人を募集していましたので、そこに紛れ込むことができました。それまでは各方面にお願いして訪問できないかというようなことを言つていたのですが、北に親戚がない限りは無理だという風に言われていまして、やつと観光ツアーという形で入る事が出来ました。



但し向こうに行つてから私達は一切観光しないで病院に行きたい、その時は二五人分の結核の薬を持つていきました。その二五人分の薬を渡したいので、是非病院に連れて行つてほしいという話しをして、ホテルの中ですつと立てこもつておきました。実際に病院に行けたのは最後の日に行くことが出来ました。それまでは向こうの人も困つたと思うんですけれども、その対応してくれた人たちは病院の事なんか多く分知らないので、私達の許可をもらうために大変だったとは思うんですけど。ただ薬だけをもらつて、薬だけを置いていけと言われたので、やっぱり私達は薬を病院に届けるまでは、薬は帰りに海に捨てていくのでお願いして、病院に訪問する事が出来ました。そのあと三ヵ月から四ヶ月に一回結核の薬を持って訪問することになりました。これは訪問した先の病院を幾つか上げているんですねけれども、平壌(ピョンヤン)市は真ん中辺にあります。元山(ウォンサン)市というのは海のほうに、日本海(東海)のほうになります。それから平壌より少し南のところに沙里院(サリウォン)という都市がありますけれども、この三ヶ所を訪問することが出来ました。とくに私達は結核の病院、第三予防院と書いてあるのは結核の専門病院という意味です。第三というのが結核の感染症のことなんですかね、しかも平壌ではなく、で

きれば地方の病院に行きたいと希望を出して行く事にしました。平壌、元山、沙里院それ以外にも点で記してあるたくさんの結核の病院が北朝鮮にはあります。この資料はあとから知り合いでもらつた韓国のユージンベル財団というところのホームページで入手したものなんですかけれども、ユージンベル財団ではこれだけ多くの点で囲まれた病院各地に結核の薬を届けているということです。

これは平壌のホテルで荷作りをしている高 康浩です。

私達はいつも大体持参できるダンボール三つか四つと大きなスーツケース二つ持つていくんですけれども、必要なものを届けるのにこうやつて荷作りをして自分達で持つていくことにしています。中身は主に結核のお薬なんですがそれとも それ以外の抗生物質、先ほども金先生がおつしやつていたように、感染症は本当に怖い病気です。そういうものが北朝鮮では蔓延していますので、それを少しでも若い人たちが感染症で死なないようになにということを、私達は願つて抗生物質を持つて行きました。これは行つた日の打ち合わせなんですかけれども、必ず初日にこうやつて向こうの受け入れ機関とミーティングをして今回はどうことどこに。と要求をして向こうがじゃあどこどこに行きましょうという打ち合わせをします。それが全部叶う時もあれば、何の前触れもなく無くなる時もありました。これは実際平壌の結核病院に薬を持つていつたところです。こちらは白い袋があるんですけどもその中には、一人の結核患者をきちんと治すための薬が入つております。これは六ヶ月間毎日一日も逃さずに四種類の薬を飲むというプログラムで、これはWHO、日本では広く使われている方法です。勿論北朝鮮でも同じ方法で使われておりますので向こうの先生はとても喜んでおりました。これが最初の日に薬を持っていた時なんですかけれども、薬に飛びつかんばかりに開けて喜んでいる先生の表情が見えると思うんですねけれども、ちょっとと影になつて暗くなつていりますけれども、この先生は平壌の結核病院の内科の先生ですが、ものすごく熱心で、私達二人が行く度に喜んでくださいました。行つた時に薬だけではなくて何か必要なもので私達が可能なものだつたら持つてきますよという話をしたら、じゃあ注射針と注射器が足りないので欲しいという話になりまして、実際向こうでどういうものを使って、どういうものを私達が持つていけばいいのかということで、使つてあるものを見せてください。と言つたらこれを見せていただきて、処置室といふんですけれどもそこまで連れて行ってくれて見せてくれたのがこれです。針ももうほとんどない、注射器はもう何回も消毒して黒ずんでいるというか、そういう状態です。今、日本では注射器は全部一回使い捨てになつてい

ますが、向こうではまだまだガラスで、使い捨てよりは何回も使えるように消毒できるほうがいいんだと、向こうの先生はおっしゃっていましたので、そのとおりで、注射器に関してはガラスを持っていきました。ただ針に関しては必ず一回。針もたくさん持つてくるから、針はもう一回消毒で使うんじやなくて、針はちゃんと捨ててくださいとうことを伝えてあります。

こうやって向こうでどういう風に使っているか、それでこちらでは使い捨てのものを持つていったほうが便利じゃないかと、思つのですけれどもそうではなくて、向こうではガラスのほうが有用だと、いうようなことを言われたらやつぱりその通りで、向こうの欲しい、要求するようなものを、しかも納得できる物だつたらきちんと話し合つて持つていくというようなことを言いました。これも治療に使う道具なんですが、これはスウェーデン製と言つていましたけれども、胸に溜つた水を抜くための器具です。これもほとんど錆びて、何回も消毒していたものだつたのでこちらから新しいのを買って持つていきました。これは中に入つたときに患者さんのデータを私達が持つていつた薬でどういう風に治療しているかというカルテを全部残してもらつていますので、そのカルテを見せてもらつているところです。一人の患者さんに対し、これカルテなんんですけど、わら半紙でみすぼらしくは見えますがきちんと記録してとつておいてくれました。これは冬に行つたときですが、暖房も無い部屋でしたのでこの女性、奥におられる方が副院長の先生です。この先生もとても熱心で治療の難しい患者さん、六ヶ月間きちんと飲んだのに治らない患者さんをどうしたらしいかそういう風な話をしているところです。こちらはその病院の玄関に止まつていた車なんですけれども、これが韓国から寄贈されたレントゲン車でした。むこうでは私達が思つてない以上に、韓国からの医療支援が行き届いているという印象でした。ただ車はもらつたんですが、中身のフィルムなんですが、このフィルムがもう無いので写真が撮れない状況だというようなことがあります。日本の健康診断でもよく使う巻き形のフィルムなんですかれども、これがもう無いのでぜひ持つてきて欲しいといわれたので、次回、その次に訪問した時にはこれを何巻か持つて行きました。支援というのは箱物で一つドーンと贈るのも大事なんですかれども、そのあとにそれを使いこなすだけの事まで考えないと、相手にとつては何の役にも立たないんだなということをこのとき感じました。

これは元山にある病院です。手前にいる先生が元山の結核病院の院長で奥にいる方が副院長ですね。二人とも結核

のことについてはとても的確な診断と治療をされました。この方達とレントゲンを見ながらまた患者さんの治療について話し合っているところです。こちらから学会の雑誌を持つて行きましたがとても喜んでくださつて、日本語はできなけれども読むことができる方が多い。細かい質問等もたくさん持つていくと、次の時までに質問を溜めておいて色々な事を聞いてこられます。とても熱心な先生たちでした。これは実際の入院患者さんなんですかけれどもここは病室です。とても寒かったです。こここの病棟で三人とも結核の患者さんですかけれども、とくに真ん中の子が重症で咯血をして運ばれてそのあと私達の持つて行つた薬でここまでよくなつたという。治療がもう三ヶ月目くらいの時だつたんですけども、この子は両肺のひどい結核でして、今の真ん中の女性のレントゲンフィルムですが、日本では今、ここまで結核というのは先ず無い。彼女が早く治療して社会復帰したいです、って言うようなことを言つていたので、きつちり六ヶ月続けてくださいというようなことを会話で言つているところです。これは同じ病院なんですねけれども、韓国から送られてきた発電機が故障して動かない。これが故障しているらしいんだけど、この部品を買つてくれないかといわれたんで私達にはとてもそれは出来ない。そこまでお金はないですかという話を正直に言つて、ただ、お金はないけれどもこれが壊れていることを私達が日本に帰つて日本から韓国の財團に連絡することは出来ます。実際連絡をして私達が橋渡しをすることは出来ました。これは手術室の道具の全部だつたんですね。ずっと使わせてないということはすぐ分かりました。これは手術室です。立派な手術台と幾つか送られてきた機材がありましたが、電気が通つてないので実際使われてないということでしたが、先生達がおっしゃるのは、早くこれを使って手術をしたいと。この先生は呼吸器の外科医だつたんですけど、今は外科は機材の関係で出来ないという事をおつしやつっていました。これは検査室で検査の色々な資材が足りないとということで、私達が持つていけるものは何かという話を今聞いているところです。

こちらは元山にある孤児院に行きました。孤児院では結核で両親が亡くなられた子供達がいるということで、孤児院にも支援したいなという思いで、私達が希望したことでもあります。ここには直接結核の薬を持つていくのではなくて粉ミルクを主に持つていく、それから感染症に対しての、子供の為の抗生物質を持つて行くということをしていました。子供達をとても大事に育てられているなという印象で、はいているズボンのところにも、小さな刺繡でちゃんと名前が入つていて一人一人着るものも、ちゃんと区別して着せられているという印象でした。これは院長先生で

すね。女の院長先生で、私達いつも粉ミルクを贈つてはいるんですが、何か他に必要なものありますか?と聞いたらこれまで出してきて、粉ミルクを送つていただくのはありがたいんだけれども、粉ミルクを飲ませる為の哺乳瓶が無い。今、自分達のところにあるのは全部こうやつて曲がつてしまつていて、横からもれてしまふということ、何回も消毒して使うので仕方ないんだということを言つていたので、日本に帰つてきてから友人達に、子育て終わつてゐる友人が大半なんですけれども、声をかけましたら保育園をしている友人もいたので綺麗に保存してゐるものを持ってくれたりしました。これをまた郵便で送りました。

これは沙里院という所にある孤児院で抗生物質や石鹼を贈りました。これはその子供たちなんですが行く時に皮膚病の子がとても多いんですね。集団生活をしているのでどうしても伝染つてしまふのかそういうのもありましたので、皮膚につける抗生物質を贈りました。これは歯科の診療所です。夫が歯科医をしていますので歯科の診療所を是非みたいと。これは麻酔を打つてあるところなんですかれども、向こうでは麻酔を打たないで歯を抜きます。それで私達が麻酔薬を持つて行きますということで、キットを持つていつたらとても喜ばれました。皆さんもただでさえ歯を処置するのに痛いのはご存知だと思うんですけれども、麻酔なしで抜かれるときの痛みをちょっと想像してください。この患者さんたまたまその日に居合わせた患者さんですかれども「こんなに痛くなくしてくれてありがとうございます」と言つてとても感謝されました。向こうの歯科の診療所ではみんな工夫して、ない物の中で工夫をしてやつています。日本から比べると勿論遅れていますが、無い中で色々工夫してやつてあるのがよく分かりました。これも中を見せてほしいといつたら正直に見せてくれたんですけれども、本当に何も無い中で頑張つてあるなと思いました。これも日本では全く使われていないものだそうです。これに使う資材をもう廃業された先生のところを回つてうちの夫が集めたりしていました。もう三十年四〇年前の物だそうです。

これは元山にある歯科の病院に行つたところです。こちらは日本から持つて行つた機械なんですがとても喜ばれて、小さいものですが向こうではこういうもののがたいといふことで、立派な椅子を贈つてくれたりすることもあるんですが、その椅子自体を動かすためのコンプレッサーがなかつたり、だからこういう小物のほうがあれしいというような事を、向こうの先生はおつしやつていました。これも麻酔なしでやつてたので、麻酔を持つて行きました。これは年末年始の休みを利用していつた時で一五度でした。本当に寒くて、平壌のホテルの窓から撮つたんで

ですね。ちょっとと散歩しようかと思つて三歩くらい出たんですが、あまりにも寒いのですぐ戻つて、本当に凍りつく  
というかそういう中で普通に生活しているんだなあと。その時にお正月明けて行つた病院ですが、ここは小さな二階  
建ての診療所で、内科と歯科があるんです。ここには粉ミルクをたくさん持つて行つて、向こうで緊張した顔をされ  
ているのが院長さんです。これは院長室なんですが暖房が全くありませんでした。これは手術の道具ですがほとんど  
錆び付いたはさみでした。これは歯科の診療所ですが、その中にあるんですがこの椅子も全く動かない。そういうも  
のでした。ちょっと中を見せてくださいと言つたら引き出しを開けながら「何にも無いんですよ。」と言つて本当に  
何も無い引き出しを開けて、医療を何も無い中でも本当に明るくやつてあるなという印象でした。これは向こうの歯  
科医師と話をしているところで何が足りないか、今度何を送りましょうかとかそういう話をしているところです。  
これは四ヶ月くらいあとに行つた時なんですが先ほどの緊張していた院長先生がとてもにこやかに笑つて迎えてくれ  
ました。その病院の前で撮つたんですけども、綿の花がとても綺麗に咲いていて私が綺麗ですねと言つて撮つたと  
ころなんです。ここは粉ミルクを郵便で送りました。こういう本当にのどかな農村地帯、平壌から車で一時間ほどの  
所にあります。これは私の向かい側の腕が見えるところが院長先生なんですが、かぼちゃがここは名産だそう  
で、かぼちゃのおかゆを作つたのでは非食べて欲しいということで、私が行くのを楽しみにしていましたということ  
で、こちらのおかゆで出迎えてくれました。これは後日ですが平壌でユニセフの活動をしているダニエルさんといふ  
方に会つた時です。彼女は世界中を二年交代で回つていて北朝鮮に来るのは二回目です。彼女は今北朝鮮にいるんで  
すけれど「水のプロジェクト」子供たちが下痢で栄養失調になることが多いので、きれいな水を補給するために今ユ  
ニセフにいるということです。もう少ししたら自分は中東のほうに行くと言つていたんですが、その後どうなられた  
かは知りません。

それからこちらはWHO（世界保健機構）の、この方も平壌であつたんですがWHOのソレンセンさんというその  
時の北朝鮮の責任者の方で、この方はWHOは毎年九万人分の結核の薬を北朝鮮に投入している。それが最終的にき  
ちんと使われているかどうかのチェックまでは難しい、それは現場に任せているというようなことを仰つてました。  
私達が北朝鮮に医療支援をするときに必ずカンパをくれた方のお名前をご本人の承諾を得て必ず書くようにしており  
ます。それは北朝鮮の人々に日本から、あなたたちのことを思つている人たちが今いるんですよ、ということを知つて

もらいたいという意味を込めて、必ず名前を書くようになります。向こうで受け取る時は郵便局で受け取るんではけれども、受け取つたらこういう状態で一度必ず開けられてしまうんですが、中のもののがなくなつたことは一回もありません。チエックのために必ず開けることはあるようです。これはその郵便局から受け取つてホテルに持つて行つてまた仕分けをしているところの写真です。これは先ほどの診療所に行つた時にお土産にと言つて持たせてくれたものなんですが、日本からわざわざ薬やたくさんのものを持つてきてくれたのに、こんなものしかありません。と言うながら自分達の作ったのですと言つてくれたんですねが、私達がこれを持つて日本に帰ることはできなくて、ホテルの職員の方に配りましたけれども、とても気持ちがうれしかつたのでこうやって滞在期間中はホテルの部屋に飾つてありました。北朝鮮の話は以上です。大分時間おしてしまつて申し訳ございません。

仲尾 宏：ありがとうございました。在日コリアンの方のお仕事のもう一つの側面を見せていただきたいような気がします。それでは少し時間がおしておりますが休憩にはいつて、その間に質問ご感想をいただきたいと思います。

司 会：では第二部を三〇分から開始いたしますので、その間お手元にあります用紙にご意見あるいは「質問等をお書きくださいまして、こちらの箱にお入れください。それを基にしまして第二部を二人及びコーディネーターからお答えをさせて頂くことになります。よろしくお願ひ致します。

司 会：ただいまより第二部を開始いたします。よろしくお願ひいたします。

仲尾 宏：お待たせいたしました。それでは再開させていただきます。今日は、八人の方から質問及び感想をいただいております。感想のものにつきましては全部読ませていただきります。  
まず、最初のご質問です。「人と付き合う心構えとして、金さんも李さんもおっしゃつていましたが、金さんは「嫌なことされて痛みを感じるのは相手も自分も同じ。」、李さんは「ボランティアは相手に押し付けたり、言いなりに

なつて無理するものではなく、対等な信頼関係のもとでするもの。」など・・・。聞き逃した部分が有るので、もう少し、詳しくそれぞれの心構えを教えてください。というものです。では順番にお願いします。

金 郁喆：まず、自分をそのまま認める」とだと思います。悪い自分、いい自分、全部まとめて自分で。そういう気持ちで自分を好きにならないと。同じように、人の悪いところだけみたら好きにはなれません。人の悪いところもあるけど、自分の悪いところもある。自分のいいところもあれば、人のいいところもある。まとめてそのひとつでいいんじゃないか・・・と思つていただけたら楽だと思いますよ。自分を責めないで楽しんでください。お酒飲んでめちゃくちゃする人も、「ああ、それもわしゃ・・・と」。(この辺でたくさん知つていてる人もいます・・・。笑) そういうふうに認めて生きることも大事かなと思います。ただ、人見て好きになつていくのがコツの一つだと思ひます。

仲尾 宏：ありがとうございます。それでは李さんお願ひいたします。

李 美於：想像力を働かせることじゃないかなと思います。相手のことについて、たくさんの時間があつて、長く付き合えるのだったらともかく、電話や話も出来ないようないろいろの人たちが、どういう生活の中でどういう事を思つてているのだろうかというのは、先ほども金先生がおつしやいましたけれども、寒かつたら金先生がおつしやつていたのは、一皮剥けばみんな一緒やというようなことおつしやつていまつたけど、病気になつたらどういう事を望むか、そこから出発してボランティアの場合は、時間や経済的なものに制限がありますので、それを自分達が出来もないのに大きな事を言つて、これも出来るというようなことを言つて、相手を裏切るようなことがあつてはいけないなどいつも思つています。」ちらが良かれと思つて持つていつたものが全く役に立たない、ということも良くないので、やっぱり限られた時間でよく話し合いをして、それはいつも外来などで診察したり入院患者さんを診るときと一緒になんですかれども、やっぱり正直に話し合う。そういう相手が何を言いたいのか、何をして欲しいのか、そういう事を上手く読み取るということが大事なんじやないかなと思います。外来なんかでもとても混んでいるような時に、

短い時間の中でこちらの言うことに対する、患者さんの言いたいことを受け取るという時に、行き違いがあつては本当に命に関わってしまうので、そういうときに相手が何を望むかという事を、きちんと把握していくのは、人間としても医者としても大事なことなんぢやないかなと思います。

仲尾 宏：お二人からは私達一人一人の人生の教訓になるような言葉を一言ずつ頂いたと思います。もちろんそれはわかつてゐるよという方もあるかもしれませんけれども、こういう具体的な経験を通じての語られた言葉の語られた重み、それを改めて感じさせていただきました。次の方に移ります。二番目の方は「一五年ほど前に友人から聞いた話ですが、兄が大学勤務の医師で大学の中で活躍するために泣く泣く「帰化」をしたということでした。金先生の話にもありました国籍条項的な差別は改善に向かっているのでしょうか。」こういう質問が前半にあります。このことについて言いますと国家試験については、つまりこれは資格試験ですからこれは国籍条項はありません。それから公務員については国籍条項が今も残っている所があります。國家公務員はやはり日本国籍が必要だということになつております。それから地方公務員については地方公務員法には国籍条項はないんです。ところが旧自治省が「公権力の行使に關わるもの」「公の意志に、形成にかかるもの」については当然日本国籍を持っていることが法理であると。こういう解釈をして地方自治体に流しました。その結果、その通達によって金縛りになつて多くの地方自治体が国籍条項を持つていつたわけです。今少しづつ無くなりつつありますけれども、まだ職種・職務の上で国籍条項が残つてゐる。つまり採用を認めないという所もたくさんあるということであります。ちなみに京都市の場合はこういつた医療の現場に携わつてゐるお医者さんや看護師さんに於いては撤廃されております。それから一九八二年、今から二十五年前に国家公務員に關わる任用法、外国人の任用法というものが成立いたしました。この昨年度の報告のパンフレットをお求めの方はそこに年表がありますが八二年に国公立大学教員の外国人任用法制定とあります。これは在日の方が数年かかつて長く運動されていたんですが、日本政府はその在日の方々の運動に目覚めて改定をしたわけでもなくして、欧米からの研究者や教員を国公立大学で受け入れたかった。そういう背景もあってこれが通つたわけです。結果として在日の方々も含めて国公立大学ですから勿論国家公務員も含みます。外国人についても任用をすることが出来るということになった。それ以来増えました。今正確な数字を覚えて

いませんが、先ほど金先生もちょっとと言われたように任用期限、期限付きの制約というところが大部分で、期限付きでないという所はまだ少ないんですけれども、現在、在日の方も含めて数百名の方が国家公務員として就職されています。そういう所にはなっています。けれども、大学によつてはまだであるとか、任用期限が非常に厳しいとかそういう所もあるということが現状です。それからまた管理職の登用についても制限がある。つまりそういうことは法律上決まつてゐるわけではないが、そういう運用している自治体がまだまだ多いという所が実状であります。以上でお答えになつたかと思いますがとりあえず報告しておきましょう。

次は、北朝鮮の医薬品、医療器具等の現状をお聞かせいたしましたが、北朝鮮内の製造の現状はいかがなものでしようか。大変難しい質問ですが李先生お願ひします。

李 美於：私が直接向こうに行つたのは、たつた九回ですので全部把握しているわけではありません。ただ、先ほどスライドの中にも出てきた平壌の結核病院の副院長の女の先生が出てきましたけれども、彼女が言つていた言葉ですが、八〇年代までは結核の薬が十分あつたし、結核の薬は全部自分達で作つていた。結核の患者さんも減る方向に向かつていて。ということを彼女が言つっていました。少なくとも八〇年代というのは東西の壁が崩れてソ連、正確な年代はわからないんですが北朝鮮と東ヨーロッパとの友好関係が続いていた時期は良かつたんですね。何でかというとバーダー貿易といって、原料をもらつ代わりにそれを製造して、また輸出するというような貿易関係がずっと続いていた。ところが九〇年代からその関係が崩れまして、やり取りがまったく出来なくなつた。そこに加えて資源ですね。電気や石油・ガスがないので、北朝鮮の工場が動かなくなつたそうなんです。そこで二〇〇〇年からは自給自足が出来なくなつてきた、というようなことをその先生がおつしやつていました。今、韓国からの資源の援助、それからアメリカからの石油ガスの援助が始まつてますので、また工場が動き始めていい方向に向かつているんではないかと思うんですけども、具体的にどれだけの工場が動いてるかというの私は分かりません。

仲尾 宏：もう一つ関連ですが「北朝鮮への支援のための資金はどうから補われてゐるのでしょうか。」これは李先生が関わられたケースに限つて結構ですので。

李 美於：私は先ほど夫と二人でやつてゐるといつたんですが、自分達の貯金を全部はたいてやつています。友人や知人も応援してくれる方たちが何人かおりまして、彼ら彼女達からのカンパも勿論あるんですが、それは今まで使つてきた資金の恐らく一〇〇分の一くらいかななどいうぐらいで、ほとんど自分達のお金でやつてゐます。これは私達二人でやることで、二人しか人がいらないというわけではなくて、続けるだけでも大変なことなので、会計の報告をしたり、会としてきちんとすることは私達一人があまりにもずさんなので、そういう会計報告をしなくともいいというような友達がカンパをくれて、そのお金でやつてゐます。それ以外は全部自分達で、交通費もそうですし、向こうでの滞在費そのほかも全部自分達でやつています。

仲尾 宏：ありがとうございました。次へ参ります。「在日韓国人の方々がそもそも何故日本に住むようになり、「帰化」しないでいるのかなど根本の知識が無いので知りたい。」こういうお尋ねです。ごく簡単に申し上げますと一九一〇年に日本が朝鮮半島を日本の一部にしてしまいました。植民地にしてしまった。その結果朝鮮半島での生活が苦しくて日本に行けば仕事があるのでないか、苦しくても行つて家族に送金をしたい。そういう方々が出始めました。そして一九四〇年代までに約一三〇万の方々が日本の本土に移住されてきました。その後四年から四五年まで戦争が激化した時期ですね、その時に約七〇万の方が強制的に動員されたり、連行されたりしたという形で一九四五年的八月一五日。日本の敗戦・解放のときには約二〇〇万の人があられました。そのうちやはり一四〇万の方々は翌年の一年の間に帰られましたけれども、残り六〇万余の方があれ少し様子を見てから、あるいは子供が小さいから、あるいは帰るにも船がない、あるいはその他の事情でもう一度今までいたところにしばらく住んでみよう。そういうことが戦後の在日韓国人の方々の大勢です。この方々の国籍は日本が一九一〇年、大韓国帝国を併合した時に強制的に大日本帝国臣民になりました。戦後解放後もこの方々はすぐに韓国籍、朝鮮籍になられたわけではありません。日本国籍は潜在的に、法律の理屈上は一九五二年四月二八日、日本のサンフランシスコ条約による独立回復まで日本国籍がありました。ところがその四月二八日を期してこれも日本の法務省は法律ではなくて、通達によつて旧植民地出身者。即ち朝鮮半島、台湾出身者の国籍は、本日をもつてなくなつたものとみなすと通達を出した。その結果この六〇万の方々とその子孫の方は日本国籍がなくなつたわけです。その様に自分の意志に関わらず日本の国籍を背

負わされたりあるいは奪われたりしたというようになります。それで「帰化」というのは日本の国籍法という法律に基づいて国籍を取得する方法があるわけですが、それは法務大臣の裁量によって決められます。色々な条件がある。「帰化」の場合、経済的に安定していること、社会的地位があること、素行善良である。様々な条件を満たした上で法務大臣の、悪い表現で言えばさじ加減ひとつで決まるという方法です。ですからそこまでしてとらなくていいというお気持ちの方もおられます。ところが近年では三世・四世の方が増えてきて、もう日本に定住する事が決まっているんだから日本国籍をとろうという方が増えています。その法務大臣のさじ加減も最近緩んでいます。それで年間一万人ないし一万五〇〇〇人の方が日本国籍を取つておられるということが実情です。大まかなところはそういうことになります。時間の関係上また色々お尋ねもあると思いますが先に進ませていただきます。「震災の時にすぐ行けなかつたのが残念」というのが良く伝わってきた。血の止め方が違つたら上のことを参考になります。「今日は大変勉強になりましたね。「ボランティアは色々な方の支援があるのか、対話を大切にされているのはとても大切だと思いました。」支援のことについては先ほどお話ししていただきました。

李 美於：ちょっと付け加えさせてもらいます。私は勤務医という立場でボランティア活動をなるべく休みの日を利用してやつてているんですけども、そうでなくてどうしても平日一日はかかってしまうんですね。そういうときに勤務先の病院では、私があけた穴を仲間がちゃんと埋めてくれます。そういうことも私がボランティア活動をするという事を周りの勤務先の人達が、認めてくれていると私は勝手に解放しているんですが、いやな顔もせずにチーム医療ですので、本当に誰か一人穴が開く場合はそこを埋めるのにまた周りの人が、倍くらい働かないといけないという事をお互い様であることなんですね。そういう事をいやな顔をせずにやつてくれている仲間がいるという、それは直接北朝鮮に行つて治療している、支援していると言うわけではないんですけど、そういう支えてくれている仲間がいる、ということを伝えとかなければいけないなと思いました。金銭の支援ではないのですが、助けてくれる仲間がいるという事を伝えさせていただきります。

仲尾 宏：あと四人の方のご感想がありますがこれ一応全部読み上げて御一人には最後に一言ずつご感想を頂くと

いうことにしたいと思います。次の方。

「在日というだけで日本で不当な差別を受けていることに怒りを感じる。日本に強制連行されて日本に住んでいる在日の人たちに人間皆平等ということで就職や国家試験の国籍条項をなくして平等にして欲しい。外国人登録もなくて日本人と同じにして欲しい。こつこつと活動されているお二人の活動は立派だが日本の社会を変えていかなければいけないと思う。真的平等を勝ち取るために社会を変えないといけないと思う。選挙権も勝ち取らねばならない。」こういうふご感想の方です。この中で外国人登録の問題が出ておりますが、今、日本人は住民基本台帳に基いて住民登録をする。外国籍の人は全員外国人登録をする。こういうことに二つに分かれております。これは外国人登録は外国人の管理のためにある法律として、住民サービスの法律ではないという所からこういうようなご感想はまつとうなことだと思いますが、最近の新聞情報でちょっとともれてきているのは新たに外国人登録も外国人住民基本台帳のようなものにしようとする動きがあるようです。ところがそれは結局のところ日本人の住民基本台帳法ではなくてやはりカードがあつて、その在留登録カードを持たねばならない。今のものと余り変わらない、むしろ外国籍の方が日本国内でいつどこにいるかという事をいつでも把握できる様な、どうもそういう内容ではないかという観測も出ておりますので予断を許しません。それから選挙権のことについては国政選挙と地方選挙があります。国政選挙というのはやはり国籍に結びついているわけですね。だから今例えれば参議院議員で白眞勲（ペク・チンファン）という方がおられます。この方は日本国籍を取つてそして選挙権、被選挙権ともあつてそれで当選されている。他にも中国系、フィンランド系の方も参議院議員におられる、こういう実状です。地方選挙権については、これは地方の住民であるから地方自治法の精神に沿つて地方参政権は認められるべきである、と意見が多く三分の二以上の地方自治体の議会で決議されております。京都市もそうです。しかし政党レベルでのこの問題については最近も少し動きがあるようですけれども、色んな意見があつてまとまらずに今まで継続審議あるいは廃案を繰り返しているということが実状です。次の方に移ります。

「在日の方からのお話しをお聞きするということ以前に、実際の医療の現場で活躍されているドクターからのお話しをお聞きすることなどまたとない機会ですのでとても興味深く聞き入りました。お二人とも本当に熱心に命の大切さ、人間の大切さ、人も自分も大事という基本的なお話を切々としていただき、本当に大切なことを改めて教えてい

ただいた氣がします。在日ということで様々な制約があることはとても悲しいことです。日本人としてしっかりと受け止め考へていかねばならないことだと思うのですが、具体的に何をしていくべきなのか考へ付かないという所が本音です。自分が先ず理解すること、そしてそれを人に伝えていくということくらいかと。仕事で外国人登録事務をしていたことがあります。留学生・就学生等ニューカマーの方々とオールドカマーの方々が一緒に登録という矛盾。選挙権がないという事実どれだけの日本人が知つてゐるのでしょうか。」こういうご意見です。もう一つのご意見。

「看護学校のとき同級生に在日一世の方が結構いて、とても明るくて樂しかつたこと。就職してから市立病院でしたが在日の医師グループがあつて、私が余りに興味を持つてみていたのでいやがられたことを思い出します。今直接話をする機会はごくすこく少ない。特にこのごろの拉致事件、報道が始まつてからは公然と公道で立ち話をしにくく霧雨気です。私は患者として出会つた在日の方と年賀状のやり取りをしていますが、何も力になれないのが苦しい時があり、若い頃に日本に来て年老いた一世の人々はたくましく力があつて仲間を作つておられます。今の若い人々は？日本の政治のあり方がいけないのだけれども自然に話し合つたり学んだりしてみたいと思う。特別な講座に行かなくても。想いながら今日来ました。意見とも質問ともつかずごめんなさい。」こういう感想をお寄せいただきたいと思います。そこまでのところでお二人からそれぞれ一言ずつ今の感想をお聞かせいただきたいのですが、もう一つ、実はあります。その方は私に対する質問です。

「今日のテーマと離れているのですみませんが。①京都造形芸術大学というところは何故アジア志向が強いのでしょうか。②仲尾先生はどうしてこのようなシンポジウムをされるのですか。」こういう私に対するお尋ねです。まず第一番目のほうは確かにアジアとの交流は色々やつておりますが元々は一九七〇年代に中国の西安のデザインの先生方を研修生という形で迎えたことから始まつております。そして韓国との関係では韓国の芸術系総合大学である弘益（ホンイク）大学を始めとした大学と交流がありますが、それも特にそればかりやつているわけでもなく熱心な先生がいる時は進むし、そうじやないときは少し中途半端になると、そういう試行錯誤を繰り返している程度でこのように評価されることは大変ありがたいのですが、とにかくアジアを中心的に日本の芸術や文化を考えていかねばならないという、そういう理念だけは持つております。それから私がこのシンポジウムに関わったのは、この国際交流会館が出来ました時にそもそもどういう事をやつていつたらしいだろうか、色々アイデアや思いを聞かせてい

いただきたいという当時の責任者の方からお話をありますて、国際交流というとやはりどうしても欧米の方を中心に考えてしまう。京都の場合は留学生のことが中心に考えてしまいます。それも大事なんだけれどもやはり京都の外国籍の方、今から二〇年前も今も同じですが八割は在日コリアンの方である。そういう人々との関わりを抜きにして国際交流と言つてもあんまりそれは効果的でもなければ市民の方々の気持ちにも添わない。だからやはり在日のことは重視するべきであるという事をかなり力を入れて申した記憶があります。そんなわけでこのフォーラムが一五年間続くということにもなっておりました。どうしてという理由ですがこれは今日皆さん方が色々な感想を寄せていただきました。そして、お二人の方々からの貴重なご意見いただきております。そのような事を私も学びたいから続けていると。そういうことに尽きます。お答えになつたかどうかは分かりませんがとりあえずその程度答えさせていただきます。それでは今日の全体の、特に最後の三人の方々のご感想を含めてですね、お二人から一言ずつ締めの言葉を頂きたいと思いますが金先生から。

金 郁詰・僕が今日お話をさせてもらった基本は、行政なり制度で決まったものは制度を改めて欲しい。個人的な感情、そういう差別意識というのは、人権教育でだんだん広がつていただければいいかと。それは日本のためであると僕は思います。僕が「帰化」しないのはよく子供に聞かれるんです。何でお父さん日本人に生んでくれなかつたのといいますよ。みんな本名でいつてますから「朝鮮」とか「キムチ」とかいじめられますけれども、ちゃんと説得するのは「お前、じやあそなにいじめる日本人になりたいの?」日本人が本当に僕らを大事にして住みやすい社会にしてくれたらいつでも「帰化」する。私は差別する側には立ちたくないから、日本人にはまだならないと言つてます。いずれ「帰化」すると思います。当然、朝鮮の通信使のお話の中でもあります、みんないはずれ同化するとおもいます。子供達は韓国と日本がサッカーしてたら、日本を応援してますので当然そういうことになると思います。それでいいんです。でもそういう葛藤の時代があつたという事を残すことはものすごく大切です。またいつか将来逆転するかも知れません。日本が中国に攻められて植民地にされるかもしれない。同じことはいつでも起くるんです。ですから大事なところは『やつたやられた』ということではない。どうすればいいかと日本の中でも、そういう事を問題にしたという事実を歴史に残したいと思います。ただそれだけです。それと、皆さん車運転されると思いますけれど

も、横から追い抜いたら腹立ちますよね。運転するやつは狼かなんか極悪非道やと思うでしょ。僕も短気ですから追いかけて撃ち殺したろかと思うくらいすぐ腹立ちますけれども、ぱっと見たら教授やつたりしてね、ですからそういう見かたは、錯覚とか思い違いとか、自分の自我からくる生理的な反発言うのは自分でやっぱり工夫していくかないと。あらゆるステレオタイプから自分から努力して外していかないと駄目かなと思います。

仲尾 宏：それでは李さんおねがいします。

李 美於：今日、関心を持つてきてくださった方本当にありがとうございました。関心もつてくれた方に言うのもなんですけれども、これを機会にもつともつと関心を持つて最後のこの書いている方は、「なんとなく日本人が朝鮮人に言うのに憚ってしまう。」というか、遠慮しているようなところがあるんですが、是非そこからもう一步踏み出して、そこからが本当の友達になれるんじやないかなと思うので、勇気を出して、差別をされる側が言うのも変なんですけれども、差別の無い対等な立場になるというのは本当に勇氣のいることだと思います。嫌われたらどうしようかな、嫌がれたらどうしようかなっていうのもひとつあって、そこを通り越して本当の友達になれるんじやないかなともいます。ですから是非関心を持ち続けて一つのハードルを越えていただけたらなと思います。私自身も今後例えば朝鮮籍の今まで、韓国籍の今まで日本の選挙権がもらえるという話が今回国会でも出ていると思うんですけれども、そうなつた時に日本人でないというのが少し戸惑いとしてあるんですね。自分としてもそういう事を考えていかなればいけないところに立たされている。帰化しないというのは自分のプライドの問題なので当然としても、そのあとで日本人と同じよう暮らしていくのにここで税金は今までちゃんと払っていますけれどもそういう選挙権の問題が出てきた時にどういう風に対応していくか、今の日本の政治の制度を全く知らないのに、ここから自分が日本人としてやつていけるのかというような、逆に戸惑いもあります。だからそれを考える上でも私達のほうからもどんどん日本人と接していかなければいけないと思っていますし、よろしくお願ひします。ありがとうございました。

仲尾 宏：ありがとうございました。お二人から率直なご感想を頂いたので、それはそれでまた今日の私が改めて

まとめのまでも無くいい結論といいますか、次回へのつながりの言葉としていたいたと思います。今年もあと三回あります。こういった場所に参加して頂く」とだけでもやはり在日と日本人とのつながりの輪ができるいくような気がしますので、是非とも次回以降もお誘いあわせの上多数お越しください。それでは今日のフォーラムこれで終わらせていただきます。どうもお二人ありがとうございました。

司会：本日はありがとうございました。ご意見やご質問をまだ間に合わなかつた方がいらっしゃいましたら、お帰りのときにお渡しください。またもう少しゆっくり考えてみたいなと思われる方は、はがきを用意してございますのでお持ちいただきまして、また投函していただければと思います。本日はありがとうございました。次回は来週金曜日同じ時刻です。お待ちしております。

## 第二回 「地域医療機関ではたらく」

パネリスト

崔 秀賢氏 (サイ シュウケン 在日二世・

岩倉病院 院長)

俞 正根氏 (ユ チヨングン 在日一世・

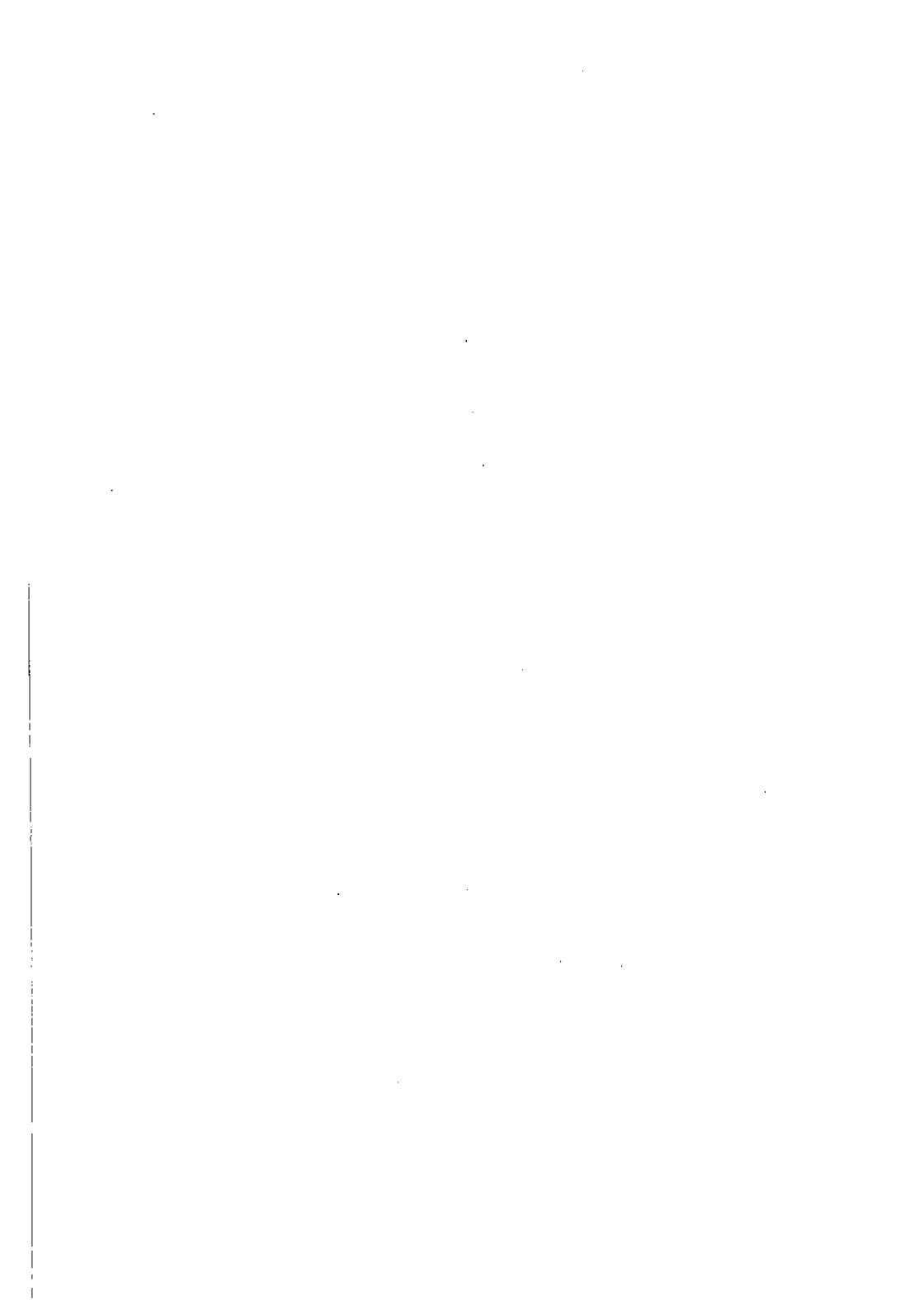
ゆうクリニツク 院長)

コーディネーター

仲尾 宏氏 (ナカオ ヒロシ)

(京都造形芸術大学客員教授)

一〇〇八年二月二十二日 (金) 開催



司会：お待たせいたしました。それでは連続フォーラム「チヨゴリときもの」をはじめさせていただきます。今年は「医療と介護の現場で」というテーマを設けまして、四回開催することとしています。先週は第一回目としまして「大学等に勤務する医師として」というテーマでお話しを頂きました。今日は第二回目としまして「地域医療機関ではたらく」というテーマでお話しを頂きたいと思います。それでは皆様のお手元にある資料に基いて進行させて頂きたいと思います。まず一部と二部を分けまして一部ではパネリストお二人のお話を聞きます。そして休憩を挟みまして第二部で質疑応答に移ろうと思います。その質疑応答は、皆様のお手元に質問用紙があると存じますが、この用紙に休憩の間にご質問あるいはご意見ありましたら記入いただきまして、それを基にしまして第二部の質疑応答で使いたいと思っています。それではパネリストの方をご紹介いたします。まずお一人目ですけれども岩倉病院の院長で崔秀賢（サイ・シュウケン）さん。よろしくお願ひします。もう一人はゆうクリニックの院長をしておられます。愈正根（ユ・チヨングン）先生です。コーディネーターは一回目から、五年前からずっとコーディネーターをお願いしております仲尾宏先生にお願いしております。ではよろしくお願ひします。



仲尾 宏氏

仲尾 宏：皆さんこんにちは。前回と異なつて今日はとても暖かい日になりました。前回は今もご紹介ありましたように国公立の勤務医をなさつてお二人に来ていただきました。今回は地域医療ですね、いわゆるかかりつけのお医者さんということで区分けをしましてお二人に来ていただきました。またこれは偶然ですけれどもそのうちお一人の崔先生はいわゆる病院の院長先生、つまり療養施設のある病院のある院長先生というお立場で精神科の先生であります。もう一人の方は内科の先生で、ゆうクリニックといいういわゆるかかりつけの、地域のお医者さんであります。そのように性格が異なつたお二人をお迎えで伺っているのでそれぞれの異なる治療の現場のお話しをしていただけるのではないかと思います。お手元にこの愈先生の今日のお話のレジュメがあります。それから崔先生のほうは非常に詳しい在日コリアンのアイデンティティという文章を書いていただいております。今日のお話もほぼこれの内容と重なると思いますけれども、これをずっと見ていただくと一時間以上かかるのでこれはまたお話を聞いたあとで

ゆつくりお家でみていただけたらと思います。それからその質問表のあとに「チョゴリときものNo.一五」として京都市の外国籍在職者数という数字がございます。これは今日の話とは直接関わりはありませんけれども、前回の勤務との関連で、それからまた今後の看護師さんやその他の方々の関係で事務局にこういう資料を作つていただきました。右側の大学教員とありますが、二人です。これは京都市の場合は京都市立の大学、芸術大学、それから看護専大であるとか、そういう所の先生ということになります。それから京都市の市立病院については統計には上がつてきてないんです。というのは何人かの先生がいらっしゃるようですが、その方々は嘱託職員であつて正規の公務員ではないというようなことからこの表にはできていないということが言えるのではないかと思います。それから左の欄上一般技術職お一人ですが、そのあと薬剤師があつて一般事務職という職種があるんですがそこはあがつております。ということは○だということですね。一般技術職並びに事務職については今から数年前に受験をすることが出来るというように改まつたんですが現在は在籍しておられないというになります。それからもう一つはこの表に出てこないのは、この京都市の職員を受験される以前に日本国籍をとられた方、あるいはこの就職する、京都市の職員になられたあとに日本国籍を取得された方、そういう方々はこれカウントにはいっていません。そういう方々を入れたら実際はもっと多いんじやないかと推定されますが、それは統計上でてこないので、今、外国籍で京都市の職員でこのような資格、あるいは職種についておられる方々の人数として見ていただければいいかと思います。それでは前置きはこれくらいにして早速本題に入ることに致しまして、崔 秀賢先生からまず約二五分くらいのお話を伺いたいと思いますのでよろしくお願ひします。

崔 秀賢：皆さんこんにちは。皆様のお手元にあります「資料」は五年半ほど前に少し話すことがありましたので書いておりますが、今日は、これには余り沿わないでちょっとと簡略に私の在日として医療職を選んだわけ、あるいは精神科を選んだわけはどういうものなのかということで、お話しできたらいいかなと思います。

私が生まれましたのは、第二次世界大戦中の一九四三年に東京で生まれました。その当時創氏改名というのがありましたので、私の性は「海山」でした。海州という本貫の「海」いう字と、「崔」という苗字の「山かんむり」を取つて「海山」でした。私は生まれまして二年間は日本人として育つたという状況です。時々「先生はどこの生まれ



崔 賢煥

や」とか「何人や」とか聞かれるんですけれど、「俺は東京生れや」というと「すごいな」とか言つていただけて、まあ東京生まれでよかつたと思わないでもないです。私の父親は余りに日本語が上手で、また、キリスト教の牧師になりたくて韓国にいた時に、日本の天皇とキリスト教の神様とだつたらどつちが偉いのか、ということで随分交番所に呼ばれたりしているうちに、私の父親が「古事記」だと「日本書紀」のことを

渡つて、下関から蒸気機関車で東京に来ましたので、多分一四時間ぐらいでは行けてないと思います。私の母親はずっと日本語が下手で、家の中でいつも韓國語で喋つておりましたので、私は韓國語は喋りますけども、学校に行つておりませんので書くのはほとんど出来ない、そういう状況です。私の母親は昭和一七年ごろに、姉二人と関門海峡を船でのり、幸いなことに軽井沢に疎開したんです。「先生どこで育つたんや」と言わると、「東京で生まれで、軽井沢にいたんや」と言うと「うそやろ」と言われるんです。私には全然記憶はありませんけれど、よく「お前は食うもんなかつたけど、軽井沢のりん」「育つたんだ」と言われたりした記憶があります。京都にも二年ほどいたんですけど、多分戦争が終わった年、昭和の二〇年から一年間ほどは西院の方の教会で、伝道師として父が働いていた記憶がありますが、今日皆様にお伝えたいのは、尼崎に私が昭和二二年、戦争終わつて二年後から約一〇年間、一四歳までいた時の話と、そのあとの大坂の生野区で育つたときのお話をさせていただければいいかなと思います。

皆様は、多分武庫川というのをご存知だとおもうんですけど、非常に河原が綺麗で、松の並木がすごく立派なんですね。それで私は今でも武庫川と言いますとノスタルジーを感じますけれども、四つぐらいから一〇歳ぐらいまでだつたら武庫川にもう一度住みたいと、行ってみたいと思う町です。その当時父が赴任した頃はまだ裸電球がありまして、部屋に裸電球という様な貧しい時代でしたけれども、そこは守る部と書いて守部つて言つてたんです。私がそこに居たときは全然分からなかつたですが、そこはいわゆる同和地区だつたんですね、後から知つたのですが。それから沖縄から来ている人と在日朝鮮人・韓国人がいて、今から言いますと、被差別のグループに住友金属とか日

清製粉の社宅があつたんです。住友金属の社宅には三メートルくらいの堀がありまして、人が登れない形になつてい  
たんですが、後から考えると登らせないよう、わざとしてたんじやないかなと思わないでもないです。また、後ほ  
どお話しする機会があるかと思いますけども、私は四つから一四歳位迄「お前のところはお父さんは日本人で、お母  
さんは朝鮮人やろ」とか言われて育つた記憶ありますけど、まあ小学生の頃は若干の差別とかありましたけど、まあ  
仲良く暮らしたほうかなと思わないでもない。それから一四歳で私の父親は非常に不器用な人間ですから、すぐリ  
コールと言つて教会を解雇される。それでトラックに乗つて武庫川から大阪の生野区の教会に招聘されたんです。非  
常に大きな教会です。「ご存知のように在日の韓国人・朝鮮人が一番多い所は、大阪市の生野区だとと言われておりま  
す。よくテレビで御幸森とかコリアンタウンというところが映つたりしますけど、民族のチマチヨゴリとか、韓國  
の食べ物などかが普段いつもある場所。しかし、地域の日本人は今もそうかもわかりませんけど、その当時もここは  
ちょっと危ないここやと思つました。なぜかというと在日の朝鮮人がいるということなんです。私も大学に入りました  
て同級生が生野区の、今は無くなつた猪飼野といふいう名前があつた所ですけど、猪を飼う野原つて書きますけれど、  
「猪飼野の人」に家庭教師してくれつて言われているけど、夜行つてちゃんと帰つてこられるやろか」と言われるよう  
な地域だつた訳です。まあ私はそこで中学校と高校と大学を出ましたので、第二のふるさとではあるわけですが、後  
ほどまたお話しが繋がるかと思うんですけども、その当時は公立高校に入るのにも差別があった。私の在日の同級  
生二人が天王寺高校に行こうと思つたら二人とも父親が呼び出されて「悪いがあんたら二人とも通ることはありえな  
いから、一人はちょっと違つところに行つてくれ」と言われたようなことがあります。公立高校でもまあ通らないと  
いうことです。それからあるミッションスクールは、在日の人の願書も受け付けてくれなかつた。大学を出ましても  
就職出来ない。私の一年上の国立大学の文学部か法学部を出た人も就職できなから、零細企業に勤めておりまし  
た。私の高校の同級生で京大の航空学科を出た人がいるんですけど、就職は勿論出来なかつた。普通であれば日本  
航空とか全日空とかに就職して、今頃は局長クラスになつてたりしてもおかしくないんですけど、生野区のクー  
ラー取り付け業の跡を繼いでいる。いつも年賀状をやり取りしてもう随分長い間ですけど、「元気ですか。今年も頑  
張つてくださいよ」と。そういう時代ですね。国民保険も無ければ年金にも入れない。その当時は勿論公営団地にも  
入れない、と言う非常に差別がきつい時に育つたという具合です。

たくさん話しますと時間をオーバーしますが、中学校の頃に朝礼がありまして、グランドでの朝礼が終わる頃になりましたら、教師が大きな声で「おい崔、残れ！」と言うんですね。それできよつとして何事かと思つてしまふら  
いましたら違う教師が「違う違うその崔やなくて別の崔や」とか言つて、私はすごすこと去つていったんですけど、勿論すまんとか、ごめんとかは全然言われないです。それから私の名前は、父親に崔「ひでよし」と言う風につけられていましたんですけど、中学校の卒業式のリハーサルがあつたんです。それで学年主任が順番にずっと名前を呼んだんですけど、私の名前をすぐに読めず、その先生は「崔秀……読めんような字使うな」とか言われまして、リハーサルで怒られた記憶があります。だから在日の人には三〇%くらい、あるいは学校によりましては四〇%から五〇%ほどおりましたけど、まあ真っ当にはなかなか扱つてもらえなかつた記憶があります。

高校に入りましたて、私もすぐ鼻高々だったんですが、九月に私が一六歳の誕生日になりましたら、生野区の区役所にちょっと出て来いということで授業を休んで行きましたら、在日の人が何十人と並ばれてるんですね。それは一六歳になつた人は強制的に区役所に行つて外国人登録をさせられるんです。それはもう何て言つたらいいでしょうかね。今は区役所に行つたら「崔様」とか呼ばれるんですけど、その時はそんなんじゃなくて「こつち並んで、もつとこつち並んで」とか言われて、自分の指一〇本全部こうやつて指紋をとられるんです。それはもうどういつたらいんでしょう、物扱い。自分が物扱いですね。私なりに誇りを持つて生きていたつもりですけど、そこに行つたら全部指紋はこうポンとじやなく、こうやつて指を全面採られるんです。それでちり紙をくれてしばらくしたらもう帰つてと言われたんですけど、それつきり私は今日でも悪いことをして、指紋が残つたら絶対捕まるといつても確信しています。それは一〇本全部採られているわけです。捨てたと言つても私は信用しないです。そういうことで私の中で高校生位から在日韓国人という言葉に対する恐怖心がでてきたんです。例えば授業中に高一・高二くらいの時に「チヨー」なんとかと言う言葉がありますと、朝鮮つて言われるんじやないかなと、そういう恐怖感にさいなまれるようになりました。表では私は元気そうに見えていたんですけど非常に怯えて暮らした。そういう経験があります。

今日お話しする内容で何故医者になつて、何故精神科を選んだのかといつお話をしなきやいけない様ですけど、私は父親が牧師をしていましたから、ずっと神学部へ行かなきやいかんと勝手に思い込んでいた。それはまあ選択肢は

無いわけでそう思い込んでいました。非常に父親に権限がありましたから、逆らうことには出来なかつたんですけど、高校二年生の頃、突然父親がちょっと来いという事で行きましたら「お前シユバイツァー知つていてるだろ」というんですね。それで「シユバイツァー知つていてるけど」って言つたら、「先に医者になつてそれから神学やつたら良いじゃないか」と言い出したんです急に。私は神学部に行くつもりだつたんですけど、あ、そうか、そしたら医学部を受けなきやいかんのやな。と言うことで選んだわけでして、別に自分で選んだわけではないのです。それと大学に入つて教養学部とか随分楽しくて、この生活を自分らには華やかに生きていたんですけど、専門科に行つて三年生と四年生の一年半位は完全に人生を捨ててしまつたような、午前中はもう授業は行かなくて、夜中は三時位まで起きていて一時くらいに起きて大学に行くので「サボリの雀」とかつてよく言われたんです。実は、私は蛙も触れないんです。高校のとき蛙の解剖の時に蛙がたまたま逃げたんですけど、女の生徒が僕の前にその蛙を持ってきたから僕もちよつとビビりまして、「そこににおいてくれ」と言うことでピンセットで押さえたくらいなんで、医者になるようなキヤラクターでない。それで色々考えたところ、どうも自分は考え方がおかしいのと、脳くらい勉強したらしいかなと思つたんですけど、その時考えたのは大脳生理学科、脳外科医か精神科医だと思つたんですけど、まあ大脳生理学では飯を食えない。私が小学生の頃、私の母親は月の半ばぐらいになると泣いていることがありました。僕が九つか一〇くらいに「オモニなんで泣いているの」って言つたら、背中向けて月の半ばになつたら、お金が無いと言つたわけですよ。だから私は兄弟が多かつたせいもあるんですけど、蛙の頭と大根の葉つばで育つたんです。だから私のお袋の味つて言うのは、DHAの多い鮭の頭でビタミンの多い大根の葉つば。みんなただでくれたんです。母親の事を知つていましたから。そういう中で自分が育ちましたので、自分の中でもそのどういつたらいでしようかね、貧しいのはあかんと、それから弟妹が三人ずついましたから、助けなきやいかんと思つたので、大脳生理学では飯は食えないと思つました。体力も無いから脳外科も無理なので、それなら精神科やろうかということで、大学の四年生の頃に精神科を選んだということです。

卒業して精神科医をやると言つたら両親共かなり反対しまして「お前は一生懸命に勉強したのに何で精神科をやるのか」って言われた時は私もがっくりきました。それが牧師と牧師の妻の言うセリフかと思つて驚いた記憶があります。まあ五年くらい経つたら許してくれたと思います。

私がここで皆様にお伝えしたいことは、大学にいた頃、聖書研究会だと人間と命とかと言う雑誌を創刊したりしました。それで自分で意味を探そうと言つていたんですが、たまたまマチヤンスがありまして、皆様ご存知だと思いますけど、赤穂と岡山の間の南の方の瀬戸内海に長島つて島があるんですけども、その島にはいわゆるハンセン病の療養所が二つあるんです。それで東側が愛生園で、西側が光明園なんですねけれど、光明園に二泊三日で何度も行く事になつた記憶があります。訪問した私たちは、そこの教会で礼拝をするときは、段の上に座つてゐる。柵があるんですけども、療養所の皆さんには、畳の上に座つておられて、終わつたら畳に出て座つて交流するという。その時、自分の中にある差別意識と戦つことがあります。

ちよつと話が戻りますけれど、私が尼崎の守部で暮らしていたときに、一番何が辛かつたかといいますと、誤解がないように聞いていただきたいんですけど、その当時はまだハンセン病の方たちの収容は始まつていなかつたんですね。ですから鼻だとか口とかが結節性で、もがれるような形の方が自分の家に住むに住めないので、町を回つて家の前に立つてそこから五〇円とか、今で言うと五〇〇円とか一〇〇〇円なのかも分かりませんが、いただく。そういう人たちと道で出くわすことがあるんです。その当時は小さい子供たちの世界でその人たちに対して「ノゴノゴリ」という、意味は良く分かりませんけど「ノゴノゴリ」と道で出会つたらどうしよう、というのがありますけれど、時々登校する途中向こうから歩いてこられることがありますけれど、すごくびっくりした記憶があるんです。それは私自身が差別されていたと言うより、差別していたということなんですね。

「砂の器」という松本清張が書いた小説をご存知だと思いますけれど、福井の方の山中で暮らしていたところ、自分の皮膚にいろんなことが起こつてきたので、よくよく調べてみたらハンセン病になつていたという。それで嫁さんも居なくなつてしまつたので、一人の男の子を連れて村から逃げていく、というのがストーリーなんです。ずっと海岸線沿いで松江とかに行つて、その近くで病に倒れ、子どもと生き別れになり、その子供が有名なピアニストになつた。そういう過去の生い立ちの発覚を恐れたため、息子が殺人を犯すというのが砂の器のストーリーです。私の中にはそういう自分の中に恐怖、自分が差別されてきた不安とかが、いっぱいあつたんですけども、自分の中に障害を持つている人に対する、自分の中の恐怖心があるのを始めて知つたのです。そういうものと精神科を選んだこと、いうのは結びついたんです。

精神疾患を持つていますと、多分皆様も精神科の病院だつたら鍵が閉まつてゐるだろう。鉄格子があつて外出出来ないようになつてゐるだらう、と思われると思うんですが、言葉は悪いですけれど残念ながら私どもの病院には、鍵・鉄格子は無いんです。今、私どもの病院は五一〇床の病院で九つの病棟があるんですが、認知症の病棟六〇床以外は鍵がかかつてない。急性期の病棟も鍵がかかつてない。もし皆様がお越しになられましたら、急性期の病棟に入つていかれると、中でオセロをしたりトランプをしたりしている人たちに出会われる。保護室にいる人達とスタッフが渾然となつてゐる姿を見られるんです。見学に来ましたと言つたら入れてくれる。鍵を使う必要は無い。私のこの鍵は病院の鍵なんですけど、自分の部屋の鍵と、その病棟に入りする鍵なんですけれど、これは使う事は無い。それはそこまでに至るまでの戦いと言うものがあるわけでして、それと私の差別、あるいは自分自身の障害に対する恐怖心、そういうものを抜きにして岩倉病院の開放化の運動、開放化、そして人間としてどうお互に生きていくか、ということと分けて考へる事は出来ないということです。私が今日皆様にお話ししたいことの最大の事の一つは、人間はいっぱい差別されて生きると思うんですね。それは決して民族差別だけではない。あるいは皮膚の色だと身体的な問題など、いろんな障害を持って生きているわけでして、例えば、私は今年で六四から六五になるんですけども、例えば七〇になつたらどうなるのか、七五になればどうなるのかという自分の老いに対する不安、これは皆さんも変わらないと思います。

私、行きつけの好きなお店が四条大宮のところにあるんですねけれども、一度そこに行きましたら、ご年配の多分八〇歳位になつていらつしやるご婦人がテーブル席に来られまして、杖をついてお一人で四人テーブルに座つてらつしやるんですけども、本当にとほとほと来られて杖を落しても座つて注文しておられる。そういう姿を一年位前に拝見したんですが、やっぱりその姿つですぐ、私が一〇年前とか二〇年前だつたらわからない。年をとつてもけなげに生きようとしておられる、そういう方をどう私達が共感する、あるいは敬意をもつとか、そういうことはこれからずつと問われていくと思うんですね。

アメリカの大統領もそうですけれどアフリカ系の大統領になつたりするかもわかりません。私が皆様に今日お伝えしたいことの一番のまとめになりますが、皆様のお手元に私がお届けした資料の最後のページになると思うんですけど、ここの一節だけを読ませて頂いて私の話は終わりたいと思います。

読ませていただきます。「戸籍や民族の違い、肌の色の違い、障害のある人、老いたもの、女性、その他色々な阻害された人々、これらのマイノリティと共に生きられない社会は、社会の構成員全てを仲間として生きていくことが出来ない社会ではないだろうか」。様々な障害とか色々なハンディーがあつて生きていけない社会は、「お互いを仲間として公正な仲間とするとは出来ないんじゃないだろうかと思うんですね。在日外国人と共に生きられない社会は、在日日本人をも自由に生かしてくれない社会ではないだろうか。色々な困難は伴うでしょうが、誰とでも共に生きていくようにしていけなくて、どの様にして自分の社会からでた障害者だとか老人と生きていくれるのだろう」。というのが今日の私のまとめです。在日について勿論知つて頂きたいことはいっぱいあります。是非色々学んでいただけたらありがたいと思いますが、多くの差別とかで生きておられる人がいっぱいいるわけでして、中には精神疾患になつたと言うだけで、鍵と鉄格子の中で閉じ込められて当たり前という人たちがいるということですね。当たり前の人がその病名で診断されますと、鍵と鉄格子の中に入れられて当たり前という社会があるわけでして、そういう弱者と共に生きていく心もなくして、在日の問題もなかなか乗り越えていけないのでないかなと思う次第です。あわただしいお話しになりましたが、またあとでご質問いただきましたら次のお話が出来るかと思います。どうもあります。

**仲尾 宏**：ありがとうございます。崔先生が全ておつしやられたような感じがしますが、いつも常に究極の町医者を目指しております。半分冗談ですけど赤ひげにはなれませんけど、最近白ひげも出てきたかと思います。私のレジュメどおりにお話をさせていただきたいと思います。本日、私が地域において開業医として、また医療介護にどのように関わっているかという事をお話ししたいと思います。また、在日二世としてこの京都の地に生まれ、医師として大なり小なり在日の社会とか、在日コリアンとの関わりの中で、日々を感じていることをこれからお話しします。

**俞 正根**：俞でございます。崔先生が全ておつしやられたような感じがしますが、いつも常に究極の町医者を目指しております。半分冗談ですけど赤ひげにはなれませんけど、最近白ひげも出てきたかと思います。私のレジュメどおりにお話をさせていただきたいと思います。本日、私が地域において開業医として、また医療介護にどのように関わっているかという事をお話ししたいと思います。また、在日二世としてこの京都の地に生まれ、医師として大なり小なり在日の社会とか、在日コリアンとの関わりの中で、日々を感じていることをこれからお話しします。



正根 愉

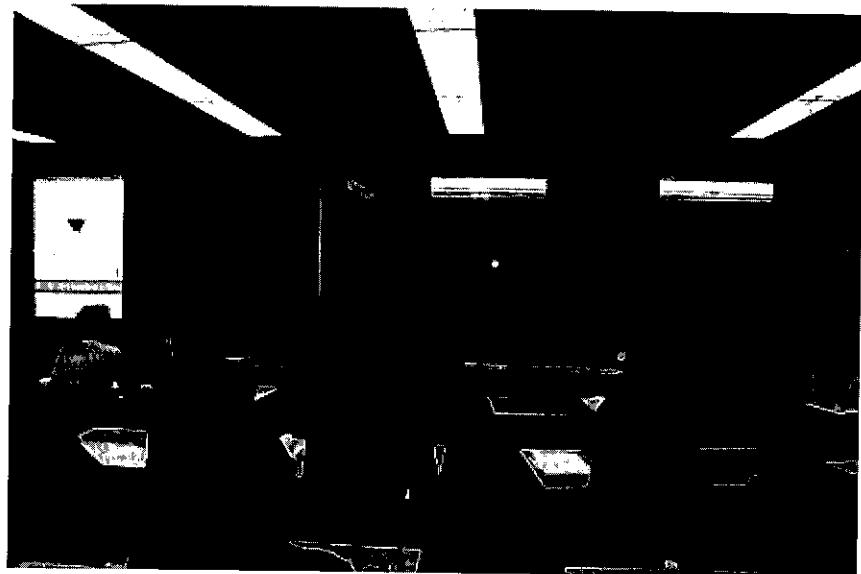
日本の社会において在日コリアンとか、在日外国人がどのようにこの日本の社会において共に生きて生活し、よく共生という言葉を言われてますけど、そのことを皆さんと共に考えていけたらと思います。崔先生のお話しと重なるところもあると思いますけれども、最初にやはり私自身のことを少しお話させてもらいたいと思います。私のことを話す前に崔先生もお父様のことお話をされましたが、私の父親のことを話したいと思います。これまでこのフォーラムで、一世、二世、三世の方が自分の歴史を話されたわけでした、色々報告集を読ませていただきましたが、同じような話になるかもしませんがお話をいたします。

私の父親も崔先生のお父様と同じように、戦前の一九一四年生まれでして、ちょうど一一年前に八三歳で亡くなりました。戦前の植民地時代に、韓國の慶尚北道、慶州のある慶尚北道の故郷から五人兄弟の末っ子である父は、長兄の私から言うと叔父さんが、山ノ内のはうで仕事をしていたのか、日本に渡つておりまして、父親が日本に来て若い頃は西陣織の仕事とかをやつていたということを聞いております。戦後韓国に帰るつもりだつたそうなのですが、経済的な事情とかで帰れなかつたという事を聞いております。その後、一九四七年頃だつたと思うのですが、今の京都國際學園である京都韓國學園の初代校長を二、三年やつているわけですね。大学も出てないのによく校長をしたなど思うのですけれども、そのあと京都の民団の役員とか、西院にあります在日韓国教会の役員とか、それから一九七〇年ころには大阪の猪飼野にあります韓國キリスト教会の館長をしたり、在日韓国Y.M.C.Aにも関わつていきました。在日韓国Y.M.C.Aというのは本当に歴史が長くて、丁度去年一〇〇周年を迎えておりますけれども、その理事長をしたり、色々な役をしていました。いわゆる団体役員的なことをして給料をもらつていたんですが、実際は名譽職ばかりですね。本当に崔先生のところは、牧師先生で大変やつたと言うことも話されました。うちの家庭も子供が丁度六人いまして、男三人女三人で私は二男なんです。母親もかなり苦労したと思いますが、その中でいつも父親が言つていましたのは、男三人いるから医師、教師、牧師一人ずつやらせたいと言う願望、願いであつたようです。私自身が生まれ育つたのは右京区の西院でありまして、西院小学校、西院中学校そして高校は桂高校です。まあまあ、わりと兄弟の中では多少勉強は熱心にやつていたほうなので、いつも父親から医者になれ医者になれと言わっていました

した。その中には多くの一世の親たちが言つていたように、在日韓国人はどうせ日本人みたいにサラリーマンや大企業には勤められないし、焼肉店とかパチンコ屋とかそういう自営業とか、勿論公務員とかにはなれませんから、何か手に職を持つ技術者になれというような単純な考えだったと思います。教師と言つても公的な学校の教師になれるわけではないのですが、常にそういう口癖でありまして、とにかく医者になれと言われて育つたわけです。実際に父親は西院の地域で、医者でもないのにお医者さんを雇つて昭和三〇年代の話なんですが、いわゆる診療所を経営していました。ところが二、三年でどうもつぶれてしまつたみたいで、多分民団のこととか色々そういうことになまけてほつたらかしていただんじやないかと思うんです。そのまま残つていれば私が非常に樂をしたわけですけれども、ある意味で考えてみれば西院という地域は九条ほどの人数ではないですけれども、やはり在日の方が割といましたし、うちの父親とも長くつながりがあつたようです。そのような地域で一応医療をやつていたのは、多分在日コリアンのいるところで、父なりに自分は医者でもないのに医療とか福祉的な面を多少考えていたのではないかと思うんです。たまたま私自身が今開業しているところが、西大路四条を少し東入ったところの中京区壬生になるわけですが、ほぼ西院の地域でありますし、今になって父親の思いが少し叶つたのではないかと思います。しかし、実は高校の頃は医者になれということに非常に反発していましたし、文系では将来就職も出来ないでしようし、生きていくには何となく理科系かなという思いでした。兄も一応理科系を出ていましたので、一緒に塾とかやっておりましたけれども、崔先生ほどではないですが、血を見たり解剖なんかとんでもないという具合に感じていました。プラス、医学部に行くほど一生懸命勉強していたわけでもありませんし、大学は京都教育大学の特殊理学科に入りました。学校の先生になろうと思つて入つたわけじゃありませんし、国立一期の京大を滑りまして、滑り止めにたまたま教育大の理学科があつたのでそこに何とか入れたわけです。そこで生物とか化学を専攻しまして、卒論で環境ホルモンとか環境地学の教授の下で一年間研究したわけですが、マウスの環境ホルモンによる癌化という卒論のテーマを選びまして、それで非常に医学に興味を持つたわけです。その頃は兄と一緒に塾をしていたり、色々やっていたわけです。親から医者になれ医者になれと言われて反発していましたが逆に、やはり学問としてですね、その時全く臨床医とか医者にならうといふ気持ちはまだ無かつたんですけども、医学に興味を持つようになつたんです。それと、丁度私が大学に入学した頃は一九七一年の連合赤軍事件とか、例えば高三の時なんかは同級生に連れられて、同志社の中のバリケードの中に

遊びに行つたとか、憶えはあります。学生になりまして京都の在日韓国学生同盟と言うサークルに入つたり、在日韓国教会の青年会も政治的な活動と言いますか、教会の中で金大中救済委員会とかそういう運動に関わつたりしていったわけです。ということでお日本韓国人二世ですか、それども、日本で色々なんか言つても仕方が無いんじやないかなとか、本国で一度生活しなければ何も意味が無いんじやないかということで、非常に韓国に自分の国に行つてみたい、留学してみたいという気持ちと、そして、もう少し大学院で勉強してみたいこととか、色々な条件が重なり、色々な経緯がありまして、運よく一九七八年にソウル大学医学部に本科から編入できただけです。まさに私としてはその時は一石二鳥どころか、一石三鳥と言うことで、本当にラッキーだったと思います。しかし、ソウルに行つた時期が非常に問題のあった時期でありますて、一九七七年が本科の一年生で、八二年の二月が卒業でした。一九七八九年でしたか、朴大統領暗殺事件があり、その都度学校が休学になつたり学生がデモしていくたり、崔圭夏（チエギュハ）さんの大統領の時に三金体制で民主化になつたり、そのあと全斗煥（チヨン・ドンハン）さんが出てきて、また軍事独裁政権になつたわけです。実際にソウル大医学部の寮というのは、ちょうどソウル大学医学部の中にありますて、今も思い出しますのは全斗煥さんの時に、寄宿舎の周りがペレー部隊に囲まれたことですね。ソウル大の学生といいますと優秀な学生が多かつたので、色々政治的な活動もしていた人がいたみたいです。そういう時代に本国に行つて少し感じましたのは、在日日本生まれであるがために、本国においてもまたマイノリティーであるということを感じたわけです。いすれにしる勉学に追われましてあまり勉強以外のこととはほとんどしなかつたのですが、一九八一年に卒業後京都に戻つてきました。その後、大阪の済生会病院に勤務しまして、また大学に戻つた後に、一番長く勤務医としては山科の音羽病院にいました。そこに約七、八年いまして、その後、西大津とか京大病院の前にあります吉川病院とかに三年ほど勤務した後に、ちょうど六年ほど前に西院の近くで開業することになつたわけです。卒業するときは内科がいいかなとか、実は精神科も非常に興味がありましたて、隣におられます崔先生を訪ねていきました。崔先生も覚えておられると思うのですけど、崔先生は私にとりあえず人の言う事をよく聞くようなので、内科をやつたらどうやと、精神科は後でもできるよといわれたことを信じまして、結局内科をずっとやつっています。言い忘れましたが私自身は小さいときから名前は全然日本名は使つておりません。これも父親の教育のおかげだと思うんですが、今のクリニツクも自然にゆうクリニツクとしました。名字が俞、まあ語呂もいい

ですから、ゆうクリニツクと言う事をつけたわけであります。たまたま既にあつたクリニツクをちょっと引き継いでくれないかということで、初めから一からやつたわけですね。いきなり診療所をはじめることになつたわけです。いわゆるデイケアですが、通所リハビリテーションセンターも引き継ぐことになりました。いきなり一勤務医がスタッフが常勤一人五人というクリニックを引き継ぎ、本当に今から思えば非常なストレスでした。ぼちぼち看護婦さんとか、受付の方と二、三人で開業するみたいなことが、いきなりスタッフがぱつと私の下にいるようになります。非常に苦労しましたけれども、何とか現在までに至つております。今からお話ししますのは開業した後に、少し感じたこと、経験したことを話したいと思います。先ず最初に開業したところは、今の場所ではなくて西大路三条上の西側であります。京都市の方も多いと思いますが、ご存知のようにちょうど真向かいに、三条の同和地区のアパートがありました。もともと私自身も西院出身ですから、ちょうど中学校の頃にアパートができる、アパートの一棟が西院地域に入つて、その同和地域の子どもたちが転入してきたことを覚えております。ちょうど向かいが同和地区でありまして、同和の方がおられたら誤解のないようにしていただきたいのですが、初めは三条のアパートの方がリハビリとかに来られますし、正直なところ初めはちょっと氣使うこともありました。あるスタッフが言うにはですね。西



大路三条の向かいが三条の同和地域で、クリニツクの裏側、西側はある程度普通の、普通のという言い方はおかしいですが、住民がおられると、もっと西側は島津であります。スタッフが「同和地域の人が来ると、他の近所の人が来てくださいと言っています」とか言う。今日のテーマと少しづれるかも知れませんが、同じ差別の構図といいますかね、そのとき感じましたのは本当に暗澹とした非常に不愉快な感じがしました。といいますのは私自身は在日韓国人でありますし、本名の愈という名前で開業してます。スタッフのうち一人の看護士さんは在日韓国人三世の方がいました。当然私自身が韓国人であることを知っているわけですが、それにもかかわらず同和地域がどうのこうのということです。

やはり一般の社会の中でごく普通の人がまだまだそういう意識と偏見を持つてているんだなということを感じたわけです。この日本社会において、もちろん在日韓国人と同和問題とは、歴史的原因としては全くといいますか当然違うわけですが、まだまだ解決されていないことが多いなど感じた次第です。同和の地域の方を見てちょっと感じますのは、本当に皆さん普通の方です。当たり前ですけれどね。中にはごく一部にちょっと気を使う人もいるんですよ。例えば、待合室で一人だけなんですが、足をポンと椅子の上に上げてですね、もちろん他の患者さんはいませんでした。が、こちらも言いにくいのですが、「ちょっととそんなんは困るで」と言うと、素直に聞いてもらいました。あまり変に気を使わずに、やはり触らぬ神にたりなしといいますか、そういうことでは何も解決しないと思います。言いにくい面もごく一部あるとは思いますが、きちんと対応すれば相手も十分理解してくれると思います。そういうことを私はつきり言うのですから、どうもこここの診療所の院長はちょっと他のやつと違うなというような目で、プラスの意味で見てもらつたようです。こういうことは私自身が在日韓国出身でありますので理解できるのかもしれませんが、在日問題ではなくちょっと同和問題の感想めいたことをお話ししました。実際に私が在日韓国人で本名という名前を使つて開業していまして、普段は本当にぜんぜん自分自身が韓国人だからどうのこうのとかいうことは感じませんし、患者さんのほとんどが壬生の方であり、西院地域の方であり日本人がほとんどでありますし、小学校、中学、高校の同級生も来ます。その同級生の親御さんが七十、八〇歳で今私のところのデイケアは毎日定員二十人で頭数六〇人おられまして、高校の同級生の親御さんも何人かおられます。そういう意味では特に在日だからどうのこうのか言つことは普段あまり感じませんし、当たり前ではありますが、逆にやはり医療とか介護、病気のことについて非常に

に気を使います。例えば時々「先生は出身どこや」とか「中国やろ」とか言われ、どうも日本人というのは韓国人・朝鮮人より中国人と言つたほうが気に入るところもあるようです。そして、待合室にテレビがあるわけですが、去年やおととしは北朝鮮の問題とかがあり、韓国に関してはあんまり悪いイメージはなく、韓流ブームで「先生韓国やろ、韓国の食べ物どうや」とか、私も大学はソウルを出たとか色々言うてます。ソウルがどうのこうのとか割と気安く話したりしているのですが、北朝鮮のことが色々出ますと、私自身もなんとなく居心地が悪いといいますか、気になりますし、患者さんのテレビを見ている反応を見たりします。本名で開業している部分でそういうところもあると思うのですが、患者さんから北朝鮮問題についてどうやとか、時々聞かれる場合もあります。時には韓国人の立場からしやべつてみたり、在日韓国人としてしやべつてみたり、時には日本人的な立場でしやべつたり、というような自分自身矛盾している時も時々あります。いずれにしろ、どんな患者さんに対しても自然体で普通に接したいと思っています。二年前からうちの家内が受け付け事務を手伝つていまして、家内はソウル出身であります。冗談で私が無理やりつれてきたと愚痴つております。結婚して二〇年以上たち、日本に住んでおりますが、本人は日本語がまだまだヘタだと言つています。電話の対応ですね。特に国民健康保険や社会保険のややこしい話になるとなかなか難しいみたいで、私が代わることもありますが、そのへんに言葉のハンデが多少あるなど。実際に日本にはニユーカマーの韓国人の方もたくさんいますし、中国人の方、他の外国の方もたくさんおりますが、家内を通じて言葉のハンデを感じるわけであります。私自身が韓国名で開業してまた韓国語ができるということで、教会関係ですとか留学生とかニユーカマーの韓国人が患者としてこられ、韓国語でしゃべるとやはり安心していただけます。実際にこちらの国際交流会館に私どもゆうクリニックは韓国語がしゃべれる、通じる診療所としまして、登録させてもらっています。九条ほど在日の方が多いわけではないのですが、次回のフォーラムの中で九条の介護施設のエルファーアの方が話をするとと思いますが、私自身も西院という地域で韓国語が必要な方がいれば、より積極的に診させてもらいたいと思います。話がだらだらしましたが、最後に一つ最近うれしいこととして、在日一世のハルモニですね、おばあちゃんの患者さんの話を紹介したいと思います。そのハルモニはなんと今年三月三日で満一〇〇歳になる方でありまして、知り合いの介護事業所から去年の秋ごろより週一回の往診を頼まれておられます。こちらも喜んで引き受けまして、一〇〇歳になるという方が足腰が悪くて自室で生活していまして、毎日ヘルパーさんが来るという状態なんです。けれ



ども非常に頭がしつかりしていまして、私もうれしくて韓国語でしゃべると、向こうも「先生か」と韓国語で答えてもらえた、非常に喜んでいたのです。ところがヘルパーさんがほとんどの日本人なので、後で困ると、私たちが行つても韓国語交じりの日本語でもう一つ通じないので、私が行つた後は全く韓国語ばかりしゃべるので、残念ながら最近は日本語でしゃべっています。そのようなおばあちゃんを診させていたりで、本当に地域で町医者としてやってよかつたなあということを感じているわけです。そして一〇〇歳になるというおばあちゃんは、日本に結婚した頃にきてるわけですから、八〇年近くいるわけです。そのような苦労をして子どもを育てて年老いた一世のことを思いますと、本当に長生きしてもらいたいと思います。最後にまとめ的にになりますが、私自身もこれまで京都民団の介護事業推進委員会にかかわったり、ここにおられます仲尾先生も顧問をされています「京都モアナネット」京都外国人高齢者障害者生活支援ネットワーク、なかなか覚えられませんが、「京都モアナネット」の会に出席しています。ちょうど三年ほど前から京都国際学園の学生の検診も担当しておりまして、医者になつたときに今はいいのですが、学園に親友が先生をしておりまして、あんたが校長になつたら私が校医になるとか言つっていました。本当にそれが実現したといいますか、年に一二回行くだけですが、自分自身開業医として普段の診療以外にそういうことをさせていた

だいて喜んでいるわけです。これからも地域医療も含めて在日コリアン、在日外国人医療介護について少しでも役に立つていければと思つております。例えば今東九条に「故郷の家」という大きな老人介護施設が建築中であります。在日コリアンのための施設であるということはもちろんであります。将来二〇年三〇年して一世がいなくなつたらどうなるのということもふと考えます。在日コリアンだけでなく、在日外国人とかその地域におられる日本人の方とか、本当に共に介護とか医療を受けられるような施設になつていただなど願つております。そして在日外国人高齢者の年金問題とか色々あります。そういうことも本当に早く解決すればと思います。

最後に介護保険事業が開始されて約八年たち、私なりの考え方ですが、それなりの効果は認められたと思います。以前に比べたら入院せずに在宅で介護をしやすくなつたことは確かですが、まだまだ不十分な点が多いと思います。例えはごく最近ですが、私が外来で診ていました八七歳のおばあちゃんが市立病院に入院されました。軽い脳梗塞で失語症が出ているのですが、主治医は医療的には退院してもいいと。ところが家の受け入れはとうと、昼間でもまだおむつをつけている状態でどうするのかということです。こちらもご家族である娘さんには家に帰るには、しつかりとケアマネージャーさんに相談して、万全の体制をとつて家で見るなら見るという事にしないと後で大変ですよ、という具合にアドバイスしていますが、どうしてもその隙間的なところですね。その辺がまだまだ不十分じゃないかなと思います。それと最近厚生労働省が、主に長期入院患者のための二五万ベッドを一五万ベッドに減らすと言つています。もちろん崔先生がいつもおっしゃっていますように、入院する必要が無い精神疾患的な患者さんもいますが、全部が全部社会的入院なのかとも考えますし、それならもう少し介護施設をもっと増やす必要があるんではないかと思います。私のこのレジュメの最後の願いということで、少し乱暴な話ですが、知り合いに京都市の市会議員さんも何人かおられますし、もとの本能小学校のあたりに老人施設ができるのですが、小学校の跡地を全部老人施設にしたらどうかと言うことです。建設業も潤うじやないかと思います。最後にこの場に医療や介護及び京都市の関係者の方もおられるようですので、この言葉で終わらせていただきま

仲尾 宏：どうもありがとうございました。お二人とも大変中身の濃いお話を短時間でよくまとめていただきました。それでは今から休憩に入れます。

司 会：それではただいまより一五分間休憩にはいります。こちらの時計で二二分に開催いたします。今、皆様のお手元にある質問用意見用紙があると思いますけれども、こちらにできれば一〇分くらいまでに記入いただきます。受付のところに箱を置きますのでそちらにお入れください。それでは二〇分に開場します。よろしくお願ひ致します。

仲尾 宏：お待たせいたしました。それでは再開させていただきます。全部で一〇人の方から質問並びに感想をいただきております。感想のものについても全部読ませていただきます。先ず第一番目の方。

「弱者を大切にできる努力をしていけたらいいなと思いました。違いを乗り越えてきちんととした対応ができるようになるといいなと思いました。」こういうご感想が一番目の方です。二番目の方からは質問が内容になります。

「在日の方が医師になるにあたつて日本人の場合と比べて難しいことはあるのでしょうか。この医師というのは国家試験ですから日本語の試験、勿論外国語もありますが特に国籍あるいは民族が異なつて難しいという事はないと思いますがそれで宜しいでしょうか。」

その次三番目の方、「在日一世の方が高齢化し介護保険で介護を受けるとなると大なり小なりコミュニケーション・ギャップが生じる事があると漠然と思うところですが実際のところどうなのでしょうか。またそれらを埋める工夫とかつてあるのでしょうか。」こういう質問です。これについては先ほどちょっと餘先生がおつしやられましたけれども少し付け加える形でお願い致します。

俞 正根：実際に言われる通りであると思うのですけれども、そうですね実際にはやはり一世の高齢者でも八〇、九〇歳とかになるとなかなか理解されないことがあります。まあ在日の方でなくとも理解できないところはありますから、家族の方が密接にコミュニケーションをとるしかないのではないかなどと思います。それと言葉の面でやはり、行政の中の方で韓国語ができる方がいたら一番いいのですが、そういう方の力を頼つてですね、また、私なんかを利用していくだいたいらしい、という具合にしか返事できないんですけれども。

仲尾 宏：はい。ありがとうございました。次の方に進みます。

「金錢的なこともありますが本国で生活する事は考えなかつたのでしょうか、日本に永住する事に何か目的などを持つておられるのでしょうか。」こういうお尋ねです。先ず今日お二人もご自分の出生の事おつしやいましたけれども一人は共に在日二世です。ですから日本に生まれて日本に育つた環境でおられるんで、そういう意味では本国で生活なさるという事は本来的には先ず無いのではないかと私は想像いたしますが、そういう所を含めて一言ずつ崔先生からまずお願ひ致します。

崔 秀賢：私はずっと中学生・高校生の頃から社会人としてどこで働くのかと思つて迷つておりましたが、WHOとかでアフリカとかアジアに行けないかと思つたり、あるいは祖国で働けないかと思つたりしておりました。私は一九六八年の三月に卒業しまして、八ヶ月位内科の病院で研修してその給料を貯めて一九六八年の終わりから二週間ソウルに行つたんですね。すごく寒かつただけれど三つか四つ位の大学の医学部を見学して、院長先生とかそういう方にお会いして、自分がソウルに来て働く道は無いのか、ということをお尋ねしたんですけれども、韓国は非常な競争社会でありまして、先ほど兪先生も言つておられましたけれども、生きている人たちで目一杯で、日本から来る人を受け入れる余地はないというようなことがありました。それで私は日本で暮らさなければいけないなという風に思つたので、別に日本にいるのは目的があつて、使命があつて暮らしている事ではなくて、日本に生まれたけれども祖国にも帰れなかつたし、違う国にもいけなかつたというのが現実です。

兪 正根：私の場合は一応母国留学というかたちでソウルへ。初めはですねやはり行く前は本当に本国に住んでもいいなど。実際にソウル大を卒業したり、ソウル大だけではなく、他の大学を卒業した在日二世三世が向こうの企業に勤めたり、歯医者で開業したりとかそういう方もおります。私自身は逆に言葉のハンディを、やはり日本語訛りの韓国語でありますからちょっとそれを感じたのと、ひとつには学生運動をちょっとかじつていたわけとして、卒業する時、韓国に残るのか日本に帰るのかというときにやはり政治的な状況の中で、今から思えばかなり不安定でしたから、早く日本に帰りたいと、日本に帰るというか、京都に帰るということでした。いつもこういう質問がよくあるの

ですが、私は結局何人かなどと思うと、韓国系日本人であるのか、日本人系韓国人であるのか、家内は完璧な韓国人です。それともう一つは、日本人の方によく言いますのは、やはり在ハワイ日系二世・三世のことですね。ラジル日系二世・三世の方はよくこちらに仕事に来られていますが、やはり子どもはポルトガル語しかできないから、ラジル人学校に行つたりというようなことは聞きます。先ほどちょっと触れましたが、在日も本国においてまたマイノリティであるというハンデですね。その辺の事を色々考えると生まれ育った右京西院で、色々仕事して在日韓国人のために色々やつたり、日本人であろうが、韓国人であろうが、患者さんを診て生きていくのがいいんじゃないか、というのが正直な気持ちでありまして、日本に永住する目的は生きるために日本に、京都にいるという事でござります。

仲尾 宏：はい。ありがとうございました。日本人の両親を持ち、そして日本人の社会で暮らしている「在日日本人」からすればあるいはそれと異なる状況にある在日の方との問題というのはなかなかよく分からぬですね。つまり自分は何人であるかという事をおつしやつていましたけれども日本の社会と文化、それから日本に完全に生活基盤があるにもかかわらず自分は日本人ではない、という事の背景を背負つてそれぞれ在日の方は生きているわけですが、そういう所への想像力を働かせないとなかなか今のご質問の内容は十分掴みきれないような気がいたします。ですからそのあたりのことも色々お考えいただきながら今のご回答の思いをご理解いただけたらと思いました。

次の方は、「日本国籍取得に何か障害などがあるのでしょうか」とあります。この日本国籍の取得というのは日本国籍法は父または母が日本人であればその子は日本国籍を取得することができると、こうなっています。ですから両親が共に外国籍の方については、生まれたときに日本国籍は取得できない。取得するには「帰化」という名前を使つてますけれども、生後生まれた後の「帰化」という事は可能できます。それは法務大臣の許可制です。法務大臣の許可の条件は一杯ありますて例えば素行善良であること。それから経済的に安定している事。その他色々な条件があつてそれを全部満たしているかどうか。満たしていたらすぐOKではなくて最後はやっぱり法務大臣、入管当局の裁量に委ねられるというわけですから、そんなにまでして取りたくないわ、という方も外国籍の方でおられる。在日

の方だけではなくて他の国籍の方もいるわけです。」本人の思いというのは今お二人から伝えていただきましたけれども、取得を希望しないというのはそういう「帰化」の条件のあり方というのにも関わってくるのではないかと思いません。それでは次に進みます。

五番目の方、「前回の大学病院勤務医師の先生では部長職にて二年毎の登録が必要であるという事を初めて聞きました。精神科鑑定医になれないという事をレジュメに書いてありましたがこれは崔先生のレジュメの一一番最後に書いてありました。他に医師で国籍により不可能な事や制限等はあるのでしょうか、またこの点でお感じになられた事気持ちなどをよかつたらお聞かせください」これは崔先生にお答えいただきましょうか。

崔 秀賢：現在はそういうものはきっとないだらうと思います。現在私は京都市の医療審査会の委員をしておりまして、部会が二つありますが、一つの部会長をやつております。現在特にないものは、きっとないだらうという風に思つております。それから少し別の話ですが、私の長男はチエ ヒョンインという韓國名を名乗つております。次男の方はサイ ソウジンということで一年半ほど前に日本国籍をとつたんですね。それで余り言うのはまずいかもわかりませんけども、結婚した相手は日本人です。「帰化」する前の次男の姓は崔で、結婚相手の姓は日本名で別姓だつたんです。しかし、「帰化」をしましたところが嫁さんの名前も崔（サイ）になつたんです。ともかく次男は崔という名字で日本国籍を持つているという事になります。私は「帰化」に対して特に抵抗は無いのですけども、先日も「自分も日本国籍を取つてみようかなと、思うこともあるけど」と、さらりと言つてみましたら、「『帰化』のメリットがあるの」と子どもが言つていました。今は壁はすごく少なくなつてきています。

それからちよつと話が長くなつて申し訳ありませんが、私の家の甥っ子が日本名で「帰化」した。彼とある時にしゃべりましたら、自分は日本人の女性と結婚したいと思う時に、自分は「帰化」しているという事を言うのがすごく苦しいというのです。その時私は初めて日本名を使っても結婚する時には「帰化」したことを言う事がすごく壁になるという事を聞きました。

それから鑑定医になれなかつたのは一九八八年までで、精神衛生法というのがありました時代ですけれども、現在は精神保健福祉法という法に変わつておりますので、そこではいわゆる国籍条項はなくなつたので、強制入院である

医療保護入院にしたり、自由行動を抑制するという権限は与えております。

仲尾 宏：はい。ありがとうございました。一言ずつ付け加えさせていただきますとその様な資格上の制限は職種の問題に関わつてくるんですね。公権力の行使に関わる職種あるいは公の意思形成に関わる権限。そういうものについては日本国籍を必要とする。こういう自治省の解釈がありました。現在もそれはまだ生きている。一方では白川自治大臣のときにその辺の判断は地方自治体の判断に任せるこという事が出ておりまして、それをどちらを取るかという事は地方自治体に一任されているという事が今の現状です。ですから地方自治体によって対応が違います。ですから今のように法律改正の時点では資格制限を撤廃していくという事もその法律改正の影響を受けて出たのではないか、と思いますがそれでよろしいでしょうか。それでは次に進みます。今度はお二人にそれぞれ指名のあるご質問です。崔先生「以前長岡病院を見せていただいたのですが地域とのかかわりを主体とした取り組みが行われているようでした、岩倉病院では施錠をしないという事でしたが、地域にも積極的に出ておられるのでしょうか。状況状況で難しい面もあると思いますが」いずれも精神科の医療の問題ですね。よろしくお願ひします。

崔 秀賢：無論十分ではありませんが、地域に出ています。一九七八年頃から私どもの病院では猛烈なアパート退院を行いました。一乗寺だとか修学院のあたりに非常に沢山の方々が退院されました。それは現在でも同じような状況ですけれども、現在は高齢化もあって、なかなか退院の決心がつかないで、病院に居続ける方が多くなりました。しかし、リハブフォーラムという、もう一回地域で暮らすフォーラムというのを院内で作って、退院する気のある方と病院スタッフと地域で「ACT」というのが中京区のほうにあるんですけども、PSWや看護婦だけじゃなくドクターも二四時間で訪問する所とタイアップして、地域で暮らしていくだけるように努力いたしております。しかし、なかなか決心がつかない。病院のほうが居心地がいいわという事がありますから、これからも大きな課題です。まあ病院全体としては地域で生きるのが本来の姿だけれども、やむなく病院で暮すこともあるという事で対応しています。

仲尾 宏：はい。ありがとうございました。次は俞先生への質問です。

「介護の現場は従事者の待遇面でかなり厳しいと聞きますが根本は医療保険にして介護保険料が低いからとも思います。本来在宅介護を主に医療費を削減する方向が言われておりましたが現実はそうはないように思います。診療と介護の双方をやつておられるようですが日々の仕事の中でどうお感じですか。」こういう制度上あるいは経済面でのご質問です。

俞 正根：一言でいってその通りでございます。経済学的に言いますと例えば私たちのディケア通所リハビリセンターでは、定員二〇人でかなり利用していただいて、一日平均一八人くらいになつていて、優良なほうと思うのですが、定員二〇人ということは介護保険の一日常たりの点数がそれ以上あがらないわけです。職員さんが今専従に五人、パートさんが五人いますが、どんどん今後事業スタッフがある程度年を取ると当然給料は上げないと、どこか他に行くかもしません。介護保険の点数の枠はあるのに、給料を上げなければならないとジレンマを感じています。今は何とか医療と両方やっていますので、実際に診療所でどれだけの点数で、介護がどれくらいの点数かは明確ではないのですが、何とかやっていくてはいけないかと思います。実際に介護だけ独自でやつてある先ほど言いました一〇〇歳のおばあちゃんを紹介してくれた、NPO法人の介護事業所の責任者も、自分の取り分がなかなか出ないとぼやいております。多分、医療が赤字になつた今のままで、介護も赤字になつて介護の点数は下げられるのではないかと、私は思っていますけれども。

仲尾 宏：大変将来的には大きな課題ですね。次もこれは俞先生にお答えいただいたほうが良いかと思います。「福祉事務所でケースワーカーをしています。担当しているクライアントの中に在日の単身高齢者の方がいます。足腰が弱り、外出は勿論、室内の清掃や食事の準備など日常生活の中で様々な支障が起きています。介護保険のサービスの利用を勧めているのですが他人を室内に入れるのが嫌となかなか受け入れてもらえない。なにかいい説得の方法は無いのでしょうか、日本語はOKの方です。」こういうご質問です。

俞 正根：ひとつにはこういう方の為に、仲尾先生も関わっておられます「モアネット」とかを利用されればと思

います。「モアネット」の方でも私は監査をやらせてもらっているんですが、専従の事務の方もおられます。勿論私自身がゆうクリニックとして協力できる範囲内でならないくらいでもありますし、あとは次回お話しされるところの、東九条のエルファーさんのかアマネージャーさんとか、かなりそういう在日の方に対する対応にも慣れてますので、相談されればと思います。それと感想ですけどやはり在日一世の方、特に男性の方は、デイサービスとかデイケアを、普通の日本の男性の方と同じようになかなか使わないようです。頑固で家にいた方がいいという方が多いです。特に在日の方は日本の方ばかりいるからちよつと慣れないと、そういう面もあると思います。その辺は色々対処し、これから考えていかなければならぬと思いますが、具体的なお返事としましてはそれぐらいでしようか。地域が中京とか右京であれば、私に出来ることがあれば連絡していただければよいかと思います。

仲尾 宏：今少しお話に出ていた「モアネット」ですが、これは京都市外国人高齢者障害者福祉相談員制度といいます。外国人の方、特に在日一世の方などは今のお話のように言葉が不十分な場合もある。したがつてその他生活費や福祉の面でも制度をご存知でない方もある。ですから積極的にその人たちに相談をかけていく、お話しを聞かせてもらうという機会をつくる。まして民生委員は原則日本人しかなれないわけですからね。そういうことから三年前に略称「モアネット」という制度が発足いたしました。それで京都市の援助を得てそれが発足しまして今ボランティアの方が一定の研修を受けてそうした福祉相談員というかたちの活動を始めておられるんです。そういう方をご利用いただければいいなという事になると思います。またこのことについては色々な詳しい事についてはモアネットの事務所あるいは京都市のほうにお尋ねいただければご説明いただけると思います。次へまいります。次の方は感想です。

「今の日本の在日韓国人・朝鮮人への就職差別を改めて実感した。専門職にならないと生きていけないというあり方を変えていかなければならない。社会的弱者、外国人、障害者、高齢者、女性、被差別部落の解放へ向けて社会を変えていかなければならぬと思った。崔先生の話から外国人登録は廃止すべきと思つた。外国人だけ指紋を取るのはおかしいと思つた。」このようなご感想です。この指紋の問題については前回も申しましたがまた復活していまして、今、日本に来る外国人の方は全部写真と指紋を入国際際に取られるという事になつています。ですから問題は日

本に住んでいた在日の高校生が外国へ行つて再入国する時にはやはり取られるという事になるのではないかと思ひます。その次参ります。

「二人のパネリストのお話を聞き、差別を受ける側の気持ちが非常によく理解できました。しかし差別を受けているにもかかわらず自分も差別をして生きているという正直な気持ちを伝えてくださいました。差別というものの怖さを知られました。今の時代本当に差別がなくなるのでしょうか。」こういう真剣な難しいご質問です。これはそれに我々ひとりひとりが考えるべき課題ですがお二人のかたにも一言ずつ(感想をお聞かせください。

崔 秀賢：多分差別がこれからなくなるという事は考えにくいです。生きているものは小さい頃から「しっかりと勉強しろ、しっかりとスポーツしろ、走りをしたら一等になれ、ビリなつたらあかんぞ、成績ビリになつたらどうするのだ。」と言われて育つわけですから、どうしても勇者を称える風土があるわけです。堅苦しい言葉ですけど問題意識、問題意識を持つて弱者と共に生きる、ということに戦つていかない限り多分差別と戦う事はできないと思います。ですから私たち自身の感性、自分が負けていたら、あるいは自分が病気になつていたら、あるいは障害者になつていたらどうなつっていたかという、感性を持つて戦うという気持ちがなければ差別と対応できないし、差別に打勝つという事は勿論できないと思います。

ひとつ是非話したいと思つていていたことで抜けていた事があります。私の病院に四〇歳位の女の方が今たまたま入院中なんですけども、一年か一年半前に私のところにやつてきて、「実は自分は在日韓国人だけど、多分その為に自分は色んな人からありとあらゆる非難を受けていると思うけど、先生どうしたらいいですか」って聞かれたんです。それで私はその方が通名でごく普通の名前でしたから在日という事を全然知らなくて、「私はあなたの事を在日韓国人と思ってなかつたからそういうことはないよ」と言つたんです。精神疾患の上にこの民族差別と両方抱えているんですねその人は。その人は通名を使つておりますから、多分誰もその人が在日であるという事は知らないと思うんですけども、精神疾患の偏見に加えて、在日の差別がその人にはダブつて存在しているんです。それには私も感極まりましたけれど、そういう差別がダブることが間々あります。そういう事はきっと他の障害でも一つの差別だけではなくて、差別が同じ人に重なつて起つて。そういう事に対する私達の感性みたいなものがなかつたら多分差別に打勝つ

でいけないなと思いますね。

仲尾 宏：はい。ありがとうございました。

愈 正根：なくなつて欲しいと僕もいつも思うのですが、こういうような差別の問題とか在日の問題とかは、やはり歴史教育が大事というか、まず事実としていつも区別しないところちやになるんですね。例えば私が教育大の頃に同級生の女子学生に「え、愈君つて外国人なんか、かつこいいな」って、それは白人・西洋人がかつこよくて東洋人アジア人がかつこ悪いと、言うことなんか分かりませんが、相変わらず福沢諭吉以来の「脱亜入欧」の考え方じゃないかと思います。同和問題について、この前の市長選挙でいろんなことが言われてましたが、本当に同和地域の人にはだけ優遇して事実はどうなんだと。実際に在日にしろ同和問題にしてもやはり教育が大切ですね。最近よくODAとかアフリカとかで、援助するだけじゃなくて、井戸を掘るとか、田植えや農業を教えるとかしています。例えば私一度教会の関係で女性会と一緒にカナダの老人ホーム見学に行つた事があるのですが、カナディアンインディアンの方もマイノリティで、カナダ政府から補助金をもらつてゐるんですね。ところがボランティアの方々のお話では、そのお金は全部アルコールとかドラッグに消えたりするそうです。ただ単に分け与えるだけじゃなくて、差別をなくすには事実を知って、援助するならどのように有効にすべきかということが大切だと思います。うちの長男は今、日本で就職活動していますが、小学校中学校まで長岡京市で、高校はニュージーランドで、大学は韓国の慶熙（キヨンヒ）大学という所です。実は韓国語も日本語もかなりネイティブなのですが、私に「なんでお父さんは日本の国籍をとらへんの」と。かえつて三世四世で色々な世界に行つてくると、非常にアメリカ的といいましょうか、日本の国籍をこだわらなくてもいいんじゃないのと考えてるようです。色々な形で色々知る事によつて、だんだん差別が民族的な差別がなくなつていくのじやないかと思います。

仲尾 宏：お二人のご発言からご質問者の方だけではなくて他の方もいろんな思いをもたれて、そして差別とどう向き合うべきかということを教えていただいたような気が致します。最後の方は少し長いんですがご感想を、ご丁寧なご発言ですので全部読ませていただきます。

「仕事の関係で随分岩倉病院にはお世話になり何度か訪問させていただきました。他の市内の精神科病院と比べて格段に開放的でソーシャルワーカーの方々も患者さんも明るかつたのが印象に残つております。その後戸籍関係の仕事をした際死亡届の届け出者の欄に崔先生のお名前を何度も見ていたしました。施設管理者としての届け出だつたと記憶しております。身寄りの無い入院患者さんの死亡届出者としてだと思いますがこのようなケースは非常に珍しく立場上やむをえないからとは思いますが、患者さんに寄り添つた先生であるといつも感じております。今回、その崔先生からお話を伺えることで非常に感激している次第です。ただ残念な事は一六歳の外国人登録の事。本当に胸が痛みます。平成一二年の法改正の時、担当職員は総出で必死で指紋をマジックやペンで抹消したと言つています。私も平成一三年から外国人登録の仕事に携わらせていただきましたが時折抹消を忘れた指紋を見つけると大慌てで消しました。法務省にある原票も全て抹消してあります。私達の意識から指紋の記憶はあっても抹消はされています。先生は捨てたといわれても信用しませんとおっしゃっていました。当事者の方にはそう思われるのも仕方ないと、当然だと思つてはいます。でも抹消したのです。日本人としてごめんなさい。担当していたものとしてとてもとても胸が痛みます。俞先生、「苦労された一世の方々、その他在日の方々にとって先生の存在はとても大きい」と思いました。良いお話をありがとうございました。」こういう現場で担当の公務員として「苦労なさっている方の正直なご感想もでてまいりました。このようにしてパネリストの方々だけではなくて、ここにいらっしゃるすべての方が率直に自分の思いを述べ合い、そして他者の気持ちの理解をしあう。これが私も差別に向き合う一番大切な出発点だと改めて感じました。今日は全部で一〇人の方からご質問とご感想をいただきましたけれどもいざれも非常に真剣なご質問とご感想でありがたく思っています。それではこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

司会：ありがとうございました。それでは「地域医療機関ではたらく」を終わらせていただきます。次回のご案内ですけれども来週の金曜日今度は「介護と学校養護の現場から」という事でお話しいただきます。また来週もこちらで同じ時間から開催しますので是非おこしください。本日はありがとうございました。



## 第三回 「介護と学校養護の現場から」

パネリスト

栗山 千代美氏（クリヤマ チヨミ 日本・

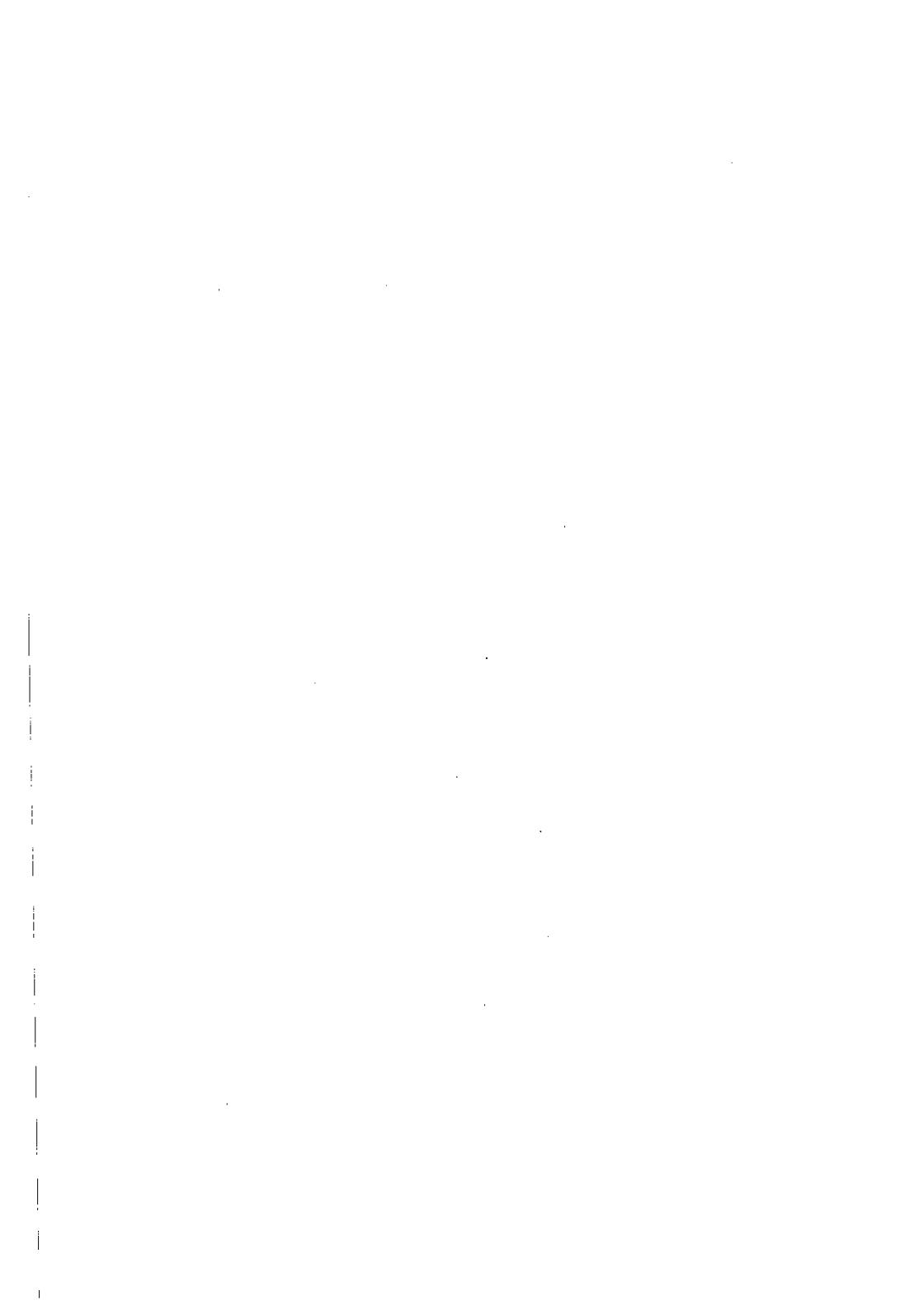
京都朝鮮第二初級学校養護教員）

南 瑞賢氏（ナム ジンヒョン・在日二世

NPO法人京都コリアン生活センターエルファー  
介護福祉士）

コーディネーター 仲尾 宏氏（ナカオ ヒロシ）  
(京都造形芸術大学客員教授)

一〇〇八年二月二十九日（金）開催



司会：一時の定刻を過ぎまして申し訳ございません。ただいまより連続フォーラム「チョゴリと着物」を開催いたします。第一回目を迎えた今年は医療、看護、介護、そして学校養護、これらを題材に第一回目、二回目は医師の立場からお話を伺つてまいりました。今回、第三回目はお一人目の学校養護教諭としての立場から、それからお二人目、介護、特に今回は老人介護の立場からお話を伺います。それではパネリストの皆様をご紹介いたします。一番最初にお話しいただきますのは、栗山千代美さまです。後ほどお話をございますが、民族学校の学校養護教諭としてご活躍です。次にお話いただきますのはNPO法人京都コリアン生活センターエルファの介護福祉士でいらっしゃいます、南珣賢（ナム・ソンヒョン）さまです。コーディネーターは、いつもお願いしております、京都造形大学の客員教授の仲尾宏先生です。

仲尾 宏・仲尾です。

司会：よろしくお願ひいたします。

仲尾 宏・今国会の方からのお話にありましたように、今日はお二人のパネリストの話を聞きますが、最初は学校養護の現場、ということで、とりわけ日本の学校ではなくて、いわゆる民族学校、あるいは直接には朝鮮学校と申しますが、その現場の方、栗山さんのお話をです。



仲尾 宏氏

初めての方もいらっしゃれば、あるいは、その民族学校がどんなところか、何故そういうものがあるのかということについて制度上の事をご存知ない方もいらっしゃるかと思います。お手元にB4の資料を用意いたしました。日本の学校は、学校教育法という法律で定められていて、そこには右下にあります。小、中、高、専門学校、等々の学校があるということを第一条で定めてます。これは、一條校といふうに普通呼ばれてます。それから第八二条は、各種学校という条項です。第一条に掲げるもの以外のもので、学校教育に類する教育を行うもの、これが各種学校と呼ばれてます。この教育内容は様々ですけれども、今日日本に存在してます朝鮮学校と呼ばれる学校は、この各種学校に認定されている学校です。これは第二次世界大戦が終わった後、しばらく日本に残ろうと思われた朝鮮人の方々が子ども達の為に民

族の文化や歴史、言語を学ばせたい、そういう思いから始められました。ところが文部省はそういう学校は認められないということをたびたび言つておきました。文部次官通達という資料が下のほうに二つありますけども、そこの②を見ていたときますと、昭和四〇年、一九六五年の事ですが、朝鮮人学校については学校教育法第一条に規定する学校の目的に鑑み、これを学校教育法第一条の学校として認可すべきではない事、つまり正規の学校ではないと朝鮮人としての民族性または国民性を寛容することを目的とする朝鮮人学校はこれを各種学校として認可すべきでない事、こういう通達を出しています。そのために、経済的、教育的、いろんな意味で、非常なハンディキャップを持つております。ただしこの各種学校については、その後、東京都をはじめ各都道府県でこれは都道府県知事の認可条項などで、認可は取りました。ところが、一條校ではないために、一切の国庫補助がない事、それで、あとは地方自治体の援助を待つしかないんですがそれで京都府も京都市も一定の補助はしておりますけれども、日本の私立の学校と比べると補助額が非常に少ない。そういうことで、教育に非常に困難をきたしているという事が現状としても続いております。けれども、国際的に見るとそれはむしろ異常な事でありまして、資料の左上に、いわゆる国際人権規約のA規約と呼ばれている「経済的、社会的、及び文化的権利に関する国際規約」というのもあります。そこの第一三條を見ますと、「この規約の契約国は、教育についての全てのものの権利を認めらる。」それから少しとばしまして、「諸国民の間及び人種的、種族的または宗教的集団の間の理解、寛容及び友好を促進する事、並びに平和の維持のための国際連合の活動を助長する事を可能にすべき事を同意する。」そして次の第二項のAですが、「初等教育は義務的なものとし、全てのものに対する無償のものとする。」こういうようになつております。ですが、各種学校としての存在しか認められないということにおいて、初等教育、つまり小学校の教育についても、朝鮮学校の場合は無償にはできていないという事になつてゐるわけです。それから今日のお話として頂く事に関わつて申しますと、小、中、高の先生はそれぞれわゆる教員免許が必要ですが、その教員免許は教育系の大学などで資格をとる事ができます。養護教育についても一定の資格を要するんですが、その養護教育は、一條校においてはこれは義務的なものとなつております。上の大きな資料ですが、例えば第一二条、健康診断。これは健康診断を、学校はやらなければいけない。それから第二八条、小学校には、「校長、教頭、教諭、養護教諭、及び事務職員を置かねばならない。」少しひどまして⑦ですが、「養護教諭は児童の養護を司る。⑪番、養護助教諭は養護教諭の職務を助ける。」こういうような規定が

ありまして、一条校の小、中、高はいずれも養護教員を置くことが原則になつております。それで私達も子どものころ養護の先生にたびたびお世話になつたことがあるわけですけれども、それが、民族学校、朝鮮学校の場合には、制度上、外れているという事と同時に、経済的な問題で実現していませんでした。つまり、保健室もなければ養護教諭の先生もいらっしゃらない、こういう状況が今も続いているわけです。京都には三つの朝鮮学校がありますが、そのうち二つはまだありません。第二朝鮮初級学校が右京区にあります。そこだけにようやく保健室ができまして、そして養護教員の方が着任されました。その養護教員の方は今日お越しいただいている栗山さんという日本人の方です。で、どうしてそこへ行かれるようになつたか、これは栗山さんから直接お話を伺う事にいたしますが、子どもの心身の健康の上で養護の先生、それから保健室の設置は当然の事でありますけれども、一条校でないためにいろんなそういうた設備、あるいは先生がいないといった、そういう跛行的な事になつていて、そういう現状を少し知つて頂いた上でお話しを聞かせて頂く事にしたいと思います。それでは栗山さん、約二十分か二十五分ぐらいですが、よろしくお願ひします。



栗山千代美 氏

栗山千代美 氏  
二初級学校というところで、週に二回程の保健室の手伝いをさせて頂いています。で、まず始めに京都朝鮮第二初級学校とはどんなところか、というところからちょっとお話をさせて頂きたいと思います。場所は松尾橋の東北側に位置します。一九六五年に創立して、今年四二周年です。一九七五年頃から中学部もあつて児童生徒数は二五〇人ぐらいいの時もあつたそうです。現在、幼稚部一七人、小学部七二人、計八九人の各学年一〇名前後です。三年前は九八人でしたがだんだん減つてきていています。朝鮮学校に通う子どもは、全国平均は大体在日の子どもの一五から一六%だそうですが、京都市は、この民族学校、朝鮮学校に通う子は一〇%以下という事です。写真は学校の外観です。内部、廊下、図書室、教室。とても教室がきれいです。これが保健室です。この初級学校に行くようになつたいきさつですが、一〇年くらい前より、前任の吳校長先生の依頼で運動会の救護のお手伝いを時々したり、性教育の授業の協力をしたりしていました。二〇〇五年の春にオモニ会の人が、物置になつていた職員室の隣の部屋をきれいに片付けて掃除をされ、カーテンを縫つて、ガラスを光が入るように入れ

替えて、ベッドを大小二台運び込みました。そして私のところに「先生ここまで出来たのですがどうしたらいですか」と電話をかけてこられました。学校に行ってみて本当に驚きました。すっかり見違えた立派な保健室になつたのです。役所の仕事でもなく、学校の運営母体からの指示でもなく、ひたすら子どもを思う親の気持ちがこのようなかたちで動いている、という事に本当に驚きました。衝立が欲しいんだけど高すぎて買えないんですって言われたので、ああそれなら一〇〇〇円くらいの安い洋服かけを買って、カーテンを縫つたように上下を縫つてはめこんだら安くできますよとアドバイスしました。次の週に行つてみるともうできあがつていました。白い戸棚も入りました。すっかり立派な保健室ができあがり、オモニ会の人達を称えながら喜び合いました。部屋はできたけれども、保健室の先生がいない、という事で、週に一回という事で私が手伝いましょうという事になりました。週に一回という事はほんとにその時間だけの応急手当だけですね、で、スタートしました。ところが、すぐに修学旅行の付き添いも買って出て、広島・山口の方に付き添いました。修学旅行は第一、第二、第三が合同で行かれるので、校長先生も順番に行くのですがちょうどその時に第二の校長先生が行かれるので一緒に行きました。夏祭りや運動会、桂川の河川敷でのマラソン大会、学芸会などの行事にも救護で参加しました。学芸会も見せていただき、最後には、卒業式にも出席させていただきました。学校の一年間の様子や、教育内容や、四〇年の学校の歴史などがだんだん分かつてきました。その三年間に、保健室で、応急手当、視力検査、内科健診、修学旅行の付き添い、保健指導、保健室だより、職員研修、オモニ会の健康講座、大学生の論文協力、各種学校行事、運動会、マラソン、芸術公演大会やサッカー大会などもよせていただきました。お手元に、職員研修の時に使つたレジュメとか、オモニ会の健康講座に使つた時のレジュメとか、オモニ会の会報に保健室だよりのページをもらつて、載せた原稿とか、各クラスに保健の授業ででいるカリキュラムというかそういうものを、用意してますのでそれをご覧になりながらお話を聞いていただきたいと思います。三年間には、週に一回とか二回の行き方ですが、一ヶ月に一回でも話に行くだけでも意味があるんですけども、三年間とびとびでも行くと本当に沢山の印象的な出来事がありました。初めてベッドを利用して親が迎えに来るまで休んだ子どもの担任の先生やお母さんから、本当に安心で、嬉しいですって喜ばれた事はやっぱり印象的でした。それから視力検査はいつも私が出る日に予定を組んでいたので協力できました。たまたま私が出ている日に一年生の女の子がジャングルジムから落ちて、右ひじの骨折がわかつて病院について行つてギブスをしてもらつた

こともあります。オモニ会の新聞の記事をちょっと見ていただきたいんですが、一回目、二回目とシリーズでやつて、「心、体、性」というタイトルでお話したりとか、それから「二回目は生涯を心身共に健やかに生き抜く為に」というテーマで勉強しました。そういう話をする中で、養護教諭というのはどういう仕事をしているものかとか、それから子どもをどういう風に見たらいいかっていうのを本当に私自身も勉強になりましたし、保護者の人も勉強になつたと思います。で、一学期とか二学期とかが終わりますと、オモニ会の新聞に記事を書いてくださいということで、それも資料をつけてありますが、医務室日記とか、保健室だよりとかまあその時によつてタイトルが変わつたりしていますが、そういう記事を書いて、載せていただきました。それから、一年目の卒業式は特に印象的でした。その卒業式で、六年生の答辞の途中に突然日本語で、「栗山先生一年間健康面で助けていただいてありがとうございました」と代表の児童からお礼の言葉が流れました。後で校長先生から「栗山先生今年丁度創立四〇周年の記念の年です。この学校の歴史で今回初めて、公式の席に日本人が座り、日本語が出たんですよ」と言われました。とてもそれは背筋が伸びるような緊張の日でした。オモニ達と保健室がなかつた四〇年間の在日の人達が寄り添い、支えあい、励ましあい、助け合つてこられた様々のドラマを聴くにつれて、今こうして迎え入れていただけている事に本当に背筋がしゃきつとする程の在日の人達への尊敬と感謝を感じてしまいます。昨年は九月から三月まで友人を誘つてもう一人の友人が火曜日に協力してくれました。学芸会や卒業式には二人揃つて参加しました。校長先生が私達に小学校一年生の朝鮮語の国語の教科書を教えてくださつて、私達は小学校一年生の朝鮮語の教科書が読み書きできるようになりました。そして今年度は大きな展開がありました。先生方の要請で、一年生から六年生まで全クラスに一学期から二学期保健の授業をする事になつて、実施しました。その資料もカリキュラムの中に資料がついていると思いますのでまたご覧になつてください。そしてまた一〇月には校内の職員研修で、保健に関する勉強会も開かれました。それも手元に資料が入つてゐると思います。知つておきたい学校保健の基礎的知識というテーマで、先生方の要請で、簡単な救急法の勉強とかひとりひとりの子どもの心身の発達を見るポイントとか、色んな事を話しました。今の日本の学校での一番の課題。健康教育の本質的課題つていうのはこんな所なんですよというような事もおさらひしたり、今の健康教育の学校危機管理は、日本の学校ではこういう事をやつてますよというような話、それから子どもを見るときに大事な先天的な障害や疾病、性教育についてとかそういう所を時間をたっぷりとつて

やりました。日本学校での学校伝染病、例えば、子どもに多い伝染病で出席停止扱いになるとかそういう風なのも、ファイルを作つて保健室に常備しておくようにしたりちょっと工夫しました。危機管理では、犯罪行為の被害者とか加害者とか、そういう風なのは、日本の学校でもそういう事件が多く起るのですが、朝鮮学校の子達は、チヨゴリを着るだけでも日本人から暴言を吐かれたりとか、色んな、こう、脅迫めいた、そういう被害を受けていますので、私が言うまでもなく、もつとその対応を色々考えておられるようでした。心の健康問題で、心身症についてとか、そういう事も時間を作つてやつたんですが、研修会が終わつた後も、先生方から、うちのクラスのこの子もチックがどうのとか爪噛みがどうのとかそういう色んな悩みを寄せられて、先生方は本当に、色々勉強したいんだなあつていう事が大きく伝わつてきました。最後に、養護教諭として今一番思う事です。まず一番に、第二初級だけじゃなく、第一、第三初級も含めて、毎日保健室に養護教員が詰めていたら先生方や保護者が安心できるなどと一番に思ひます。安心だらうなあと一番に思ひます。週に二回なので本来の仕事の数分の一もできていませんが、毎日出られて言葉も不由なくできたら健康診断とかそういう事もきちつと把握できて、ひとりひとりのニーズに合つた対応ができるようになればいいなあつて思ひます。今でも本当はもう先生方が行かない日は全部カバーされているという事ですから、あまり役に立つていなかもしれません。二番目に思ひことは、命を尊重しあえる健康面の協力こそ、隣に住む同じ京都人として、ためらうことなく個人的にも、組織的にも、行政的にもどんどん協力しあうべきだと思います。どこの出身であろうと、国籍がどうであろうと、何人であろうと命や健康を心配しあい、思いあうという事は、人間のあるべき姿だと実感します。それぞれが大切にしている伝統的、文化的、生活的背景、その歴史、現状の理解を深めて尊重しあえる多文化共生社会を目指す



時、命、健康、安心、安全を共通のものにできる生活の中から可能になるような気がします。未来に向かつて、教育の果たす役割は本当に大きいと思います。以上で私の発表を終わります。どこの出身であろうと、国籍がどうであろうと、何人であろうと命や健康を心配しあい、思いあうという事は、人間のあるべき姿だと実感します。それそれが大切にしている伝統的、文化的、生活的背景、その歴史、現状の理解を深めて尊重しあえる多文化共生社会を目指す時、命、健康、安心、安全を共通のものにできる生活の中から可能になるような気がします。未来に向かつて、教育の果たす役割は本当に大きいと思います。以上で私の発表を終わります。

仲尾 宏：ありがとうございました。今、栗山さんはご自分の事は何もおっしゃいませんでしたけども、長らく京都市で養護教員をされてきました。で、それを投げうつて、そして、ボランティアで、今朝鮮学校の養護教員をされているという方です。で、一條校ではありませんから経済的負担が大変で、学校の設備もそうですし、先生方の給料も、ほとんどボランティアに近いというように聞いております。そういう中でまた栗山さんが日本人として入つて、また養護教員としての専門性を活かす、そういうお仕事を始められたという全国的にも非常に稀有な存在の方だという風に改めて思いました。また、栗山さんへのご質問は後ほど皆さんからいただく事として、次に、介護の現場からのお話をいただきましょう。八年前に、NPO法人京都コリアン生活センター、愛称エルファができました。京都の方はかなりご存知になっていると思いますが、このエルファという名称は朝鮮語、韓国語のアイゴに対する喜びの時の感動詞のよう聞いております。そういうニックネームをつけてエルファというものが東九条でできました。私もその運営に関わらせていただいておりますが、ここに来ておられる、つまりティケアを受けられる方は、ほとんど全員が在日コリアンの人で、圧倒的におばあさん、ハルモニが多いんです。なぜそうかといいますと、この方々は年金がありません。国民年金法が発足した時に、日本国籍に限るという受給資格の限定をした為に、年金を受け取る事が今もつてできないという状況の中で、この方々は生活保護を受けている方々が非常に多い。生活保護を受けるという事は、子どもの家族と一緒に生活する事ができない、つまり、子どもと一緒に生活していれば、その収入が合算されますから、生活保護もとれない、こういう事で、単居、あるいは老夫婦だけが一緒に暮らしておられる、そういう方々がとても多いわけです。例えば一九四五年の日本の敗戦、解放の日に一〇歳だった人はそれから

と今六二年経っていますから、七二歳という事になりますね。エルファ、来ておられる方はもつとお歳を召しています、八〇歳以上。つまり一〇歳くらいの働き盛りで大変きつい労働現場で今とはまた比べ物にならない差別の風の中での戦中・戦後を生きてこられた方、そういう方が今七五歳や八〇歳を迎えておられる。そういう方々のデイサービスをしておられるわけですが、今日は、その中の介護福祉士であり事務局長である、ナム・スンヒョンさんからお話を伺う事にいたします。よろしくお願ひします。



南 球賢氏

南 球賢：こんにちは、私が今ご紹介にあずかりました、NPO法人エルファのナム・スンヒョンと申します。私は四一歳で、在日コリアン一世になります。私と同じ世代の方は大体三世にあたる方が多いので、私が一世は、ちょっと若い方かなと、一般的に五〇代六〇代が今もう一世の大半を占めているというそういう状況です。一六年間、栗山先生が今行つて下さつてます朝鮮学校を一六年間通いました、それで、東京出身なんですけれども、主人の仕事の関係で八年前に京都に来た次第です。専門知識とか、福祉の勉強とかを特別にしたわけではなく、京都に来て、こういう福祉活動に興味があつて、エルファが設立されて一年、二年目から関わらせていただいています。歴史的な事は省かせていただいて、もう時間も限られていますので、戦後六四年の時の流れが過ぎた現在日コリアン高齢者、一世の状況はどうなのかという所を簡単に説明させていただきたいと思います。今仲尾先生からお話をあつたように、在日コリアン一世も独居高齢者が増大してまいりました。核家族になつているそういう事もあつて、家族達が皆地方に行つてしまつて、そういう事も多いです。実際にエルファのデイサービス、訪問介護、居宅サービスの利用者の方々は、生活保護を受けている方がとても多いです。実際に子どもである二世も高齢化してますし、利用者の中に二世も登場してきました。介護する二世も高齢化し、日本の社会と同じような老老介護の問題が在日コリアンの社会でも起きているという状況です。また、日本には五世がもう誕生し、一世から五世まで皆さん世代によつて抱えている問題も悩みも違います。一世は本当に苦労して日本に渡つてきて、何も無い所で自分の子どもを必死に教育をさせてきた、二世はいろんな差別を受けながらも、教育を受けて生活の基盤、在日コリアンとしての生活の基盤を築いてきた。そして三世は、日本人の人と変わらぬ教育をもう受け

てきている世代になるんですね、そうすると、価値観も多様化し一世の方から五世まで抱えている問題も悩みも変わつてきていて、ジェネレーションギャップもあります。その他にも、「言葉の壁」ですね。学校に通われないまま、日本に渡つて来られて日本でも食べる為、子どもを育てる為だけに生きてきた方々です。文字の読み書きができない、又、生活文化も違いますので、日本で生活するために大変な思いをしてきました方々です。介護保険制度が新たに市場に投げ出された二〇〇〇年の四月から、新たな介護保険制度の施行が一九九七年に国会で可決されました。それまでは措置程度で、日本の公立小学校のように、この地域に住んでいる人はこのデイサービスに行つてくださいという形だつたんです。実際に既に日本の施設を利用されている在日コリアンの方も沢山おられました。そんな中、私達は色々なトラブルのケースを見てきました。その多くはやはり生活文化とか言葉の壁によるものでした。例えば、介護保険が始まります六五歳以上の方には、介護保険証が送られますよね。しかし、それも読めない。介護保険に関するお知らせが読めないし、第一、行政とか役所からのお知らせを一番拒む世代なんですね。自分達を調べて、今度は生活保護が打ち切られるんじやないかとか、そういう役所からのお知らせは、不安材料をかきたるものでしかない。読めない方々にとつては紛らわしいからどこかに捨ててしまうという状況が多かつたんです。また、日本のデイサービスではレクリエーションで唱歌を歌つたり、折り紙を折つたり、習字をしたり、俳句を作つたりします。それは在日コリアンにとつてとんでもない話で、そういうところにほんと置かれるととても孤立感を感じてしまう。朝鮮語訛りの日本語を使つたらまた馬鹿にされるんじやないかと思つて、その施設では失語症だつて、職員達が思い込んでいた利用者もいらつしやつたとか、後は介護保険つて全て「はんこ」ですので、サービスを受けると「はんこ」、ホームヘルパーさんが来たら「はんこ」、配食弁当が来たら「はんこ」、なんですね。だけどあるハラボジ（おじいちゃん）は、『その「はんこ」ひとつで自分の人生台無しになつた、何で弁当ひとつで押さなあかんね』という事で直唾になる。私達が訪ねて行くと、結局そのおじいちゃんは本国にいる時にいい仕事先があるという事で「はんこ」を打つたばかりに自分の故郷に家族を残して、日本の炭鉱をたらいまわしにされ、天涯孤独で、ひとりでいらっしゃつたおじいちゃんだつたんです。そのおじいちゃんからすれば自分の人生をめちゃくちゃにした「はんこ」を、「何で弁当一つで打たなあかんねや！」という風に怒り出すわけです。それを私達が違うんだと、食べてサービスを受ける為にはこの「はんこ」が要るんだという事を朝鮮語で説明して理解をいたぐと、本人も、ああそうなのか、だつたら君達が俺の通帳も管理してくれ、私達が同じ

民族だという事でほつとされ、安心されたというそういうケースもありました。実際、訪問ヘルパーさんが和食メインだと、やっぱり死ぬまで我慢しないで、食べたいものをたらふく食べたいという欲求もあり、朝鮮料理をつくれるヘルパーさんを派遣してくれという依頼もあります。デイサービスでも、私達、目上の方を敬い、お年寄りは宝として敬う民族性なので、まずデイサービス等では、苗字で「さん」呼びとかは絶対しません。アボジ（お父さん）オモニ（お母さん）をつけて、前に名前をつけます。例えば、キム・スニさんだったらキム・スニオモニって呼びます。だから自然に家族的な雰囲気になってしまつていうところもあるんですけれども、「さん」付けでは呼びません。目上に対する礼儀にとてももうるさい民族という事と、介護職員に男性もいるんですけども、男性には介助されたくないんです。日本の事業所でしたら、入浴介助もトイレ介助も男性がして当たり前です。入院された場合は、男性に介助されるのですごく嫌だつたと言つんですね。エルフアでは入浴介助もトイレ介助も女性の利用者に対しては女性がします。男性が食事の片付けをすると、私達に「男にさせたらあかん」と怒るんです。そういう事も私達が理解できるから対処できます。実際にいつも横になりがちな方もアリランが流れるとい、踊りたい気分になつて起き上がつたり、いち、にの、さんではタイミングがずれても、ハナ、トゥル、セーってウリマルで力をこめると、立ち上がりたり…私達がその方々の生活史や歴史、背負つてるものやバックボーンをわかっているから介護できる。ただ介護技術さえあればいいわけではなく、その人達の心の介護を実際に提供できるのは、私達二世三世だからだと今は思つております。今まで色々な社会保障制度から国籍条項によつて排除されてきた世代です。そういう方々は新たな介護保険が始まつても、自分達が利用する感覺を持ち合わせてないんです。結局自分たちには関係ないやろ、っていう風に片付けてしまう。第一、読み書きができるので記録する手段を持つてないんです。何度も伝えて忘れてしまつたり、理解が不十分なんで



す。私達もケアマネージャーもホームヘルパーも毎回同じ説明をさせていただく、そういう事もわかつてゐるから説明するし、寄り添う事ができるんです。数多い相談事例に対応しながら、NPO法人エルファを立ち上げようと、チヨン理事長を中心に設立されました。レジュメにもあります五つの活動が定められ、今現在活動しております。日本には六〇万の在日コリアンがいると言われています。京都市には二万九〇〇〇人、その内の六五歳以上は四〇〇〇人と言われています。その方々には時間がない、喫緊の課題として、介護事業から私達は踏み出したわけです。「ウリ」はハングルで、「私達」という意味なんです。「ウリ式介護」（私達式の介護）をスタートさせようと研究会を発足し、勉強会もしました。そのウリ式とは、私達の友達がいる、ウリ食事、食べなれた食事ができる、聞きなれた歌が歌えて、懐かしい遊び慣れた遊びがある。そしてウリの空間、私達が慣れ親しんだ空間、故郷にいるような気分になれるという事で、私達の介護事業所ではこの五つをモットーにケアしております。一世の方々は苦労の連続でした。実際にエルファに来られた方々も、自分の為に時間を使つた事が無い方々なので、遊ぶという事がよくわからぬ。エルファに来て人生最高の楽しみを知り、こんなに笑つたのは久しぶりだとおっしゃるんです。そう言つていただける。ずっと長い人生、アイゴでした。私達の民族は悲しい時と辛い時はアイゴ、なんですね。アイゴ、アイゴ、つて泣くんです。しかし、逆の発想で、エルファ良かった、生きてて良かったと思える時間を少しでも提供しようという思いからエルファとNPO法人名をつけました。今、エルファには「居宅介護支援事業所」、「訪問介護事業所」、「デイサービス」が三ヶ所あります。又、子ども広場「アンニヨン」で、学童保育をしていまして、障害者達の共同作業所の活動もしています。エルファのデイサービスと日本の事業所との違いは、学校のような運営というところです。皆さん学校に対する思い入れとか憧れがすごく強いので、学校のようにして欲しいんです。デイサービスに入ると、私たちを先生と呼ぶ。「私達先生じゃないよ」と言つても、先生と呼ぶんです。朝は毎日交代のリーダーが今日はこういう日です、今日はこんなお客様がお見えになります、昨日あつた話をして、ホームルームみたいなんです。そして発声練習をして、出欠をとるように、〇〇オモニとひとりずつ名前を呼ぶと「イエー」と手を挙げて下さるんです。その後に歌、「アリラン」や「故郷の春」を歌つて、エルファオリジナルのエルファ体操をして、午前中は体を動かす。お昼ご飯食べた後は、グループ毎のゲームをしたり、全員でのゲームをしたり。エルファに一年間通うと、学校で誰でも経験するような事を全部一通り経験できるような「カリキュラム」で、年間、月

間計画をたてるのですごく忙しいんです。夏祭り、七夕、運動会、遠足、焼肉大会、紅葉狩り、花見…、いろんな行事が目白押しで職員達も大変なのですが、エルファに来て初めてづくしのハルモニ達。ここでの体験が全て初めてで、やっぱり喜ばれて、最初の頃の七夕の短冊に「早くあの世からお迎えが来ますように」って書いてたハルモニが、「一日でも長くエルファに行けますように」ってお祈りしていると、職員は「よつしやあ」って、ガツツボーズです。やつてて良かつたって思つたりするわけですね。デイサービスでは、常にやりがいと、喜びを与えてもらえてますので、最初は一世の為に何かしてあげなきゃつて思つていたんですけど、すごくそれはおこがましかつた。私達が逆に利用者の一世の方々に面倒を見つめてるようなそんな感じなんですね。介護の五つの事業所をトータルすると、だいたい一ヶ月利用されてる一世の方は、一六〇人くらいになります。一ヶ月に一六〇人くらいの在日コリアンのお年寄りに、サービスを提供しているということです。今レクリエーションで一番の行事は、訪問客、来訪者との交流です。エルファはとっても来客が多い。今まで交流した学校は七〇校になりますし。その他個人や団体をふくめますと年間三〇〇〇名を越えます。その方々への受け入れは最初からこうだったわけではありません。一気に二〇人、三十人が来ると危険性も伴いますし、見守りも行き届かない、危ない、不可能なのでは…というそういう声もあつたんですが、拉致事件の時に、交流の大しさを感じたんです。拉致事件の報道が過熱する中、東本願寺全国門徒生による、合宿がありまして、七十名ぐらいの小・中・高校生達が来たんです。その時に、おばあちゃん達と交流をしようつていう事で。それで、子ども達の中から「今一番騒がれてる拉致事件について、おばあちゃん達はどう思うんですか?」まあ責めるようななかたちで訊いたわけですね。その瞬間私達も、東本願寺側のスタッフもピリピリした緊張感がありました。その後におばあちゃん達が、一齊に「ごめんなさい」つて頭を下げて謝り、「でもそんな事は絶対二度とあつたらいけない、絶対あかん、これからは仲良くしいや」と子ども達にずっと説得するんですね。「悲しい事や、あんたらの時代はもつといい時代にしてくれや」という話をした後に、子どもたちとハルモニ達が一対一になつて、時間を設けてお話をします。子ども達は日本に来て一番辛かつた事と、楽しかった事を質問するが、辛かつた事を訊くと、皆さんすごい人生を送つていらつしゃつて、だけどそんな素振りを全然見せない。終わつた後に子ども達が感想文にね、「自分がした事じゃないのに謝つてくれた。自分はすごくそれに驚いた。いろいろ話を伺つていく過程で、多分被害者たちよりもつとしんどい思いをしてきたんだなこのおばあちゃん達は。だけど、自分

は日本人として謝れなかつた。それが悔やまれて、その日の夜寝れませんでした。」と書いてたんですね。私達はこういう交流ならどんどん受け入れるべきだと、一世の方々が生きている限り、交流したいつていう方々に対してもは〇〇%受け入れる方に職員側の姿勢も変わつてきました。子ども達が来るとハルモニ達は、「あんたら学校行つてるんか」って聞くんです。生徒達が「はい」と答えると「ええなあ」つて羨ましがつて、ずーっと手をさすり、背中をさすり、自分のおやつも子どもの口の中に押し込んだりするんですよ。そうすると、笑顔の裏側に潜んだ辛さとか苦しみとかがしつかり子ども達にも伝わつて、帰る頃には子ども達が泣きじやくつたり、その場を離れたがらなかつたりするんですね。そんな交流をすると子ども達もハルモニたちとすぐいいきしてきます。独居の方が多く、一人だとお客さんもお見えにならないので、一日何も喋らないで終わることもある。だけど、エルファに行くと誰かが訪ねて来てくれる。死にたい、生きてる事が周りの迷惑なんやつて思つていてる方々が、こんなにまだ人が訪ねて来るつて事は、「もうちよつと生きててええんか?」つて、「まだ何かの足しになるんか」という風な考えに変わり、生きる喜びがわいてくる。私達もそういう利用者を見ていると、すごい宝石を持つてたりとか、財産を持つている事よりも、誰かに必要とされるんだ、社会の一員なんだと思える事が人間にとって一番大事なんだなっていう事を感じさせられるんです。そういう意味でも私達が逆に勉強させていただいているという感じです。京都は、外国人の比率を見るとコリアンがすごく多い。観光地なのでニューカマーが定住しにくいつていう事がありますよね。でも滋賀県や愛知県の工業地帯になると、ブラジル人が多く、東北地方になるとフィリピンや東南アジアからお嫁に來た方々が一人ばっちになつた親を本国から日本へ呼び寄せるなど日本で老いていく外国人が増えています。京都でしたら、中国からの引き揚げた者が洛西、宇治、向島に集住してらつしゃつて、その引き揚げ者一世の介護が問題になつています。その方々は日本人なんだけれど、生活文化は中国にある。そういう複雑な問題を抱えている方々に対する介護にどう取り組もうと支援団体がエルファにもよくお見えになります。韓国でも介護保険制度が今年から始まり、韓国側からの専門家も沢山來るようになりました。私達が、日本にいる日本人、外国人、外国籍の人、外国にルーツを持つ日本人等、そういう人達がどんどん高齢化する事で、さらにケアニーズが多文化化していくと思うんです。そういう中で、エルファの経験がアドバイザー的な役割を果たせねばなと思つてます。最後に、写真でディサービスの様子を見ていただきます。これはある日の食事です。お食事のメニューはカレーや、シチューの日も必ず

キムチとスープは出ます。スープがないと物足りないんです。隣の写真は、チャンゴを叩いて歌を歌っています。帰る前は必ず歌って踊って帰られます。つぎの写真は運動会ですね。左側が運動会。施設内でできる運動会つてことで職員達も色々と試行錯誤しながら競技を決めます。このおばあちゃん二人は九六歳の方ですね、下はパン食い競争。勝負事になるとなぜか熱くなる民族なので、勝ち負けにはとてもシビアですね。で右側は、午前の体操。オセロもエルファに来てからおぼえました。だから斜めはわからないけど、縦と横だけひっくり返して勝負しています。これは紙結い遊びといつて故郷でやつていた遊びをエルファで実践しました。右側は、「タル」ですね。仮面。レクリエーションの時間におばあちゃん達がつくつてくれました。やっぱり色彩がとても鮮やか。左の写真は職員が布に大きい朝鮮地図を書くとおばあちゃん達が国に帰りたいって言い出してね、自分のふるさとに行つたつもりになつて、手形や足型を押しているとやっぱり平壌にも行きたい、金剛山も行きたい、白頭山も行きたいっていう事で、皆で押します。籠に名前がついていて、その籠の名前を見ながら自分の名前を覚えていく。介護保険証の名前は通名だけれども、本名が皆さんありますので、デイサービス利用時は本名、介護保険は通名です。下は、誕生会です。二ヶ月に一回チヨゴリを着て、皆でお祝いします。右は定期的に美容師がきてカットしてくれます。この写真は新潟から修学旅行で来てくれた生徒さん達ですね。左側の子はこの日ここで本名宣言をしたんですね。自分の名前は朝鮮語読みでなんて読むのつていう事から、「あんた、ウリアインガ? (朝鮮の子どもか)」とハルモニたち。職員が「キヨンシンやで」と言つたら、「じやあ僕今日からキヨンシンになります!」って言つてね、友達も皆受け入れてくれたすごくいい交流だつたんですね。で一緒にああやつて手を繋いだりして、代表で歌つたりとか、お話を聞いたりとかつていうそういう感じ。最後の写真はエルファーまつりです。左側は清水寺です。エルファ友の会代表を清水寺の森清範貫主がして下さり、在日コリアンの高齢者問題は在日の問題ではなく日本人の問題だという視点で、取り組んでいる日本の方々が友の会をつくり、清水寺を貸し切らせていただいて、年に一回エルファまつりを開催しています。右の写真もエルファセンターであった、学芸会型式のエルファまつりの時は一年に一回三事業所の利用者達が皆さん集まりますので、大同窓会になります。皆生きてたか、という再会がとつても涙ぐましい。「もうちょっと頑張つて生きような」つていいながら、とてもいい交流ができています。はい、以上です。

**仲尾 宏**：ありがとうございました。子ども達と違つて人生の終わりの時期を迎えている人々、わけても、大変な辛酸をなめてこられた在日の年寄りのお話でした。で私も時々年に一回は韓国から来た留学生や、短期研修生を必ずエルファへ連れて行っています。すると出身が同じ、慶尚道であつたりすると、おばあちゃん達は國から孫が来たような気になるんですね。方言も通じます。そして、先ほど出てきたように一緒に踊つたり歌つたり、手をさすりあつたりして話すんですが、帰る頃になつたら皆もう、涙、涙ですね。感想を聞いても日本に、仮に六週間いたとして、その間日本語を教えたり、学んだり、あるいは金閣寺へ行つたり、あるいは祇園祭を見たりするんですが、そんな感想は全部飛んでしまっています。最後に残してくれた学生達、韓国の学生の文集はやっぱりエルファに行つて良かつたって言つんですね。歴史の生き証人に会えた。私達が韓国で特に知らなかつた日本と韓国の関係を改めて知つた。そういういい文章を沢山残してくれています。ですから今もナムさんおつしやつたように、このおばあちゃん達は、介護をする私達が逆に、おばあちゃん達こそが宝物であるとそういうように思えるような存在になりつつある。これはもう本当に最初から予期しない大きな出来事だつたというように私も思います。またそのあたり、逆にいろんなスタッフの方の苦労もあるわけですが、それはまた皆さん方の質問などに応じてお答えいただく事にして、初めのセッションは一応これで終わらせていただきます。

**司会**：第一部終了いたします。お手元にあります質問用紙にもしコメント等ございましたら、お書きいただきまして、受付の方で箱を用意してございますのでその中にお入れください。事務連絡ございます。西京区洛西支所の吉岡様、伏見醍醐支所の小松様、恐れ入りますが受付の方までお越し下さい。第二部の開始は二〇分の予定です。二〇分に第二部開始いたしますので、こちらの方へお集まりください。もうひとつ補足の資料がございます。第一部の方でお話をいただきました養護教諭の栗山様の方から補足の資料ござりますのでそれをお受け取りください。

**仲尾 宏**：皆様方のご感想、質問を少し整理する時間が長すぎて申し訳ございません。今回は全部で六人の方からいただいておりますが、大部分がご感想です。お二人の方々にはまだ十分話していくだけない事もあると思います

ので、ご感想を読んだ後でまたお二人からそれぞれ追加の説明というか、補足の説明をしていただこうと思います。第一の方、「当たり前にあると思っていた保健室ができて良かったと思います。怪我とかしたら、あると心強いですしね。毎日入れないというのは大変な事だと思います。毎日入れたらいいですね。協力体制があまり進んでいないのは残念だと思いました。色々な事情があるという事は難しい事だと思いました。色々な団体と交流する事は大切な事だと思いました。」こういうご感想が一人目です。お二人目の方。「エルファの立ち上げの事実を知ったときはすぐ画期的な事のように思いました。今、定着した運営が続いている事になって安心感も覚えます。そして、ウリ食事、本当に大きなポイントだと強く思うところです。単身在宅の高齢者の生活を支えていく中で、身体機能の低下により、在宅での生活が困難になってくる事もでてくると思うのですが、介護施設入所に対して、何か気をつけていらっしゃるところはあるのでしょうか」と、こういうご質問ですので、ざつとナムさんお答いただけますか。

南 瑞賢・デイサービスは、在宅の生活を続けられる方がお見えになるところですので、エルファの利用者の方々、そしてそのご家族さんは、その次の行き場所が、一番の心配です。そういう中で、ショートステイや、特養に入る時は、ある程度そういう方々を受け入れた経験のある施設を選ばせていただいています。今後、エルファのすぐ隣に「故郷の家」という特養ができます。そちらのほうができるまいたら、スタッフも在日の方々が沢山いるでしょうし、利用される方々の歴史とか生活史とかそういうものも含んだ上で、受け入れてもらえるでしょう。今年の一〇月一五日に竣工式があります。そちらの方に行けたら一番私達としても安心かなと思っております。

仲尾 宏：ありがとうございます。やはり介護が必要になってきた場合ですね、エルファでは対応できないという事が当然出でます。すると一般的には例えば老健施設であるとか、あるいはショートステイとか色々な形が考えられます。あるいは特別養護老人ホームも考えられます、問題はそこへ在日のお年寄りが行かれて、そこで心の満足が得られるかどうか、という事なんですね。私が直接ご本人から聞いた例でも、行つたけれども、結局のところ先ほども話が出てましたが、お手玉はできないし、それから、会話が十分通じない、変な訛りの日本語を使って馬鹿にされるという経験があるので、やめたというお年寄りが少なくないんです。ですから、やっぱりお年寄りの、介護

を要する段階になつても、やはり民族とか言葉とかそういうものが障害になつてしまふ。そういう事ですので、一般的なそういう施設に行くのは可能だけれども、そういうふた面でのお金の事とは別の問題があるという事が一番大きいよう思います。それは今ナムさんのお話にもありましたように、「社会福祉法人心の家族」というのが、堺に本部があつて、そして特養を中心とした施設をつくつておられます。ここはですね、梅干しもキムチもある施設と、こういふ触れ込みです。ですから在日の方も日本人の方も一緒に入れる。そして在日のお医者さんもいれば、介護士さんも看護師さんもいる、そういうようなところにするという事で、すでに堺と神戸と大阪にできておりまして、今度の四月に京都でオープンする。そういう事になると、そこはひとつ受け皿になる事になりますね。そういういろんなターミナル・ケア期のお年寄りに対する施設というのはただあつたらしい、というだけの問題ではなくて、どのようないい處、介護、医療ができるか、そして利用者、あるいは入所者の生い立ちや生活の実態、文化、そういうものに対する理解がなければ安心して過ごせる場所ではないわけで、そういうところにやつと私達も気がついた、というように思ひます。とりわけ在日のお年寄りが多い関西圏ではそういう事が必要だという事がようやく認識されてきて、そして今、それが地に着いた活動を始めようとそういう時期に来ております。これについてはパンフレットが受付にあつたと思ひますので、またご関心のある方はぜひとも力添えいただければありがたいと思ひます。それでは次の方に参りましよう。最初は栗山先生に対し、「昨年暮れ頃だったと思ひますが、第二初級学校を見学させていただき、吳（オ）先生、」この方は校長先生の名前ですが、「吳先生に案内していただき、お話を伺い深く感動して帰ったのを思ひ出します。その折、学校内では日本語を使わないと言つておられましたが、先生が勤務してくださるようになつて少しは日本語も飛び交っているのかと思うと、少し氷が溶ける想いがいたします。どうぞいろんな面で氷を溶かせてください。私達に何ができるか。お元気で活躍のほどを。」こういうふうな見解です。ただちょっとここで誤解があると思うのは、日本語は学校内で使わないと言つておられましたが、先生が勤務してくださるようになりますけれども、それは、何か日本語を使う事が悪であるという事ではなくつて、やはり完全に朝鮮語を身につけようと思えば、日本語は使わないという事にしないと、バイリンガルにはならんのですね。というのは学校から一歩出れば子ども達は日本語の生活空間で暮らしていますし、家庭でもかなりの部分、日本語だと思います。するとそういう中で、自達の民族の文化を継承している言語である朝鮮語を身につける為には、相当な縛りをかけないと身につかない。これ

は外国語を勉強された方、あるいは外国に行つて言語を勉強された方は皆さんご経験あると思いますけども、そういう意味で使つてないので、決して政治的に禁止しておるという事ではないので、冰が溶けるという事は少し誤解があるような気がいたします。ちなみに今朝鮮学校の校長先生がお見えになつていますが、日本語教育をどれくらい、朝鮮語と日本語の教育ですね、その比率、それにまつわるお考えを、現状があれば少し」説明いただけますか。

陳一男：どうもはじめまして、京都朝鮮第二初級学校の校長をしてます、陳一男（チン・イルナム）といいます。よろしくお願いします。ごめんなさい、急に私がお話し、あの、これわかつていただきたい事は、私達は今日本に住んでいます。これから日本で定住する方向も考へておるわけなんですよ。やはり子ども達は生まれた時から学ぶ言葉は日本語です。そして家中で、お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんから朝鮮の言葉をちよつと覚えたりするんですけども、やはり、一番大事なのは朝鮮の言葉をしつかり知る事、文化も歴史もそうですねけれども、やはりそれを知るためにには、学校で、民族学校で言葉を学ぶ事が大事だと思うんです。先ほどコーディネーターの方もおつしやつてたんですけども絶対学校で日本語使つたら駄目、じゃないんですよ。学校では日本語を使う時間があります。日本語の授業があります。そして、ちゃんととはつきりした標準語（共通語）ですね、関西弁じゃなくて、標準語の日本語、漢字から始まって文法も学んでいます。そのように、私達は自分の国の事をしつかり知つて、そしてその気持ちを育てて、そして今住んでいるこの日本の事についても学んでいます。教科書も大分変わりました。私が学生の時に比べたらとても変わつたと一言で言えます。だから日本の社会についても、日本の縄文時代の、そういう歴史も学んだりもしています。だから、これ絶対誤解のないようにお願いします。だから基本は学校では朝鮮語を話そぞれどもよく交流しています。そしてまた近くにあります西京極小学校を初め色々な学校からもお見えになつています。幼稚園の時から頑張つてやつています。同時に日本語の時間も含めて、また近くに、日本の小学校があります。いつも親しくしてます梅津北小学校、梅津小学校、松尾小学校、そして嵐山東小学校、ここはすぐ近くにあるんですけどもよく交流しています。そしてまた近くにあります西京極小学校を初め色々な学校からもお見えになつています。そういう事をよくわかつていただければ、子ども達も日本の子ども達とすぐ仲良くなつてます。「バッヂ」という映画ご覧になつた方いらつしやるかもしませんが、あれはちょっと前の話です。今はそういう事は一切ありません。すごく自然に交流が盛んになっています。ましてスポーツ、中学、高校もね、中体連、高校総体から選

手権大会、すごく子ども同士の付き合いが盛んになっています。だからやはり子ども達にも通ずる面が沢山あるんです。これが自然だと思いますので、また何かわからない事がありましたらいつでも嵐山にありますけど第一初級学校に、朝鮮初級学校に来てください。私が案内して説明もしますのでよろしくお願ひします。

仲尾 宏：ありがとうございました。次は、ナム先生、「現場での深い洞察をもつてのお話胸に沁みました。根底には深い人間愛がある事にあらためて氣づき、本日の参加に感謝しています。」次の別の方、最初のほうが、またナムさんへの、これはご質問があるので、そちらを読ませていただきます。「日本籍の介護ヘルパーですが、エルファさんができると聞いたときから注目していました。言葉ができなくても何かお手伝いできる事があるのでしようか。」こういうお尋ねですので、お願ひいたします。

南 珍賢：言葉は日本語でも大丈夫です。エルファ職員今一〇五名いまして、その内の七名が日本人なんです。先ほども申し上げたように、男性介護職員が一人、日本籍でして、リーダーとしてその日の一日の「デイ」を指揮するわけですが、その時はもうハングル講座になるんです。ちょっと覚えた言葉を利用者のオモニ達にこうだ、ああだ、って言うと、それは間違ってる！って色々指摘を受けながら、今では利用者とは普通に会話ができるようになつています。介護事業所は資格を持つた方が必要で、在日だけでは補えなかつたりする。看護師さんだとか、精神保健福祉士に日本の方がいらっしゃいまして、その方々が関わつてくれてる事が利用者にとってはとても不思議なんです。「何で日本人なのにここにおんねん、もつとええとこあるやろ」って辞めさせようとする。あまりにもありがたくて、利用者は二世、三世とまたちょっと対処が違うんですね。「何あんたいつつもここにおるんや、うちらの為に何か働いてくれるん」っていう事をしきりに言われていると、またその職員にとつてはやりがいになつたり、やっぱりそういう自分がもつとここにいるべきなんやつていう風に思つてくれます。日本人の職員がエルファにいるとマイノリティを感じる、私達が普段日本の社会で感じる差別意識だとマイノリティを感じるんでしょう。そういうところでお互いの文化の違いや、そういう事を知る事、知ろうとする努力があるから本当の理解つて生まれると思うんですね。なので、私達はどんどんエルファにお手伝いできるっていう方がいらっしゃったら、来ていただきたいですし、

私達に教えていただきたい事も沢山あります、大丈夫です。

仲尾 宏：今働いている方一〇五名つておつしやいましたけどこれは全員が専従じゃないですね？

南 珍 賢：そうです。

仲尾 宏：パートであつたり。

南 珍 賢：はい。

仲尾 宏：日を決めて来ていただいたりそういう方ですので仕事の中身とかたち、時間調整はいくらでもできますのでせひともナムさんにご連絡いただければと思います。次もやはりエルファの事です。「一世の方がおられなくなつて、二世三世の方々が多数になつた時のエルファはどう変わつているのでしょうか、変わつていないのでしょうか。」これは大変難しい答だと思いますがよろしくお願ひします。

南 珍 賢：今の一世達は日本の社会で共に生きれなかつたためにエルファのような事業所が必要で、その人達を理解する者がケアしなくてはならない必然性があつて、デイサービス三事業所、訪問もいっぱいなんですね、定員は。待つてもらつているような状況なんですけれども、今後私達が年を取つた時に、別に日本の事業所でも過ごせると思うんです。普段ね、職員ともいつもその事をディスカッションするんですけども、今後一〇年もすれば一世はこの、日本、いなくなつてしまつて、メイン、介護を利用する側が二世三世に変わつていつた時も、だけどエルファのサービスがいいんだつて思えるサービスを今後私達は考えていかなきやいけない。研修生とかが来て、話を伺うと、やっぱり二世になつても三世になつても集いたい思いは強くなるんじやないかって言うんですね。なので、やっぱりエルファはずつとこれからも必要で、今は一〇〇%コリアンなんですけども、利用者の中に日本人もいた

り、色んな国籍であつてもエルファの「デイ」を利用されていくであろうし、時代が変わり世代が代わつても、エルファの介護が必要なんだって思えるようなものを今後も考えながら、つくりあげていきたいなって思つております。

仲尾 宏：ちょっと付け加えますと、エルファではその後、子ども子育てセンター、それから障害のある人の共同作業所、そういう事業も併設して始めておられます。そして経営を維持する。そして更に今おつしやつたように二世三世の時代になつても良いサービスが提供できるようにする。そういう事が現段階での見通しといいますか目標ですね。

南 瑞賢：はい。

仲尾 宏：その次、参ります。「イ・ミョンバク政権になつたので、地方参政権取得に弾みがつくのでしょうか。」これはどなたに、とも書いていませんが、在日の方という意味で、南さん何かこの事についてご意見があればお願ひします。

南 瑞賢：わからないです。イ・ミョンバク政権になつたという事でどう変わるかはわかりませんけども、でも、無年金の話もそうですけれども私達は税金とか全て納税の義務は果たさせられていて、だけれども、いざ、年金は入れなくて無年金の方もいる。外国人扱いされているけれども学校に対しての補助も全然入らない。そういう風な差別がある中でイ・ミョンバク政権に変わつた事で参政権が取得できるのかつて言われますと私はちょっとなんともまだ勉強不足で分からんんですけども、そこらへんは、仲尾先生が答えていただけたら…

仲尾 宏：はい。私も別に韓国の中政治情勢に特に詳しいわけではないのですが、この参政権問題について賛成か反対か、という事は別にして、経過から申しますと、在日の方々から地方参政権は少なくとも必要ではないかという運動がありました。それは日本の地方議会でもかなりの賛成があつて、今、五百数十の地方自治体の議会が地方参政権を永住外国人には認めるべきだという決議をしております。それから、国会にも度々提案されました。けれども、廢

案、あるいは継続審議というかたちで、成立には至っていないという現状です。そして、その時、永住外国人に選挙権を与えるという事について、反対意見の論拠として、相互主義という事が言われました。日本で在日韓国人に与えられるならば、韓国の方でもそうしたらどうかと。その事を韓国の国会は受けとめまして、既に韓国では、永住外国人、日本人を含む外国人に地方参政権が与えられまして、今から言うと一昨年に既に韓国に永住している日本人がその権利行使しました。ですから相互主義という点では逆に韓国の方が一步先に進んでいるんですね。日本には、日韓議員連盟があります。韓国では韓日議員連盟があつて、両国の色々な懸案などを話し合うという事が少しづつ前進しております。議員連盟で、今その事をどのように高めてゆくかとこういう話し合いが進んでいます。と、いうように聞いております。ですからこれは韓国の政権の政策以前にもはや日本側の政権の問題だという段階ではないかと思います。私なりの見解で不十分な点があればまたご指摘いただいたらいいと思うんですが、とりあえず現状を私の知ってる限りの事で報告させていただきました。次の方ですね、「介護について暗いイメージがついてしまう昨今ですが、エルファの取り組みの話はとても前向きでパワフルな印象を受けました。」こういうご意見をいただきました。最後の方。「今日も貴重なお話をありがとうございました。エルファ友の会についてもう少しお話をお聞かせください。」また、ナムさんお願いします。

南 琉賢：はい。エルファ友の会は清水寺森清範貫主を代表にしまして、末本雛子さんを事務局長に、約一五〇名の会員がいます。その会員のもとで会費を徴収していただきたりとか、先ほど映像がありましたようにエルファ祭りを開催しています。その時に入場料をいただき、エルファに寄贈していただきたり、友の会独自で、講演会やバザーを開催していただいています。そこでの収益をエルファに毎年寄贈していただいているんですね。だいたいこういう活動がメインになつております。

仲尾 宏：じゃあその友の会への入会とか、事業の事についてはエルファさんのほうに問い合わせていただければいいわけですね？

南 琉賢：はい。

仲尾 宏：はい、ありがとうございました。今日はまだ少し時間が残つておりますので、先ほど実は栗山さんはもつと沢山の映像資料を持つていていたなんですが、それが途中で終わつておりますので、これから約一〇分くらいの間もう少し映像をご覧ください。

栗山千代美：この写真は、初級学校は保健室がないだけじゃなくて給食もないんです。揃つている全校生が月に一回カレーを食べる日があるんです。第三木曜日にオモニ達が来てそこで調理して全校生がカレーを食べるという。オモニクッシ、オモニ給食つて言つて、一ヶ月に一回だけお弁当を持つてこなくてよくつて、毎日とつても素敵なお弁当を子ども達は持つてきていて、私もお弁当を持つて行つてるんですけど、幼稚園部の方は、一週間に一回オモニが来て幼稚園の子ども達だけに給食をつくつておられます。その時は私も一緒に幼稚園の年長組で、カレー、第三木曜日はいつも幼稚部でも伝統食のキムチがついています。この日は二人欠席だつたんですけど一緒に揃つて、『いただきます』をしていただいてます。写真の説明は以上です。

仲尾 宏：他に言い足りなかつた事あつたらどうぞ。

栗山千代美：お手元に、コリアン学生文化センターフェスティバルの論文の綴じたのがきてると思うんですけども、大学生が私のところへ論文を書きたいので、インタビューより来られたんです。学校保健の事をとにかく調べてまとめてたいという事で、色々協力してこのフェスティバルは、また入選とかそういう受賞のあるフェスティバルで、昨年度の時も、こんなに立派にまとめたら絶対受賞する、とか言って励ましてやつたんですけどもその時受賞できなかつて、二年がかりで取り組み二年目にもう一回構築しなおしてまた調べなおすて、このようにまとめたら受賞されました。私は大学生のその熱意にもう感動してしまつて、学校保健っていうのは日本社会でもだんだん予算をカットされるし、授業時間もカットされると、暇な時間にしてくださいという感じでどんどん隅っこにやられるんですけども、勿論、だから、そういう風に朝鮮学校には保健室も勿論ないですけども、こういう風に徹底的に調べ上げたつていう事です。これができた時に私は一人でも多くの人に読んでいただきたいと思って、今日、私の話を聞くよりこ

れを読んだ方ががうんと勉強になると思つて、最初私の資料を出さずに、これだけを配つてくださいって一番最初に言つてたんです。是非これに目を通してあげていただきたいと思います。

仲尾 宏・ちなみにその学生達というのは、在日の学生で日本の大学に進学している学生ですね?

栗山千代美・はい、薬科大とか。

仲尾 宏・ありがとうございました。それでは今日私も主催者の方で用意しましたデータは以上ですが、今この場で何かご質問ご意見があつたらお受けしますがいかがでしょうか。はい、それではございませんようでしたらこれで終わります。来週は、看護師のお二人の方に登場していただく事になります。是非ご来場ください。どうもありがとうございました。

司会・連続フォーラム「チョゴリときもの」第三回終了いたします。来週は三月七日、「看護師の勤務から」と題しましてお話を伺います。先ほどの資料の件なんですが一部こちらの方で不手際ございまして、来週もお越し頂きましたらその時に用意させていただきます。来週お越し頂けません場合はファックスなりで郵送させていただきますので、お帰りの時にお申し付けください。よろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

## 第四回 「看護師の勤務から」

パネリスト

沈 里美氏（シム リミ・在日三世）

京都市立病院勤務

高山 克子氏（タカヤマ カツコ・在日三世）

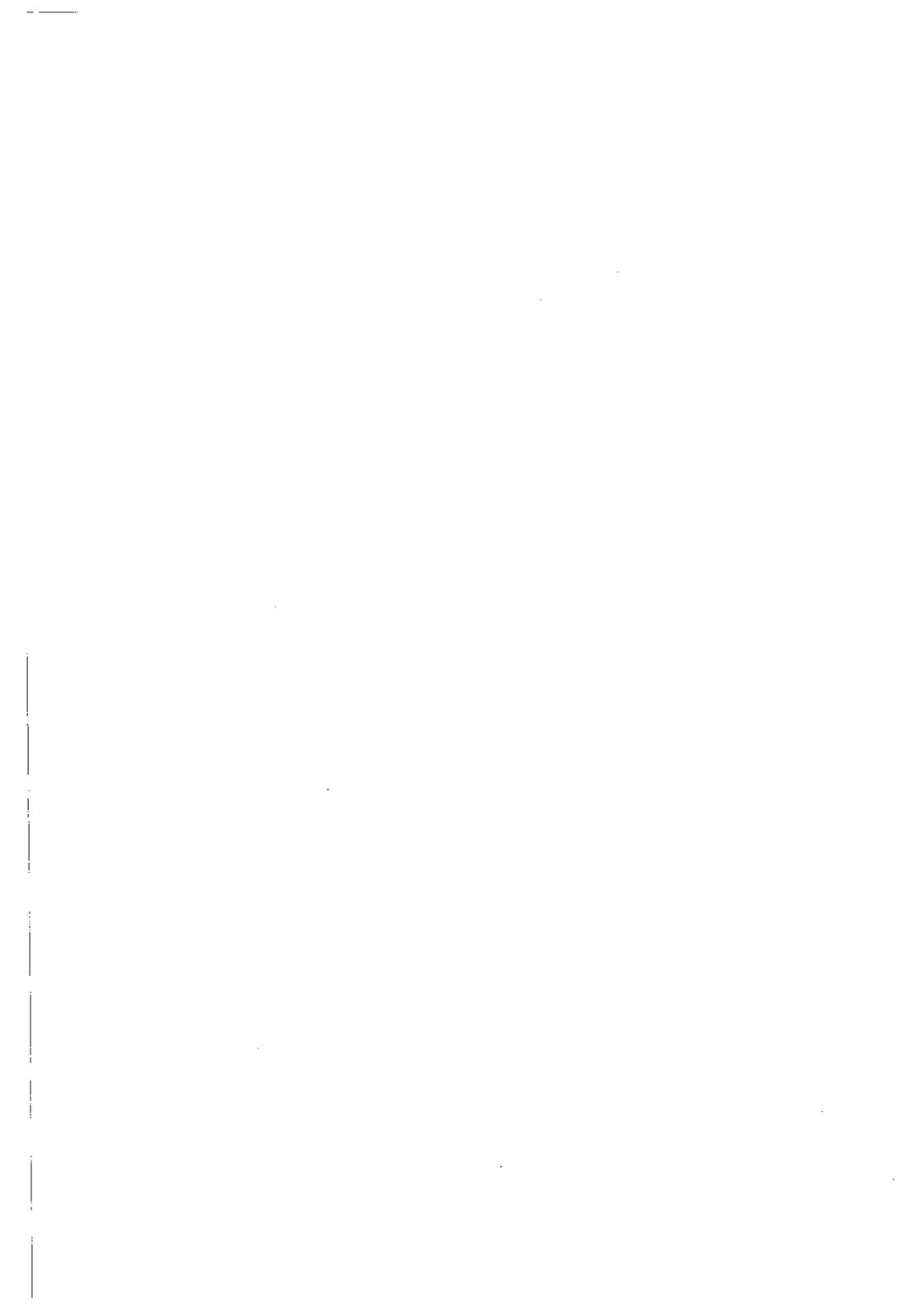
岩倉病院勤務

仲尾 宏氏（ナカオ ヒロシ）

（京都造形芸術大学客員教授）

コーディネーター

二〇〇八年三月七日（金）開催



司 会：みなさんこんにちは。今年度二〇〇七年度最後の「チョゴリときもの」です。こちらの国際交流会館が一九八九年にできまして、その三年後一九九二年からこの「チョゴリときもの」が始まりました。最初は会館のオープニング三周年記念イベントと致しまして何かいい企画ないかなと考えていた時に丁度こういった在日韓国籍、朝鮮籍の方の事を紹介する事業が余り無かつたもので、それに加え仲尾先生から国際交流というきれいな言葉の中にはいろいろなものがありますけども、やっぱりその中には在日のことを忘れてはならないという言葉を丁度一五年前にいただきました。それなら三周年記念イベントとしましてこの国際交流会館に本当にふさわしい議論として初めて企画したものがこの「チョゴリときもの」でござります。最初企画したときはまさか今日まで一五年間続けられるとはとても思いもしませんでした。私だけではなくて仲尾先生も同じだと思います。それがですね、一年、一回で始めてみましたらたくさんの方に来ていただきまして、また次の年もお願いしますという方向へ渡つたものでありましたので、次の年の企画、また次の年の企画という事で今日に至つて一五回目を向かえることになりました。今も関心を持つていただいて本当に毎回来ていただいた皆さんのおかげだと思います。それでは今日はですね今年最後のチョゴリときもの「看護師の勤務から」ということで始めさせていただきます。本日のパネリストの方を紹介いたします。まず沈里美（シム リミ）さんです。

沈 里美：沈里美（シム リミ）です。よろしくお願いします。

司 会：お二人目が高山克子さんです。

高山克子：高山克子です。よろしくお願いします。

司 会：「一ティネーターは仲尾宏先生です。よろしくお願いします。

仲尾 宏：よろしくお願いします。今年もはや最終回の今日を迎えました。この「チョゴリときもの」フォーラム



仲尾 宏氏

全体については今年一五回目の節目という事で司会の鄭 昌根(チヨン チャングン)さんから詳しく述べていただきましたのでだいたいどういう経過で始まつたか、どういう所に思いがあつたのかご存知いただけたと思います。今日は「看護師の勤務から」というテーマにいたしました。今年になつて勤務医の方。それから地域医療に携わつていらっしゃる方、民族学校の養護教育、また現場の方のお話を聞いてまいりましたけれども今日は看護師さんです。お二人の話にまいります前に今日こういう新聞記事を資料としてお付けしておきました。これはどういう事かといいますと国家公務員はもちろんですが地方公務員でも国籍条項があつて日本国籍を持たないと採用しない。受験させない。という事があります。まだ全面的にこの問題が解決しておりませんが仮に採用されても管理職につけない、管理職のための試験が受験できないという事がありました。それで東京都にお勤めの看護師の鄭 香均(チヨン ヒヤンギュン)さんという方がその新聞記事の右下にありますけれども、上司から試験を受けてみたらどうだといわれたので気軽に願書を出したけれども国の見解があつてあなたは受験できないという東京都の返事だつたんです。それで裁判を起されました。二審の東京高裁では鄭 香均さんの言い分が認められたんですが、最高裁はその高裁判決を逆転しましてやはり受験できないという事を最高裁の判決として出しました。したがつてそれはもう判決として確定しているわけですけれども未だに公立病院についてはそういう問題が残つております。今日お話しただくお二人の方はいずれも民間病院の方ですからそういうことはありえないんですけども、しかし、いずれにしても看護の現場といふのは私達が想像する以上にいろんなことがあると思います。そういう中で在日としてお二人が勤務されている中で看護師として、同時に在日の看護師という立場も含めてご本人のお仕事や患者さんへの思い、そういうつたものをお話をいただけたと思いますのでお願ひいたしました。まず最初は京都市立病院勤務の沈 里美さんからお願い致します。

沈 里美・座つてお願いします。皆さんこんにちは。自己紹介させていただきます。沈 里美です。私は在日三世、在日コリアン三世で京都に生まれて育つています。現在は京都市立病院に勤務しております。年齢は三八歳になります。私は小学校の時は日本の学校に通つておりました。中学校から民族学校に編入した状態になります。うちの

家の方針で小学校までは日本の学校に行き、中学校に上がる時点で両親から「どっちにする、日本の学校でも民族学校でもどちらでもいいよ」と聞かれました。当時兄と姉も民族学校に通つておりましたので自然に自分も行きたいなどという気持ちになつていきました。当時私が通つていた小学校に五、六人くらい民族学校に進むという子がいました。三人は韓国中学校、二人は朝鮮学校に行くと決まっていて、結構自分自身にとつてはそういう仲間がいたことが心強かつたんで自然に民族学校に行く事を選びました。

民族学校に行つたらそこで朝鮮語を習うんですけども、「シム リミ」と紹介させてもらつたんですけども、日本語読みでは「チン サトミ」と読めることがあるので、今の職場では「チン サトミ」で働いております。日本学校では「青山里美」という通名がありましたので、その三つを使い分けたりとか、自然にその場に応じて名前を使つてきたよう思います。どこから「チン サトミ」っていう風に働き始めたのかは、ちょっとともう明確に覚えていないんですけども何かの書類を書く時に「フリカナ」って書かれたところに自然に「チン サトミ」と書いたんだと思います。民族学校に通つていた時には「シム リミ」って言われていましたし、親しい友人はみんな「リミ」と呼んでくれます。

進路選択についてですが、まず看護師志望の動機を皆さんにお話したいと思います。民族学校に通つていた時はやっぱり将来のことはかなり不安に思つっていました。実際兄姉二人いるんですけども進路のことはすごく迷つていまして、就職先がやはりなかなか無い。自分も高校くらいから何か手に職をつけていないと、という漠然とした気持ちはありました。丁度その時、同級生のお姉さんが民族学校卒業で看護師の資格をとつたというのを聞いて、「これしかない」と簡単に進路を決め、そこから看護師を目指す事になりました。民族学校を卒業して看護師にどうしてなつていくかという事なんですねけれども、民族学校は民族学校の高校卒業という資格は認められておりません。高校へ通つていても各種学校の域になりますので、当時の大学受験検定試験を受けて、それから正看護師の専門学校に行くという道がひとつ。もうひとつは、今は准看護師制度が廃止になつたんですけども、当時准看護師、正看護師二種類、甲乙と分かれていました、准看護師専門学校なら中学校卒業でも入学できるという状況だったので、後者の准看護師専門学校に行く事に決め



沈 里美氏

ました。准看護師専門学校は京都にもあつたんですけども、大阪に在日コリアンの病院があつたことと、そこに通つたら大阪府立の通信制の学校の四年生に編入できる。そして、その四年生の課程を一年過ごしたら府立高校卒業の資格が取れる。あと准看護師専門学校も近くにあるという事でその条件を選んで大阪のほうに行く事にしました。だから大阪に行つた当初は大阪の病院に勤めながら准看護師専門学校に通学して、あと通信制の高校で学ぶと言う一年間すごくめまぐるしい日々を過ごしていました。今になつたら楽しい思い出です。准看護師専門学校卒業後、正看護師専門学校に入学して、平成五年に正看護師国家試験に合格し、正看護師になりました。

次に勤めていた大阪の在日コリアン病院についてお話ししていきます。前回のフォーラムでエルファアって言う在日韓国人の介護施設を紹介されていたと思うんですけども、まさにそういう状況の病院バージョンです。だいたい私の感覚で具体的なデータではないんですけども、八〇・九〇%が在日の患者様で職員も九〇%以上やつたと思うんですけども、すべて私のようなステップを踏んで看護師になつたという方がほとんどでした。医師、検査技師、レントゲン技師、薬剤師、リハビリ技師などもほとんど在日の方で、この話をすることは二〇年前のことなので一世の方がかなり多かつたです。やはり言葉のハードルがあります。一世の方は、朝鮮語しか話せない患者様がすごくいらっしゃつたんですけども、何とか私達は朝鮮語も習つてきましたので会話には特に困つた事はなかつたと思うんです。中にはすごい朝鮮語の方言もあるんですけども何とか聞き取れて会話できていたように思います。とてもそこで印象的だったのは、今の病院だつたら患者様に対して「高山さん」とか「仲尾さん」とか言う風に呼ぶと思うんですけども、そこでは「何々アボジ、オモニ」、「高山オモニ」とかそういうような敬称をつけてお呼びしていた事を今でも印象的に思い出します。今は京都の日本の病院に勤めているんですけども、いかにその時特殊だつたのか実感しているところです。でもやっぱり一世の方はスタッフが在日だつたことはすごく安心できたり、和む状況だつたと思いますし、私達も見習いでドジな事もいっぱいして来たんですけども、自分達の孫のように優しく見守つてくれていたんだと思つています。今、この病院がどうなつているのかちょっと調べたんですけども、一般病棟と介護療養型医療施設を併設しているようです。関連施設で老健施設とか訪問看護ステーションを運営しているみたいなんですかね。詳しい事はよく分かりません。多分今問題化されている一世の高齢患者さんの治療と介護に大きく活動されている事だと思います。

次に今、京都市立病院に勤めておりますのでそこでのお話をします。正看護師の資格を取った後は、自分でも京都に帰りたいと思っていましたので、京都に帰ってきました。実質看護師の免許を持っていて就職には不利にはならなかつたです。できたら公立の病院に入りたいと思い、京都市立病院に就職しました。その時自分はそんなに特殊とは思つていなかつたんですけども、本名「沈」で就職していたのは多分私一人だつたと思います。仲尾先生が調べてくださいましたんですけども、在日外国籍の在職者が京都市立病院に五名だそうです。名前で在日の方か分かるんですけどもやはり通名を利用されているようで、どなたが在日の職員かよく分からぬ状況です。私は、中学校からずっと「沈」で過ごしてきました。ここに五年いて現在消化器外科病棟、外科つて言つたらちょっと怖いイメージを当初は手術室に勤務していました。ここに五年いて現在消化器外科病棟、外科つて言つたらちょっと怖いイメージをもたれる方多いんですけども、そこで九年、もうすぐ一〇年になるんですけども勤務しています。患者様からの私に対する印象は、名前がやっぱり変わっているな、違う国の人やなって言うのは漠然と思われていて、まず聞かれるのが「珍しいお名前ですね」ということと「どこの国の方ですか」とか「日本語が上手ですね」といわれる方が多いです。そう聞かれたら「在日コリアンの三世です」って申し上げるんですけども、そこで「どうか」って分かってくれる人が大概です。分からぬ人に聞いては細かく説明します。まあそういう会話がありますけども特に患者様とのかかわりで困つた事はありません。ただ自分の中での心の動揺という時は時々あります。それはどんな時かと申しますと、入院された方なら分かると思うんですけども、病室にはベッドとテレビが一緒にあるんですね。ベッドがあつたらテレビつて感じで。やっぱりそのテレビの報道で北朝鮮のバッシング報道がされている時、拉致事件を認めた時とかミサイルとか色々あつたんですけども、やっぱりどこへ行つてもあの画面なんですよ。その時やつぱりちょっと肩身の狭い気持ちはありました。でも実際に差別的な事を受けたりとかは全く無かつたです。ただ自分の中でもちょっと動搖があつたぐらいです。

このフォーラムの機会を与えられるまで特に気にしてスタッフに自分の国籍のこととかを深く話しした事が無かつたんですけどもちょっと聞いてみました。興味があつたので。四八歳の先輩看護師さんですけども「名前が変わつていて違う国籍の人とは思つていた。在日とは何となく分かつてました。でも自分の周りには通名使用の人がほとんどやつたし、どうどうとしたはつきりした人やな」という意見をいただいたのと、もうちょっと若い看護師さんに

聞いてみたんですけどもその子は二三歳。「在日の事は学校の授業で学んで知っている」という事、びっくりしているんですけど「バッヂの世界ですよね」って言つていました。そういう映像の世界でも在日の事とか理解して知られているんだなってその時ちょっとと思いました。「韓国語も日本語も話せて韓国に由来のある人やとは思つてたけど在日とは知らなかつた」という意見です。普段私は国籍の事気にして働いてないんですけど、はじめてこんな意見聞いて、患者様もスタッフも私に対してやっぱり不思議な印象を持ちながらも、どこか聞きずらかつたのもあるのかなと思いました。あと今まで、家族も学校も大阪の病院でもそうやつたんですけど、在日というのが自然で、まわりの人があどう思つているのかとか無頓着に生きてきたように思います。ただ前に第一回の金先生のお話し聞いてちょっとと感銘受けたんですけども、「自分を認めて相手にも理解してもらう」人とのかかわりについておっしゃっていました。そう思つたら自分が人に分かつてもらおうとするアクションが少なかつたんだなと思って、今後は自分の存在を身近な人に伝えて行きたいと、今後の自分の課題としています。あと私は三世になるんですけども一世、二世が苦労してこられた時代からかなり時代が変わつたと思っています。あと病院に入院する人つて思うんですけども、人の国籍とか医療者の国籍というよりは自分が治療を受けるのに必死な状況なのでそんな事はあんまり関係ないんちやうかなと思うんです。実質今勤務しているところが手術受けにきはる人ばかりなんですねけど、大概の方がこんな事言つていいのか、やっぱりガンの患者さんが多いんです。がん治療の種類は色々あり、手術や化学療法等、いろいろ受けはるんですけども、自分が生きるために必死な状態。それどころとちやうねんていう印象があります。そやし一番は最善の治療を受けたいという患者様のご希望だと思うんで、それに関しては国籍は関係ないと感づます。

職場での個人の評価についてですが、どこの職場、看護師以外でもそうだと思うんですけど、やっぱり実力と信頼だと思います。細かな気配りができたりとか、今働く環境においては国籍とか関係していないと思います。

今まで自分がそんな役職の事とかあんまり考えしたことなかつたんですけども、東京都で在日の看護師さんが管理職を許可されなかつたというのを初めて聞いたんですね今回。先ほど仲尾先生から資料いたいたんで、また読んでもらつたらしいんですけど、京都市でもやっぱり外国籍の方の採用は許可されていても役職についてはそうとは限らないようです。今後自分以外にも有能な先輩とか後輩が現れてくると思うんで、その人たちが残念な事にならないように今後、評価、京都市の課題としていただきたいなと思っています。

あと両極端な病院、大阪の在日の病院と今の日本の病院と過ごしてきましたんですけども、今の病院の入院患者さんのことにお話するんですけれども、ほとんどの方が日本人の中、外国人国籍の方がいらっしゃるっていうような感じです。内科では結構もつと在日の一世の方とが多いんじゃないかなと思うんですけども、今自分の勤務しているところは外科病棟で手術とか急性期治療を受ける方がほとんどです。だからだいたい二世とか、二ユーカマーの方の入院が多いです。私も十分ではないんですけど多少朝鮮語が使えますので簡単な通訳をした事があります。手術を受ける方で言葉が分からなくて、手術に付き添つたのと、あと手術後の訪問もしました。手術された方なら分かると思うんですけども、手術自体本当に怖い思いで皆さん挑されますし、その中で同じ言葉を使える者がいた事は安心できたという言葉をいただきました。後はつい最近の事なんですけれど、お父様が韓国の方でお母様が日本の方で五ヶ月のお子様が重傷感染症、もうどうしようもならない状態で結局はお亡くなりになられたんですけども、英語を使えばある程度の話はできただんですけど、細かな感情というのはなかなか伝わりにくくって、すごく危ない状況なんて理解いただく為にちょっと簡単な通訳をさせてもらいました。残念な結果にも関わらず通訳した私にも感謝して帰られたそうです。今、ここでも医療通訳システムの事業が行われているそうですが、ごく少数かもしれませんけどやつぱりそういう人にも安心感を持つていただけるような、そういう活動を今後も続けて行つて欲しいなと思うのと、自身ももうちょっと語学を磨いて役に立てたらと思っています。

あとは在日の方で入院されている方は、私の勝手な印象なんですけど通名利用が多いなと思うんです。私の名前見て初めて「私も二世なんや」と打ち明けてくれる人もいるんですねけども、本名で受けられる方はほんまごく少数のようになります。両親との会話の中ではつとした事があつたんですけども、「老人ホームとか行つたら朝鮮人やと思われたら居にくいな」という言葉がボロリと出た事があるんです。これ聞いた時には通名利用で入院される人ってこんな気持ちを持つてるんかなっていう事を初めて感じたんですけども、時代が変わったと言つてもやっぱりこういう心の壁を持つている一世、二世の方はたくさんいはると思います。少ないですけど私とか在日看護師がもつと大きな力になつて何ができるというわけでもないんですけど、存在 자체で安心させられたらしいかなとは思つてます。一般的の外科病棟つて結構手術だけではなく、医療に関わつてはる人がいはつたら分かると思うんですけども、終末期、ターミナルステージの患者様も一緒にいはることがまだこの日本では多いんです。いますぐホスピスとか

専門の病院たくさんできつたるんですけども、やはりこういう一般外科病棟に戻つてこられる方がすごく多いです。それは日本の社会でも問題になつてゐる事なんですけれども、患者様も以前から知つてゐる看護師がいるところにもう一回入院してそこで看取つて欲しい気持ちも多少あるそうです。その亡くなられる患者さんとかみでいるんですけどやつぱりちょっと民族性が出てきていますね。私達、朝鮮民族つてすごく儒教の精神がかなりつよいし、喜怒哀楽がものすごくはげしいところもあるので、両親への熱い思いとか、その悲しみ方とか、家族の結束とか、すごく民族性が出るなど思います。日本の方でも韓国・朝鮮、色々国籍関係なく思うことは、やはり表現は違つてもどこの国でも家族と思う気持ちとかつて、万国交へんなど、今の病棟一〇年勤めていますけどそれは言えるなと思います。あとごく少数かもしれませんけど私とか高山さんとか外国籍を持つ医療者がそういう患者様の支えに、どういう形についていうのは漠然としているんですけども、なれたらいいなと思います。

ちよつとまあ色々今話してきましたけれども、最初看護師の資格を取る時に自分自身思つたことは、やつぱり民族学校卒業という事で、看護師になるのに、人よりちよつとハンディをうけているように思つていたんです。すごくそれで不満に思つていたこともあるんですけども、今思つたらしい期間を過ぎさせてもらつたんじやないかと思うんです。今の新人看護師は本当にかわいそうなんですが、卒業したらすぐ実戦の場に入れられてすごい学業と実戦のギャップに苦しんでいます。後輩とか見てもかわいそうやなと思うこともよくあるんですけど、逆に自分らの時代は見習いから入つて働きながら学んで、資格取つた時にはもう看護の現場に慣れていましたんで、そう思つたら人より遠回りしてきたように思つたけども最後になつてすごい自分の財産になつてゐるし、良かつたなつて今すごくひしひし思つています。

今まとめて言うと、こういう自分らが結構困難なく生きて行けているのも一世とか二世、両親もそうなんですけども、沢山戦つてきて戴いたこの権利を確立してもらつたつていうのをすごく感謝しています。ちよつと医療現場とは離れるんですけども、ちよつと両親の事だけ話しして終わりたいと思います。うちの両親は在日コリアン二世なんですけども、父が七五歳、母が七一歳で左京区で今元気に暮らしてます。すばく父は日本の文化が大好きなんですね。朝鮮の歴史より日本の歴史を言わしたほうがバーッと伝えられるくらい、すごく日本のこと大好きなんです。でも、やっぱり拉致事件を北朝鮮が認めた時は、もともと日本のことが好きで「帰化」もちよつと考えていたみたいな

んですけれども、その時は両親も動搖して父が「帰化」したいとか言つたことがあるんです。母も念願の、今もずっと言つているんですけど、選挙にとりあえず行きたいらしくて、「帰化」したいと言つてたんです。私も当時、再入国許可証というものしか持つていなくてパスポートがないんですね。だから海外旅行もお友達となかなか行けなくて、パスポート欲しいし、ほんならやつてみる?とか言つて簡単な気持ちで「帰化」申請に向き始めたんです。けれども色々手続きがあつてややこしいのではしょりますが、自分の本国から戸籍を取り寄せたり、整理しなあかんことから始まつて色んなトラブルがあつて、やつと戸籍が取り寄せられました。すごい何ページもひいおじいさんとかの名前がバーッと書いてあつてそれを見た時に本当にちょっと胸が熱くなつたんです。なんともいえない、すごい自分のルーツを目の当たりにして、両親に「私このまでいたいな」って言うのを相談したんですよ。そうしたら両親も分かつてくれてほんならこのままにしようか、っていう事になつて結局「帰化」をやめ、今は韓国からのパスポートがおりまして、韓国籍を取得した状態になります。ほんなら三人で韓国行こうかつて三人で行つてきたんですけども、やっぱり故郷の地を踏んだ時に両親は「ものす」と嬉しそうでした。ただやつぱり高齢でもあつたので韓国料理がずっと続くと胃を悪くして、帰つて来たら日本料理をすごく懐かしんで「おいしいわ」って食べていたのを思い出します。そんなところから見ても日本も韓国も朝鮮も全部その文化が好きな状態にうちの両親も私もなつていい状態だと思うんです。それで、どこの国つて決めなければならないとかではなく、三つとも自分の国でええやん、て言うような気持ちを三人というか家族全員がもつたように思います。私も友達の結婚式にチマチョゴリを着ていきますし、茶道を習つてるので着物も着るんですね。だからそういう在日の人もものすごく今多くなつてゐるんちやうかなつていう感想を最後にしてお話を終わりたいと思います。

仲尾 宏：ありがとうございました。幾つか制度上の問題からもお話をあつたので、その点だけ少し説明を追加的にさせて頂きます。まず民族学校卒業者が看護師になる方法という事を一二と書いていただいてますが、これはどういう事かと言ふと、二〇〇三年まで日本の国公立大学は民族学校などの外国人学校卒業生の受験を認めておりませんでした。じゃあ国公立大学どうすればいいのかという事ですがここに書いてありますように日本の高校の通信制高校あるいは定時制高校に在籍して、そして大検を受けてから本番の大学受験に取り掛かると。こういう三段階を踏

まなければいけないという事だつたわけですね。そういうわけで沈さんは高卒扱いで看護師資格、正看資格を取ろうと思えばそういう手順を踏まねばならなかつたと、こういうことですね。それからこの正看、准看という区別は今はなくなりましたけども中卒は准看、高卒は正看というように別れておりました。これは単に学校卒業だけではなくて、資格の中にそういう差がありますから就職した後も待遇面に差がある。こういう差別的な扱いでしたけれども、今はそれは無くなつたということあります。それから患者さんに通名が多いという事は、これは国民健康保険などの健保の関係だと思うんです。というのは国民健康保険証は本人の証明として非常に大事なものです。だからそこに本来は本名でないものが書かれているのはおかしいんですけども、厚生労働省、旧厚生省は本人が外国人登録において通名、日本名を使つていて。あるいは名乗つていて健康保険証についても日本名でもよいと、そういう扱いをしているんです。その結果大部分の方が日本名で通院あるいは入院されている。我々病院に行きましても在日の方が多い地域でも朴さん、金さん、李さんという名がめつたに呼ばれないのはそういう理由なんですね。ですからそういう扱いがどこからきてるかという事を考えるときに色々考えさせられることがあります。それからもうひとつはパスポートが無いとおつしやつっていたのは、朝鮮民主主義人民共和国と日本国とはまだ国交はありませんのでそれで渡航する場合は本来、朝鮮籍の方は北の共和国のパスポートがあればいいのですがそれが取得できませんからそれで韓国へ行く場合は臨時パスポートのようなものと日本政府の再入国許可証を取つてそれで始めて海外に行けるとこういうことになります。韓国の場合は一九六五年に日本国と国交を回復しましたので韓国のパスポートを申請して取得して海外へいくとこういう差になつてます。まあ少し分かりにくいくこともありますが気が付いたことはそういうことでまたご質問があればお答えしたいと思います。それでは次に高山克子さん。そこには日本と書いていますが在日の方です。よろしくお願ひします。

高山克子：こんにちちは。高山克子と申します。パネリストのところに日本とありますが私は在日三世です。こことこで日本となつておりますのは、私が「帰化」をしたからなんですね。「帰化」のことについてはまたお話の中で話していく事としまして、私自身の生まれは大阪の生野区のすぐ傍なんですね。在日韓国人の方が非常に多い町で生まれ育ちましてそこで幼稚園、小学校、中学校と過ごしました。だいたいそうですねクラスの中で三分の一くらい



在日韓国人のがいたと思います。三分の一くらいの在日韓国人の中の一人だつたんですが、そうですね、本名を使つていった方って言うのは、やはり二人か三人くらいだつたように思います。私もこの高山克子の通名でずっと過ごしております。「帰化」の前に本名を使つていたかというと、そうではないんですね。在日韓国人の方が沢山集まる町の中で通名を使つて生きていくことが普通だつたんです。だから本名を使う事の意味とかをあんまり考えた事も無かつたですし、この克子という名前なんんですけどね、私、四人兄弟の三番目として、四番目の弟と七つほど年離れるんですね。お父さんとお母さんからしたら、この三番目のこの子で子どもは終わりやと思つたみたいなんです。それで、今まで上の二人の姉、兄は、ハルボジに名前を付けてもらつてたんですけど。父親がね「この子だけは僕が名前を付けたい。」と言つたんですけど、やはり母方のハルボジがそれを許しません、克子つていう名前をハルボジが付けたんです。人に勝つのではなくつて、自分の中にいる自分に勝つことほど値打ちのあることはないという事ですね。このようなエピソードがあつて、克子っていう名前を付けてくれたので、この名前自体が、自分が大切にされて生まれてきただ子でもある、と言う思い出なのですね。なので、どうしても本名を使うつていう事にはなかなか思いいたらなかつたんです。ただ、今になつて沈さんの話とかを聞いたりすると、本名に魅力を感じてしまつたりするんですけどれども、どうしてもまだ抵抗があります。なぜかと言いますと、私が小学校六年生くらいの時に、急速に本名を使おうやないかといふような運動が、学校の先生の中に広まつたんですね。小学校の卒業にかかる年でしたから、その時の担任の先生に、今まで私は高山克子で生きてたのに「お前は金で卒業せい」とある日突然言われてしまつたんです。こうやつて色々学習させて頂く中で、その先生つて言うのはすごく本名の大しさをわかつていて、一生懸命になつて勧めてくれたんだつて今は思います。たゞと高山克子で生活していたのに、ある日いきなり「卒業証書は金で受け、キムクッチャで卒業せい」と言われた時に、逆に今までの自分を否定されてしまったような気分になつてしまつたんです。急に「お前の名前は今からこれじゃー！」みたいな風に言われてしまつて。それで私自身は思わず『本名嫌です。』って言つてしまたんです。『通名で卒業式受けたいです』つていうのを言つたんです。そしたら先生が「お前には愛国心がないのか」みたいなことをクラスメイトの前で言われてしまつて、愛国心で言うよりも、私が今まで使つてきた高山克子

の名前は、おじいちゃんとお父さんが、私の名前を付けたがって、色々とせめぎあつたりしたすごく思い出の名前なので、その思い出を大切にしたいのに、それを一刀両断されたような気持ちになつてしましました。だから最後まで愛国心云々よりも、私はお父さん、おじいちゃんとの思い出を大事にしたいから、通名で行くつていうのを最後まで言い通したんです。い通したんです。その事で学校の先生には「放課後に残れ」つていう事を何回も言われてしまつて、卒業式の当日に「よつしや。分かつた。お前の気持ちは分かつた

から、高山克子で卒業証書は行くから、卒業式は出ろ」つて先生に言われたので卒業式に挑んだんです。でも、その当日卒業証書を手渡すときにキム・クッチャと先生が私を呼んだんです。この事で先生に裏切られたような気持ちになつてしましました。自立心が生まれ始める多感な時期に起こつた出来事は、そうしていかなければいけない時代やつたのかもしれませんが、私自身にとつて今でも苦い思い出です。また韓国、在日韓国の友達に言わせると「クッチャつてすごいきれいな名前なんやで」つて、きれいな音なんやつていわれたんですけどね、日本語で「くちやい」つていう言葉があるじゃないですか。それに語呂が通じるような気がしてしまつて、なかなか私は受け入れる事が出来ませんでした。そのあと中学・高校も通名で通したんだけど、やはり中学校もそうですね、三分の一が在日韓国人の三世の子達で、ほとんどの方が通名を使つていましたね。その後、高校に進学したんですけど、その時に学校の担任の先生に放課後呼ばれ「僕は在日韓国人の生徒を受け持つのは初めてなんだよ。だから君に対してもう接して行つたらいいか分からんんだよ」つて言われて、今までずっと在日韓国人の友達とかに囲まられてきて、それが普通でしたのでびっくりしましたね。だって友達の家に電話かけたら、普通にハルモニが出て「ヨボ



セヨー」 いうような感じでしたから、一步、この生野区、東大阪界隈から足を踏み出すと、こんなに違うんだってすごく驚きました。そういう自分ひとりつていう中でも、一六歳になつたら外国人登録の必要が出てきます。その時に平日しか役所開いてませんので、学校を途中で早退して行く訳なんですよ。そしたら「何で早退して行くのん」つてクラスメイトに言わされたので、私にとつて在日つていう事は普通のことだつたので「ああ、一六歳になつたから外国人登録のさあ」みたいな事を言つたんですけど、その瞬間、友達の中の一人が「えつ、高山さんて韓国人やつたん!?」 「いやあ、言つたら悪いけどフランス人とかイギリス人つてむっちゃかつこよい感じせえへんよね」 つて言われてしまつて、まだまだ韓流ブームなんかが来てなかつた頃ですけど、なんとなくカチンと来た思い出があります。

何故看護師になろうかと思つたかっていう事なんですけれど、私の父親が東大阪の布施のほうで、精密研磨の職人をやつていて、その父親が「手に職付けよ、手に職つけよ。絶対就職の時に困るさかいな」 つて言うてたんですね。それが心の中にあつたのはあつたんですけど、でも私は一般企業に就職したかつたんで、普通の教育女子短大に入学したんですね。でも卒業の時に丁度バブルが崩壊して、就職超氷河期とドンピシャりと時期が当たつてしまつて、履歴書をそうですね、本籍とかを書いた履歴書を二〇〇通送つて、返事が帰つてきたのが一五通やつたという現実にさらされた事と、あとちょうどね、先ほど沈さんが大阪の在日コリアンの病院の話をしていたと思うんですけど、その頃に丁度、父方のハルモニが大腿骨頸部骨折をしまして、寝たきりになつてしまつたんですね。ハルモニは自分で必死に日本語を覚えた一世の方なんんですけど、あつという間に寝たきりになつてから言語崩壊が起こつたんです。後で覚えた日本語つていうのが思い出せないんです。韓国語しか喋れなくなつてしまつて。そんなハルモニの看護をしてくれる病院はなかなか無くて、そんな中でちょうど今、沈さんが言つてはつた病院におばあちゃんが入院してね、三世の私自身は韓国語が全くわからないので、私自身ハルモニにどう接したらいいか分からなかつたんですけど、日本語が話せなくなつたおばあちゃんに対し、沈さんのような看護師さんが、すぐくテキパキテキパキと対応してくれはつて、そのことが感動的だつたんですね。就職氷河期プラスその事が、やはり看護師になつたきっかけだと思います。それから先ほど言いました「帰化」の事ですが、「帰化」は私にとつてはどつちでもよかつたんです。日本名にこれほどこだわるのに、なんで「帰化」にはこだわらないの? つてみんなに言われるんですけど、私は別に

「帰化」はどうでも良かつたんです。日本名を使つて いますけど、家の食卓には毎日キムチがごろごろ並んでますし、いつも法事の色んな準備に母親が追われているのを見て います。すごく在日韓国人という意識は強かつたんで、「帰化」ってどうでもよかつたんです。あえて日本国籍を取得する事でこだわりがなかつたんですけど。ただ弟が大学卒業する時になつて、受けたいつて言つていた会社が日本国籍の人しか取らないつて言われているところだつたんです。そうしたら弟はまだ学生なので、家族全員が「帰化」するしか方法が無くて、私も「帰化」することになりました。両親は、子どもの就職の為についてその一心で、すごい複雑な手続きを踏んでくれたんやと思うんですけどね。私の覚えているかぎりでは「帰化」の手続きつていうのは、実際かなりややこしいんです。何で私は日本人になりたいかつていうような作文を二枚くらい書かなあかんのです。それを書いて、その後にいろんな戸籍を取り寄せたりとかの作業があるんですが、一番最後の作業として、最後の面接の時に『私は日本国民として模範的に生きる事を誓います。』っていう文書を渡されて、立つて声を出してそれを読むように言われるんです。私は、その時に父親と母親の顔を見る事ができなかつたんですね。在日韓国人の町に生まれて父親も母親も朝から晩まで自営業で働いて、子ども四人を育ててくれました。昔『こえだちゃん』っていうおもちゃのシリーズがあつたんですけど、そのこえだちゃんていうおもちゃのシリーズで、朝のお部屋、昼のお部屋、夜のお部屋つていう各人形が過ぎすお部屋があつて、子どもの頃、お母さんにどの部屋が一番好き? って聞いたら、『うちは夜が一番好き。だって寝れるから』って言いはつたんですね。それほどまでに必死の思いで育ててきてくればつて、その父母が模範的ではないつていうことは絶対ありえないんですよね。私の中で最高の模範中の模範なわけなんですよ。父母亲が、日本国民として「模範的に生きる事を誓います。」と、うつむきかげんに読んでいる時になんかもう、全然目をあわす事ができなかつたんです。ただ私たちのこのあとの就職のためだけにそう言つてくれている、私達のこれから先のことだけを考えて、色んな複雑な思いを今 飲み込んだんや。このうつむいた瞬間に飲み込んだんやつて思つたら、目を見る事はできませんでした。そしてこの後、「帰化」した事に対し、ちょっと困つた問題が私の場合生じてきました。実は私は准看護師を韓国籍で取つているんですね。そして、正看になる学校に入学してから「帰化」したんです。そうしたら、国家試験ぎりぎり直前になつて、「ちょっととちょっと、高山さんの受験票通れへんわ」「だつて韓国人で登録してたんやろ? 今もう日本人やん。同一人物として認められないから試験をこのままの書類やつたら受けることで

きないよ」って、急に先生に言われてしまったんです。もう大慌てです。過去の国籍を変更する前の外国人登録とかを集めないとダメなんですね。そしたらね、これがまたお母さんが丁寧な事に「帰化」した韓国人やつていう事実が分からぬよう、色んなところに住所をころころ移してましたんです。もう国家試験の勉強どころではなく、あちこちの市役所に行つて帰化後の住民票を取り寄せて、自分探しの旅に出かける羽目になつてしましました。そうして看護師になつた私ですが、京都に来てちょっと驚いた事があります。私の生まれ育つたところつていうのはチエジュ（济州島）出身の方がすごく多いんですね。でも、チエジュ出身ということが、どういう意味を持つのかをあまりよく知らなかつたんです。京都に来て南区の東九条のほうに在日韓国の人があつぱいいるところあるつて、友達に教えてもらつて喜んでそこに行つたんですね。私はすごく親しみを感じたんですけど、その時、そこに居た人に「君はチヨルロド（全羅道）の子か」って聞かれて「いえチエジュです」って言つた瞬間に「じゃあええわ」って言われてしまつたんです。すごいびっくりしましたね。同じコリアンの中でチエジュがそういう差別的な対象になつてゐる地域だという事を京都に来るまで知らなかつたんです。「チエジュ人と結婚するなら日本人と結婚するわ」というような言葉をかけられたりとか、初めての経験でした。その事にはすごくびっくりしましたね。でもそのことによつて今までアイヌとか沖縄のいろんな問題を、真剣に考えた事なかつたんですけど、そのことをきっかけに自分自身の視点が変わつてきました。この心の痛む体験は、ある意味自分にとって、問題の視野を広げるいい機会やつたんやと今は思つてます。仕事の事について話しますと、私は今、アルコール依存症病棟で五年間勤務している看護師です。アルコール依存症の治療について、少しだけ話させてもらうんですが、アルコール依存症からの回復には、自分自身を語つてもらうという事がとても大事になつてくるんです。人つていうのは、自分自身の物語の中に生きているんですね。そして、今この瞬間がペンを取つて新しい最終章を書き連ねている最中なんですけど、その中につらい過去があつたらフタしたい気持ちつて誰にでもありますよね。アルコール依存症を抱える人にとっても、アルコールでいろんな問題を抱えて自分自身苦しんだり、周囲に迷惑をかけてしまつたり、そんな事は隠したい過去ですよね。でも過去を語らない事、気持ちにフタをしているつてことは、そのままずっとその過去に自分自身がコントロールされ、引きずられているつていう事なんですね。今、ここで過去を出して語るつていう事は、その問題を改めて過去として生きている自分がいるつていうことなんですね。なのですごく自分自身を語つてもらう事が、治療上とても大事になつて

きます。だつて自己肯定をしないと治療にはならないですから。人つて理想とする自分から遠ざかっていかなければ遠ざかっていくほど、破壊的になっていくものなんです。だから、自分で自分の事を大事にしようと思つたら、自分を肯定していくためには自分の過去を話し、それを受け入れる自分がないと認めなんです。それを治療の場で勧める中で、在日の患者様と出会う事があります。彼らは二重の壁を背負っています。在日の、一世二世の方が、今アルコール依存症病棟に入院されてきていますけど、自分を語る事がなかなか出来ないんです。病棟では、一緒に治療していく仲間同士で自分の事を語り、回復のための仲間つくりをするのですが、「自分の生い立ちを語ると、この中の輪に入れないとやろか?」治療して一緒に回復していくと、アルコール依存症である自分を受け入れる以前に、仲間の輪に入れないとやもしれない。自分のこの筆舌に尽くしがたい過去は語れない。」と、二重のフタをされている方がいらっしゃいます。そんな方が、私が生野区のそばの出身やつて言うと、私の袖をピンピンとつまんで「君は金の高山か、高の高山か」つてきくんです。本名が高なのか金なのかつて聞いてくるんです。そうして、その時に初めて自分の過去を語り出すんです。語る事をしなければ治療になりません。でもそこに二重の壁がある。語る事をするに当たつて、治療的な語る場を作るには、絶対的な条件があるんですね。それは、共感して受応してくれる場であること。そのような絶対的な条件の下で、治療的な体験で言うのは語られないかんのですけど、なかなかこの共感して受応できる場を自分で見つける事がむつかしい、私自身は今、在日韓国人のアルコール病棟の看護師として、在日の患者様の入院生活の中での語る場のひとつに私がなればと考えています。そして今日、私の生き様とか、歴史を語る機会をいただき、そしてこれを聞いてくださる皆さんがいて、私自身が自己主張する場をいただいている事に、心から感謝の気持ちを述べたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

**仲尾 宏**：ただいまのお話、名前の問題、「帰化」の問題、それから就職の問題いづれも複雑に絡まつておりますね。そういう中を生き抜いてこられた大変感動的なお話をしました。まだご説明する事は色々あるかと思いますけれども、とりあえず休憩をいたします。私が『Q&A 在日韓朝朝鮮人問題の基礎知識』という本を大分前に書きましてその後版を改めまして最新版が二〇〇五年版になつております。ここへ置いときますのでご覧になつてまだ出版社にあ

りますので、ついでにもう少し調べてみよう、知つてみよつと思われる方は、直接本屋さんにて注文ください。とりあえずここにおいておきます。

司会：ありがとうございます。それではただいまより休憩に入りましてこの時計で三時二〇分に二部を始めさせていただきます。皆さんのお手元にある質問、ご意見用紙があると思いますけどそちらに質問とかご意見書いていただいてできれば一五分までにあちらの受付のところに箱置いておきますのでそちらにお入れください。よろしくお願いします。

仲尾 宏：それでは再開いたします。四人の方からご質問ご意見を伺つていますが、ほとんどがご意見です。まことに最初の方。この方は質問のようなものをふくめて書いておられるのです。その方からご紹介いただきます。  
「心理学、精神医学等個別アイデンティティの重要性が言われる事がありますが、」自身は自分は何かと思うことはありますか。」大変難しいご質問ですがまたそれと関連して「アルコール依存症や終末期の方はどういう風に感じられますか。」こういうご質問なんぞ、答えられる範囲でお一人に少しづつお答えいただきたいと思いますが、沈さんからでよろしいでしょうか。

沈 里美：アイデンティティとか言われるとちょっと難しく思うんですけども、難しいですね。まずはこの前お話をされた先生の事思い出したんですけども「何人とか、日本人とか韓国人とかアメリカ人とか関係なく地球人なんだよ。」つておっしゃつていた言葉を今思い出したんですけども、そういう枠の取れた一人の方、単純に人間として、あとは一人にでも信頼されて生きていけたらと思います。

ちよつと漠然としているのでお答えはそれくらいにさせてもらつて、終末期の方の事をちょっとと言われてたので私の感じる事を簡単に話します。やはりガンの末期の方は痛みとか悩みとか、あらゆる事をすごい過酷な状況で過ごされる事が多いんですけど、実際その人の看護についてその人の事、アルコール依存症の方の話しもされてたんですけど、やっぱり認めてあげる事とか共有してあげる事とかそういう所が大事になつてくると思うんです。あと実際亡く

なつたあの家族のケアつて結構大事なんですね。亡くならはつた方は、もう召されていきますので淋しいという気持ちが残るかどうかは分かりませんが、やっぱり実質残された夫に先立たれた奥様とか、あとはお子さんとかの気持ちで言うのを最近どうしてあげたらいのかなって、自分の中でも課題であります。悲しい、つらい気持ちを聞いてあげること、ちょっと肩をさすつてあげたりとか、抱きしめてあげる事とか、自分にできることはたいした事じゃないんですけど、最近そういう残された方の気持ちをわかつてあげたいなという風に思つていて次第です。

仲尾 宏：ありがとうございます。それでは高山さんお願ひします。

高山克子：何でこのアイデンティティが大事かつていう事なんですが、仕事する上でそれを感じるのは、よく看護師つてちょっと自己犠牲精神に溢れた人のようなイメージがあるじゃないですか。患者さんのために自分の身をなげうつてみたいな。そういう、ちょっとドラマティックなイメージがあるかもしれませんけど、精神科で勤務する中では、看護師さん自身が、自分自身の事を好きで、大事に思う事つていうのがまず第一だと思うんです。自分が好きで、大切に思うつて気持ちが自分自身に無かつたら、患者さんにその気持ちを伝える事つてできませんよね。患者さん自身に良くなつてもらわなかんねんけど、自分自身が治療して良くなつていこうつて思う気持ちの原動力つてね、自分自身が自分の事大事に思つてなかつたらでませんよね。自分のことそんな大事ちやうわつて思つてんのに、自分の事大事に治療していくなんてことはできないですね。なのでこのアイデンティティの問題つていうのは確かに本当に重要ですね。今私自身は、仕事の中で患者さん自身が治療して、良くなつていこうつて思う気持ちを促進するための援助をしていますが、その看護のためには、在日三世として生まれて「帰化」して、すつたもんだがあつて、看護師になつてこうやつて仕事をしている、今の自分自身を結構好きになつて、それをひつくるめて受け止めれることが重要ではないかと思つております。

仲尾 宏：ありがとうございました。次の方のご意見を紹介します。  
「名前の問題で思い出しました。私は日本人ですが、独身の時名前の呼び方が変わつてゐるからなのか、どうい

気持ちで言つてゐるのか分かりませんが私に勝手に名前を付けるなよ、と言つてからかわされたことがあります。これは部落の名前かと言われたこともあります。一時期日本人として誇りをもてなくなつた時もありました。名前で人の心を傷付けるのはどうかと思いますが、差別はいろんな形であるんだと今日改めて感じました。」というご感想をいただいております。これは直接かかわりが無いわけではないので先ほどお二人とも「帰化」について触れられたのを少しあげてお話を少しさせて頂きます。

まず日本国籍をとるという事を日本の国籍法では「帰化」といつております。これは国籍の生後取得、生まれてから後どうして日本国籍を取る事ができるかそのひとつのが「帰化」と呼ばれているものです。この条件は、法務大臣の裁量によるということにされています。ですからこれこれの条件を満たしたら自動的に認められるんだというものではないということが大原則になつていてるんです。その、これこれの条件ですけれどもまずは日本国に五年以上居住している事。これが第一条件。それから素行善良であること。この素行善良というのは何も悪い事していない警察に捕まつたことが一回も無いというようなことのみをさすのか、あるいは高校生や中学生のころツッパつて煙草吸つて停学三日食らつたとか、そういうものも入るのか、駐車違反まで入るのか、これはまったくわからんないです。とにかく素行善良という事がひとつの中条件。それから三つめは言うまでもなく経済的に安定して基本的な財産があるかどうかということもあります。それから最後には日本国の國家を暴力によつて転覆するような事に加わつていなかとこんな条項もあります。これらの条項は全ての「帰化」希望の外国籍の人に適用されるわけですが、かつては希望者があつても認められる人は非常に少なかつたんです。一〇数年前までは年間五〇〇〇人とか六〇〇〇人。これ在日の方だけじゃなくてアメリカ人であろうと中国人であろうと全部含めての数字ですよ。そういう事で非常に厳しかつたんです。ところが一〇年位前に年間一万人くらいになりました。現在は年間一万三千から一万五千という数字です。近年では日系の南米、ブラジル、ペルーから来た人の「帰化」申請も増えていると聞いておりまます。勿論在日の方「帰化」の申請も増えています。だからそういう点である意味では条件が緩んだように見えるわけですけれども、先ほど高山さんでしたか言わされたように最後にですね、模範的な日本国民として生きる事を誓います。という宣誓の儀式のようなものがある。それから何故日本人になりたいのかという作文を書くんですね、そういう個人の思想・心情に関わるような事があつて、これは恐らく変わっていしないんじやないかと思うんです。その

事と関連して名前の問題があります。「帰化」するについては日本風の名前に改める、という事がかつては絶対条件だったようです。ようすといふのは私自身が現場に立ち会つておりませんが、いろいろな方の話しを聞くとそうだつた。それが最近では少し緩みまして韓国・朝鮮読み、そのままでいいし、それのまた「キムさん」じゃなくて「キンさん」でもいいというような呼び方も認められるようになつてきたと聞いております。そういう点で条件の緩和は少しあるかも知れぬけれども、やはり名前の問題がかなり大きな要素としてかつてはあり今も先ほどの宣誓やあるいは作文にあるようにですね日本人であるなら元韓国人であったこと、あるいはその他の外国人であつたことを忘れてしまえ、というような、どうもそういう所だけは一貫していいるような気が致します。それが「帰化」に関わる現状は今日のお二人の話しを聞いていてやはりそうかなという事を改めて思いました。先ほど控え室で聞いてみると、過激派を知らないかとか「赤」の活動に関わつていないか、とかそんなことを訊ねるような事を行つてゐる係官もいたようです。それが名前と「帰化」の問題についての私の知つてゐる情報でございます。それからもう一人の方はですね。

「教えていただきたいのですが、外国人登録とも関連するが知人から聞いたことがありますが外国籍の出入国のときには指紋を取ると。指紋を取るのを拒否したらどうなるか。旅行に行く時に外国籍の人は写真を三方向から取られる。テロ対策と称して。外国人登録でも指紋を取つて人権を破壊しているのに出入国のときの人権の無さ、差別に怒りを覚えるが出入国とのきの外国籍の人の事を教えてください」こういう設問です。まず指紋押捺についてはかつて日本に住んでいる外国籍で登録する人は全員指紋をとられました。それも左右とも十指真っ黒なインクで付けられていましたんですね。それが少しづつ在日の方を中心とした猛烈な人権運動が起こつて緩和されまして、現在では在日韓国・朝鮮人である特別永住者については指紋はとることはなくなりました。そのかわりに外国人の登録をする時に署名と写真が必要です。そして外国人登録のためのカードをつくります。それはラミネート加工してあるんです。それはいつも持つていなければいけない。常時携帯義務ということになつております。ですから今お二人は、あ、高山さんはそうではない。沈さんは持つておられると思いますが、これをもつていなければ特別永住者については一〇万円以上の過料（行政罰）、特別永住者以外は罰金二〇万円以上のとく、前科一犯という大変重い刑罰が科せられて、それが特別永住者への今の人権侵害の問題として語られていることあります。それから指紋押捺はその後全廃されました。

ですから特別永住者だけでなく、他の在住資格を持つている外国人についても指紋押捺はいつたんなくなりました。ところが今年一月からまた復活したんです。それはここに書いておられるようにテロ対策という名目で日本に入国する全ての外国人、特別永住者は除く。つまり在日の方は除くけれども、それ以外の人は全て写真を三方からとられそして指紋をとられるという事になりました。例えば日本に住んでいたるフランス人がフランスにいつたん帰る、再び日本に再入国してくる事があります。休暇のためにパリに帰っていた場合も再入国になります。するとその時は指紋と写真をとられるということになるんですね。こういう非常に厳しい制度が復活しました。これはこの方が言つておられる様に大変大きな人権問題であるということは言うを待たないと思います。

司会：すいません。三方ではなくて正面だけ。

仲尾 宏：正面だけ、あなたは取られた？失礼しました。一方だけだそうです。三方はアメリカかな、とにかくアメリカと日本が特に厳しいですね。次へ進みます。

「それと沈さんの話の中で北朝鮮の拉致問題で心を痛めたようだが、あれは報道機関によるキャンペーんだと思う。また軍事力核武装で言えばアメリカや日本などのほうが何十倍も軍事力をもつていて。北朝鮮へのキャンペーんをはつて日本は改憲をして戦争ができる国にしようとしているおもつた。在日の人の問題は戦争と関連しているし一度と戦争をおこさないようにしなければいけないと思つた。在日朝鮮人、韓国人の存在が戦争に反対する事と思つた。」少し今日の本題がそれるかもしませんが、こういう感想を寄せていただいております。最後にもう一方の感想を読みます。

「複雑に絡み合つた問題を自分の生き様を通して話してくださつたお二人に感謝しております。胸がいっぱいになりました。国際交流というきれいな言葉の中には在日の人の存在を忘れてはいけないという主旨が胸に突き刺さります。日本人としてどう生きていくべきか、何をすべきか私ができることは何なのかこの研修に参加させて頂くたび深く考え仲尾先生のコメントにヒントを頂きながら思考をめぐらせております。ありがとうございました。」こういう大変丁寧なご感想を頂いております。今回は以上の四の方のご質問とご感想でした。まだ少し時間が有りますので

最後にお二人から今日この集まりに参加していただいてこういつた皆さん方のご感想が出た事を含めてお一人ずつ適当に時間を取つてお話しただけたらと思いますので沈さんからおねがいします。

沈 里美：この場を与えていただきありがとうございました。私は本当にこんな社会的な活動とかあまり参加してこなかつた人なのですが、今回こういうフォーラムに初めて一回目から全部四回行きました。すごく在日の人の言葉というか活動力、そして問題意識を持つて生きていく姿を見てすごいなと思って結局最後自分があまり上手く発表できなかつたと思うんですけど、こんな感想いただいてすごく感激しております。あと一緒に参加した高山さんと似ているようでちょっと違う環境でも私が感じられなかつた事、例えば外国人登録の申請の時の事、私は民族学校にいたので「今日登録に行つてくるの？行つてらっしゃい」って感じでみんな送るんですけども、逆に日本の学校でそういう反応、受けはつたっていうのを初めて知つたんですよ。あと「帰化」の事もそうなんんですけども、結局私は「帰化」しなかつたんですけども、「帰化」の申請の中でそういう宣誓文を読まされるという事を聞いたりとか、あと実質私も途中までの間で作文を書かされました。両親が字が書けないので私が代わりに書いて、両親のはなんとか繕うように書けるんですけど、自分のこととなつたら最後書けないんですよね。「こんな思つてへんのになんで書かなあかんの」っていう気持ちとかいろいろ、他に障害があつたことが、朝鮮総連の幹部とかそういうなんが親戚にいたら取れないというか、そんなものも「帰化」を認めてももらえない。実質私の母方の親戚にも地区幹部みたいなのがおりますので母がどうしてもお兄さんに「帰化」するという事を言えないと、どうしても断れないといい「帰化」を断念しました。そんなコミュニティの中でも遠慮とか気兼ねとかいろいろあつて、やっぱり両親とかは、おじいさん、おばあさん、ハルベ、ハンメとかはものすごい複雑な思いで生きてきたんやなつていうのを思いました。これからは、自分が在日看護師としてできる事つていうのを探る旅になると思います。どんな職業でもすごい修行がずっと続していくと思います。どうもありがとうございました。

高山克子：本日は本当にどうもありがとうございます。私も、中学校くらいまで在日韓国人の方が非常に多いコ

ミニユーティで育つて、そして高校生からそのコミュニティの外に出て、胸に引っかかる色んな思いとかを、出したくても出す場所つて無かつたんです。患者さんには自分自身の事、語つてくださいみたいなこと言うてるんですけど、実は一番自分自身の事を語れてなかつたんは、自分じゃないかなつて思います。先ほども言つたように、そこに共感してくれるであります、その自分を受け止めてくれるであろう場がないと、人つて自分の思いをなかなか出せないんですね。で、今まで結構私自身が、フタしてきた部分があつたんやな。実は自分のこと一番話せてなかつたんは、自分がやつたんやなつていう事に、今日、改めて気づくことができました。今回、この企画で沈さんと初めて会うですね、生まれた場所も育つた環境も、実際に直面した問題も違うんですけど、でもどこか切ないような懐かしさを感じてしまうんです。自分に起こつた問題を、この人は共感をもつて聞くであろう、つていう独特の胸がきゅんとなる思いがありました。そして今日、こうやってこの話を聞きに集まつてくださった皆さんがいて、自分自身にこんな機会与えてもらつて本当によかったです。今日はありがとうございました。

仲尾 宏：ありがとうございました。私もこれで一五回司会をさせていただいておりますが皆さん方の非常に熱心なご質問、あるいは激励のご感想をいただいて、ますますやらないかんな、という気になります。この財団法人京都市国際交流協会の自主事業として続けてきたわけですが、数少ない自主事業が数多い事業のひとつかわかりませんけれども、ぜひともこれは今後続けていただきたいと思っております。それからこのことは直接関係ありませんが間接的に少しご報告しておきますと、今まで京都市はこの在日の方々の問題を中心に国際化推進室という組織があります。京都市全体で「国際化推進大綱」という、条例に次ぐ大綱ですね。それをつくつていろんな施策を進めていきました。それが一〇年経ちましたので昨年から今年にかけてそれを見直す。新しい一〇年を見据える「国際化推進プラン」を作るという事で、今それ最終段階の仕事にはいっています。恐らく年度明けには「市民しんぶん」や、あるいはこここの機関紙あるいは新聞などで発表されると思いますので是非それをご注目ください。もうひとつは京都市から委託を受けまして私が関わっております財団法人世界人権問題研究センターという組織があります。そこで「京都市の外国籍市民の生活意識実態調査」という事を昨年まとめました。それは京都市のほうにもう既に報告してあります。京都市の場合は外国籍市民のうち八割が在日の方です。統計資料もそうですし自由記述

欄もありまして色々な行政への要望、思いなども書かれておりますのでそれも先ほど申しました「推進プラン」、新しい「推進プラン」の中に織り込まれていくと思います。そちらのほうもまた京都市国際化推進室が窓口ですのでお問い合わせ下さい。全体は非常に膨大なものですが要約版というのも出しておりますのでそれをご覧いただいて在日の方々の思いをまた別の形で日本人市民の方に知つていただく良い機会かと思いますのでちょっと紹介させていただきました。それでは四回無事に終わりまして本当にありがとうございます。また来年もお会いしましょう。

司 会：ありがとうございました。これで一五年目のチョコリときもの全て終わらせていただきます。また来年以降ですね違う企画になるので皆さんとお会いできればと思います。では本日のパネリストの方々に大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。



# =안녕하습니까?=

2005-

## 医務室日誌

6月18日 医務室の整備が進んでいて驚きました。

保護者の力で窓ガラスが入れ替わり、カーテンもベッドカバーもスクリーンも手作りすごい！

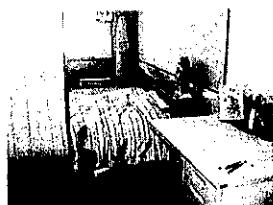
頭痛と右足関節捻挫の2名来室。



7月 ベッドが増えて換気扇がついた。健康教室の

感想文を受け取りました。5年生の男子 37.8 ℃の発熱で、お迎えまでベッドで寝て待つことができました。

9月 元気に二学期がはじまり、運動会の練習で学校が活気づいてきました。ハサシハサニが校庭の掃除をされている姿を見て、愛情の深さ祖国と民族に対する熱い思いが伝わってきて感激しました。医務室利用は、発熱、扁桃腺肥大、など5人でした。



10月 創立40周年記念の運動会は 大成功でした。

転倒などで軽い擦り傷7人でした。全力を出し切った見事な運動会でした！

6日（木）は発熱や不調など子どもたちも疲れきみで来室は4人でした。

季節の変わりめです  
朝ご飯はしっかりと！  
手洗いうがいも  
忘れずに！



朝夕の気温の変化に  
気をつけて！  
上着を脱いだり着たり  
うまくやってね！

毎週木曜日に医務室に来させて頂いて、とても良い勉強をさせて頂いております。子どもたちが本当にかわいくてしかたがありません！年長組のかわいい女の子が私の黄色いブラウスを見て「ノランセ」と教えてくれました。「わ～ショッパ」「ソメオウ」「チヨンジモグリ」「「オーバーニ？」「エオル チュジヤ」どんどん教えてくれるのに右に向いたらもう言えない自分が羞がゆいです。週1回では役に立っている感じがしません。健康診断や保健指導が手伝えるといいなあと思います。皆さんに喜んで頂き私もとても嬉しいです。

健康教室 Part1 「心・体・性」

\* はじめに

「レジデンス オブ ザ シーズ インターナショナル」

6／4～12まで 10人で参加し8人で帰国した話。

◎ 考えさせられたこと

・世界平和について

差別がない 人権が守られている

世界中の国から 働き 楽しみ 一つの世界を創っていた。

・健康について

充分な 有り余る食べ物を 前にしたとき

超超超 肥満のひと

高齢者の参加・・・くも膜下出血で倒れ17時間後に亡くなる

福祉施設でお琴の演奏をされる81歳のおばあさんの話

・愛情表現について

スキンシップ と 言葉による表現

本論

1. 「性教育のこれまでとこれから」

\* 別紙プリントにてていねいに説明する。

2. 韓国ドラマ「初恋」

3. 「性教育の授業をした感想」

4. 終わりに

保健室は 身体をとおして 人生を学ぶ教室 です。

子どもの健康を支え 教職員の健康を支え

効果的な教育が推進できるよう

生涯を健康に過ごすために科学的で有効な知識を学ぶ教室です。

養護教諭はそれに専門的に携わる教師です。

六

健康教室 Part II 「生涯を心身共に健やかに生き抜くために」

1. はじめに

2. 健康とは 肉体的、精神的、社会的に調和のとれた状態  
・人の一生  
　各国の  
　平均寿命、  
　死因  
　離婚率  
　自殺率

3. 健康あるために

欧米人と東洋人  
気候・風土・体格・DNA・環境

何か共通しているもの

4. 生活習慣病について

糖尿病の基礎知識

5. 終わりに

- ◎ 子どもの頃に食べたもの・・・
- ◎ 学生時代は身体が待ったなしでできあがっていくこと  
だから一食一食おろそかにはできないこと
- ◎ 人間の身体はずばらしくよくできている  
タイミングとバランス  
<安心して良い子ども像>
- ◎ よく笑うこと よく眠ること よく食べること よく動くこと

2003.2

連続フォーラム「チョゴリときもの」 N0.15 -医療と介護の現場で 資料

教職員研修

2007.10.29 17:00~

テーマ . . . 知っておきたい学校保健の基礎的知識 . . .

はじめに

簡単な救急法の勉強?

一人ひとりの子どもの心身の発達を見守るポイント?

内科的、外科的、心理的、発達的 . . . 子どもの訴えと見方と対応? その根拠?

今までの経験から . . .

この島国で同様に暮らしているわけですから日本社会の問題は対岸の火事ではない

\*. 健康教育の今日的課題

(1) 心の教育の必要性

いじめ、不登校をはじめとする子どもたちの心の健康問題

(2) 健康相談機能の充実

健康管理能力を高めるための、個別指導や相談活動の充実をめざす

(3) 基本的生活習慣の確立

ライフスタイルの確立に向けた基礎基本を培うための保健学習・保健指導の計画的な推進

食育・生活習慣病の予防

(4) 保健管理指導の質的変換

従来の課題達成的な管理的内容・取り組みから健康自立を促す内容への質的転換に向けた取り組み

(5) ライフスタイルの確立への指導・支援

生活事象から導き出した課題の設定と、健康課題に対する自己決定力・自己選択力の育成のための指導・支援・点後の在り方を探る

\*. 学校危機管理

「子どもの命と健康を守る」と言う観点に立った危機管理意識を共通の課題とし研修を深める。危機管理能力は行政のみならず全ての教師にも問われる。

\* 教育活動中の死傷

救助法

\* 先天的及び後天性疾患

特別支援教育について

\* 慢性・急性疾患や既往の交通事故

外傷対応

\* 予期しない事故 (自殺・殺人・原因不明の死) 報連相 体制強化

\* 致命的な流行疾病に罹患した場合 0-157 など 学校伝染病

\* 犯罪行為の被害者・加害者 (暴行、虐待、脅迫、器物破損)

\* 自然災害・人為的災害 (台風地震火事交通事故など)

\* 心の健康問題 (いじめ、不登校、薬物、食行動異常) 臨床、教育心理

\* その他 (IT被害 各種トラブル)

## 京都市外国籍在職者数(2007年11月1日現在)

職種	職員数(人)	職種	職員数(人)
一般技術職	1	大学教員	2
薬剤師	1	高校教員	1
保健師	1	中学校教員	2
看護師	5	小学校教員	6
心理職員	1	小学校養護教諭	1
保育士	3	技能・労務	19
栄養士	1	バス運転手	2
合 計			46

\*嘱託職員は除く

# 医務室だより

第二朝鮮学校に来させていただくようになって早いもので三年目となりました。

今年のトップニュースは何と言って“保健の授業”です。

毎学年、1年生から6年生までの全てのクラスで勉強することになりました。

テーマは「生涯を心身共にたくましくすこやかに生きぬくために」

授業を通して…

- \*「からだは素晴らしい」を伝えたい。
- \*「大人に向かって」を伝えたい。
- \*「自分を見つめる、自分を知る、自分を大切に」を伝えたい。

人間の身体を教材にして 人権・科学・自立・共生について学ぶ事にしました。

＊

1学期それぞれの学年での内容は次のようにしました。

- 1年生 きれいなからだ……みんなうんち
- 2年生 大きくなるからだ…つぎつぎはえる大人の歯
- 3年生 からだの中は？……食べ物のたび
- 4年生 からだはすごい！…血の話し、熱の話し
- 5年生 からだの変化……大人になると言う事
- 6年生 新しい自分の発見…自分でどんな自分？

＊

ご存知ですか？(チ編集部だより)

京都のウリハッキヨの中で医務室があり、先生がいらっしゃるのは我が京都朝鮮第二初級学校のみです。他のハッキヨでも医務室を取り入れる方向で頑張っています。

しかし、医務室は仕上がりましたが、先生がいらっしゃいません。

私達のハッキヨは恵まれてるといえば恵まれていますが、これは(医務室があり、先生がいらっしゃるという事)学校として当たり前、あらなくてはならない事なんです。

栗山先生は3年間ウリハッキヨにボランティアでお手伝いしてくださってます。

私達は他のウリハッキヨに医務室があるありがたさを忘れてはいけません。

同時に、当たり前にあらなくてはいけない医務室がなぜないのか？をよく考えなくてはいけません。

私達オモニ会はこれからも子供達のために学校のためにもっともっと学びやすい環境を作っていくために沢山の意見を行政にアピールしていくがなくてはいけないと思います。

## 栗山千代美先生からのメッセージ

どのクラスでも  
子供はのりにのってその場が盛り上がり、嬉しくて仕方がない様子でした。  
5年生の授業は本部の柴先生も偶然ですが参加されました。  
柴先生は「とても大切な内容なので、第一や第三の子供達もこんな授業を受け  
させてあげたいです。」とおっしゃってくださいました。  
子供達の「知りたい意欲」に応えるために12月の内容もそろそろ考えなくてはい  
けません。  
大変だけどやりがいがありますので、しっかり取り組みたいと思ってます。  
わかっているようで、まだまだ知らない事が多い「自分のからだ」  
歯も目も脳も手足も骨も内臓も…あたまのてっぺんからつま先まで…  
自分の体をよく知り、不思議を知り、いとおしく大事に思えるように…  
生涯を心身共にたくましくすこやかに生きぬくために…！  
皆さんのがんばる姿に添って、こうしてお手伝いできる事がとても幸せです。  
カムサハムニダア！！！

私達親にとって、学校に医務室がないと言う事はクリーブのないコーヒーの様なものでして…  
(失礼しました)  
安心して子供達を学校に送る日々…  
栗山先生がいらっしゃるお陰で園児から6年生の生徒まで、そしてソンセンニム達もやす  
ぎを感じている事でしょう。  
ある日、医務室をのぞいて見ると壁には熟さまシートを貼った子供の顔写真など、幼稚園児の  
写真など、沢山の写真がかざってありました。  
先生はいつも子供達と一緒にいるんだな～と思い、思わず感動してしまいました。  
毎年行われる芋ほりや、田植え…  
その様な行事には必ず自宅を提供してくださり、運動会には保健婦さんとして子供達を見守  
り、学芸会には必ず参加され、卒業式、卒園式にももちろん出席してくださる、栗山先生の優し  
いお心遣いがひしひしと感じてきます。  
先生のお言葉の中で『皆さんのがんばる姿に添ってこうしてお手伝いできる事がとても幸せ  
です』とありましたが…いえいえ！！滅相もございません！と言う感じです…  
私達父母も先生の負けず劣らず、学校の事、子供の事、私達民族教育を守り抜いていかなくて  
は！と実感させられます。

今回新聞部での編集後記は栗山先生のページにお邪魔させていただきました…  
次回もお楽しみに♪

### 一学期の医務室だより



栗山 千代美

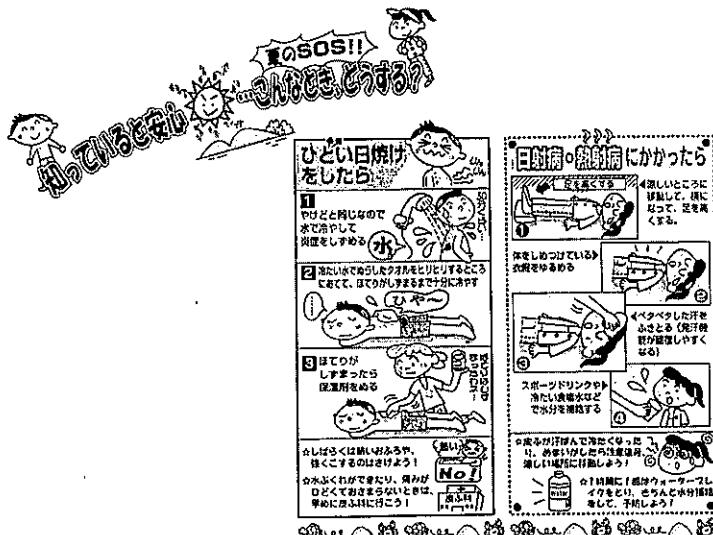
今年度の医療室は、内科の健康診断にたゞさわったり視力検査をしたりして子ども達の  
健康状態がよりくわしくわかつてきました。

内科検診では、校医さんより「肥満児が少なくなりましたね。アトピー性皮膚炎の子も大きくなっています」とコメントを頂きました。

視力検査の結果、二学期に経過を見た方がよいと思われる人、近視のすすみ具合に合わせるようメガネの検査を受けた方がいい人にそれぞれ連絡させて頂きました。

けがや発熱で医務室の利用も少しありました。木曜日以外も協力できる方法はないかなあ  
と思ってしまいます。先生方やオモニ達の頑張りにいつもいつも感心しています。

夏休みを元気に楽しく有意義に 過ごしてくださいね！！



京都朝鮮第2初級学校 保健授業カリキュラム

2007

テーマ 「生産を心身共にすこやかに生きぬくために」

授業を通して

- \* 「からだはすばらしい」を伝えたい
- \* 「大人に向かって」を伝えたい
- \* 「自分をみつめる、自分を知る、自分を大切に」を伝えたい

人間の身体を教材にして 人権・科学・自立・共生 について学びます。

	1学期	2学期	3学期
1学年	*きれいなからだ ・みんなうんち  7月 9日 4限	・あっおとなのは!  12月 17日 4限	・ねつのなし
2学年	*大きくなるからだ ・つぎつぎはえる おとなのは  7月 12日 5限	・目のはなし	・尿のはなし?
3学年	*からだの中は? ・たべもののたび  7月 9日 3限	・男がいい? 女がいい?	・おなかの赤ちゃん
4学年	*からだはすごい! ・血のはなし 熱のはなし  7月 19日 4限	・10才を祝う  12月 18日 3限	・あいしているよ
5学年	*からだの変化 ・おとなになると いうこと  7月 19日 5限	・命のつながり (地球の健康人の健康)  12月 18日 4限	・すてきな男と女に
6学年	*新しい自分の発見 ・自分でどんな じぶん?  7月 19日 6限	・エイズ	・空気と光と友だち (生活習慣病)

「京都モアネット」は  
高齢・障がい外国人（日本国籍含む）の方々を  
訪問し助けておまちり、医療・福祉などの  
生活相談を行っています。

京都外国人高齢者・障がい者生活支援ネットワーク  
more=01

# 京都モアネット



● 外国人福祉委員制度は京都市の助成事業です

☎ 075-681-2721

外国人の福祉生活相談ホットライン／외국인의 복지생활상담직통전화  
外国人生活福利咨询热线／Welfare Counseling Hotline for Foreigners

お悩み、お困りの時は  
“外国人福祉委員”に  
ご相談ください。

- 京都モアネット事務局 -

相談受付：月曜日～金曜日 10時～18時まで

〒601-8007 京都市南区東九条北河原町5

TEL 075-681-2721 / FAX 075-681-2722

EMAIL kyotomorenet@guitar.ocn.ne.jp

外国人福祉委員募集中！お問合せは事務局まで

## 広報資料

平成18年6月16日  
保健福祉局  
(委託社会部長着替証課 251-1106)

### 高齢・障害外国籍市民福祉サービス利用サポート助成事業の実施について ～外国籍市民の生活を安心サポート～

高齢又は障害のある外国籍市民の福祉サービスの利用については、認知症や身体状況等に加え、言葉の問題や日常生活習慣等の違いのため、福祉事務所等の相談窓口や情報源まで到達できない場合や、情報を得ても理解が困難な場合があり、外国語によるコミュニケーションが可能な者が横渡し役となってニーズを把握し、必要な福祉サービスの利用につなげることが求められております。

この度、本市では、外国籍市民の日常生活における不安や悩みの解消を図るため、高齢・障害外国籍市民を対象とした訪問相談や福祉サービスの利用支援等を行う「高齢・障害外国籍市民福祉サービス利用サポート助成事業」を下記のとおり開始しますので、お知らせします。

#### 記

##### 1 事業実施団体

名 称 京都市外国人高齢者・障害者生活支援ネットワーク「モア」  
所在地 〒601-8007 京都市南区東九条北河原町5  
電 話 075-681-2721

##### 2 事業内容等

###### (1) 事業対象者

要介護認定又は障害者手帳の有無に関わらず、支援が必要な高齢又は障害のある外国籍市民等

###### (2) 事業内容（ウ及びエについてはイの終了後に実施）

- ア 外国語によるコミュニケーションが可能な者等（以下「支援員」という。）の募集及び登録
- イ 支援員に対する研修
- ウ 福祉サービスの利用に係る電話及び来所による相談への対応
- エ 支援員による訪問相談及びサービスの利用支援、適切な専門機関との連絡調整等

###### (3) 事業実施区域

市内全域

###### (4) 事業開始日

平成18年6月19日（月）

## 在日コリアン高齢者問題とエルファ

2008.2. 29

「チョゴリときもの」

NPO 法人エルファ

ナム スンヒョン

### 1. 戦後 60 余年の時が流れ在日コリアン 1 世は(高齢者の現状)

- 独居高齢者の増大
- 2 世も高齢化
- 1 世～5 世のギャップ
- 言葉の壁、生活文化の違い
- 福祉制度からの除外感と孤立感
- 国籍差別による無年金問題

### 2. 共に生きるための NPO 法人を設立しよう

#### 5 つの活動

- ① 在日コリアン高齢者をはじめとする外国籍住民と地域住民のための介護事業を行う
- ② 在日コリアンをはじめとする外国籍住民と地域住民の子育てを支援する活動
- ③ 在日コリアンをはじめとする外国籍住民と地域住民の障がい者を支援する活動
- ④ 地域社会における異文化交流促進の場として、コリアン文化教室などの運営
- ⑤ 京都に現存するコリアンの歴史的文化保護と発展のためのボランティア活動

### 3. ウリ式介護のスタート

- ① ウリ友…支えあつた友がいる
- ② ウリ食事…食べなれた食事ができる
- ③ ウリ唄…聞きなれた、唄い慣れた唄がうたえる
- ④ ウリ遊び…懐かしい遊びができる

⑤ ウリ空間…故郷にいるような気分になれる  
4. エルファの役割

—居宅介護事業所エルファ  
—訪問介護事業所エルファ  
—デイサービス ハナマダン東九条  
　　ハナマダン南京都  
　　ハナマダン洛北

—子どもひろばアンニョン  
—共同作業所エルファ

※エルファが1世にとって見学者、ひいては社会の接点となりそこから生きる  
喜び、生きようとする意欲へつながって行く。

## 在日コリアンのアイデンティティー

崔 秀賢

(はじめに)

日本での在日外国人、とりわけ在日アジア人がどのような状況の下で生きているのかについて述べてみたい。自分の出自からして、まず在日韓国人（コリアン）が抱える問題を、自分の生活史を振り返りながら考えてみる。そして日本社会が、異質の者を受け入れ難い社会であるという現実を述べ、これを日本社会が抱える問題点の一つとして提示して見ようと思う。また精神科医として出会った、何人かの在日コリアンの心病める人のことも併せて記して見たい。

### 1 幼児期から20代まで一ネガティブな烙印について

私は1943年に東京で生まれた。その時は韓国・朝鮮が日本の植民地であったので、出生時の国籍は日本であった。（1945年8月15日の終戦で日本は植民地を失ったので、在日コリアンの国籍は幾つかの変遷の後、韓国・朝鮮人になった。詳細、略）。生まれたとき、私の名前は海山秀賢だったとの事である。というは1940年から、日本は植民地の創氏改名制度を作り、植民地下の人々が姓を日本式に変えるよう強く要求した為である。私の姓という姓の本幹（本幹については口述）は海州であったので、父は姓を海山としたのである。海州ばいまの開城の近くで38度線から近い。しかし私は通名を使った記憶はない。父が在日韓国教会の牧師だったので、解放後（終戦後）父はすぐに日本名を捨てる事ができたからである。しかし大部分の在日コリアンは、解放後（終戦後）もこの日本名をそのまま通名として残してしまう結果となった。

私のそれ以前の出自について述べる。私の父は全羅南道の宝城（ボーソン）と言うところの出身である。宝城は光州から東南東に約50キロ離れたところにある。祖父は自作農で漁屋もしていたという。客人も多く貧しくはなかったようである。父は三男だったが、家督相続の優秀な長男（伯父）が突然病死し、それに悲観した祖父も1年後に亡くなつたので、養子に行っていた次男の代わりに父が家を継いだとの事である。数えて17歳頃であった。その後父は農業を継ぎ、田園を深く掘ったりしたので近くの人達に笑われたりしたが、作物は大いに増産で、人々は父の才能に驚いたとのことである。

父は祖父が存命のころ、クリスチヤンになっていた。後年、父は光州で宣教師等の影響を受けて、神学で身を立てようとした。平壠の神学校にも行った。しかし約1年後、その神学校は総督府によって閉鎖された。母と結婚した父は田舎の宝城に戻り伝道所を作ったが、官憲の呼び出しが繰り返されたという。キリスト教の神と天皇ではどちらが偉いのかと繰り返し問われた。東方選擇、神社參拜の強制がいよいよ酷くなった頃である。父は古事記や日本書紀の知識がかなりあったので、それらを引用して天皇がキリスト教の神より偉いとは言わなかつたそうである。日本の官憲は父が日本の古事記や日本書紀の内容を持ち出して反論するので手に負えなくなつたのであろう、父に日本へ渡ることを勧めた。朝鮮での迫害が日本より圧倒的に激しかつたからである。1939年頃父は母と幼い姉をおいて単身で東京に来た。その後医院の仕事を勤めながら、明治学院の専門学校に通つた。それから3年程経つて母が、幼い私の姉二人をつれて玄界灘を渡り下関から東京まで来た。当時の関釜連絡船や蒸気機関車の状況を思い出すと、随分辛い旅行であったかと思う。そん

な経緯で私は1943年に東京で生まれたのである。

私が小学生のころ、在日のために差別されていると感じたことがいくらかあった。4歳から14歳まで尼崎市の武庫川のすぐ東に住んでいた。父がそこの教会（勿論在日韓国教会）に赴任していたからである。そこには大企業の大きな社宅が二つあり、在日韓国人・朝鮮人と沖縄出身者が住んでいた。またそこは同和地区のど真ん中であった。ただ私がその土地を離れて何年か後まで、そこが同和地区だとは知らなかった。だから同和地区への差別は、住んでいた時には全く分からなかった。高校生のころ「橋の無い川」と言う本を読んで、あまりにそこでの村の様子が自分が小学生のときに住んでいた所と似ているので、父に尋ねてそこが同和地区であることを知ったのである。そんな理由からであろうか、大企業の社宅のひとつは高い柵で囲まれていて中には容易には入れなかつた。私は4歳から十年間、差別<sup>差別</sup>差別のど真ん中で生きていたのである。

小学校1年生のとき、クラスの子供の物がなくなった。担任の女の教師は何故か私が犯人だと決めつけた。私は貧しかつたが、牧師館に住み長男でもあったのでそれなりに正義感も強く誇りも高かった。私は無実であった。このことを知った父はすぐに学校へ行って抗議した。その後のことは良く覚えていない。ただ、悔しさや差別を幼いながらも感じた。小学校の4年生の頃まで、私は腕白グループのリーダーになつていた。あのころが私の人生で一番幸せな時であった。4年生の時にクラス委員の選舉で学級委員長に選ばれた。しかし、その時の担任は私を呼び、君は日本人ではないので副委員長になってくれと言つた。後にそれを知った父は勿論すぐに抗議を行つた。10歳頃まで、“朝鮮、ニンニク臭い”と大声で子供たちが言うのを聞いて屈辱感を感じた事がある。

とにかく、幼い頃から自分はよそ者であるという意識、誇れるものではないと言う意識が育つていった。ネガティブな価値の存在であるのだと思うことが時々あつた。そして知らず知らずのうちに、民族としての韓国・朝鮮人=劣者という気持ちが植え込まれて行つた。徐々に私は“負けることは出来ない”と思うようになつた。いわゆる過剰防衛が生じて來たのであろう。5年生になって学校に行くと、成績優秀であった10人近くの生徒が登校しなくなつてゐた。尼崎は灘中高から近く、灘中高は生徒らの懐の学校であった。彼らはそこに入るために芦屋にある進学率の高い小学校に転校していた。また、5年生の担任になった新しい女の教師がとても大らかな人であった。幼心にわたしはこの教師に親近感（？）を抱くようになつてゐた。そんなこともあって、私は腕白坊主から内向的になり、勉強に励むようになつた。勉強ででも勝たなければ生きて行けないと思ったのだろう。勿論父母の圧力もそれまでにかなりあつた。母はわたしが小学4年生の頃、もしクラスで一番になつたらピアノを買ってやると言つてゐた。しかし、クラスで一番になつてもなかなかピアノは買ってもらえなかつた。6年生の時の女性の先生もとても良い教師であった。ある日私は呼ばれて、“崔君、どんなに辛いことがあってもくじけられないよ”と仰おさつてくれた。その時その意味は良く分からなかつたが、後に考えると民族差別に負けるなど言ふ言葉であったと思う。今から考えるに本当にとてもうれしい言葉であったと思う。

中学生以降になって、新聞を読むようになると、3面記事で“山○太○（こと金○○）は…”という犯罪記事をよく見かけた。新聞に通名と本名が記されていたのである。そんな記事を読むたびに情けない気分になつた。いわば屈辱感である。子供心に自分は“日本人では”なく在日韓国人・朝鮮人であることがとても辛いことであった。“日本社会の中

の一員ではなく、それ以外の存在だ”と思うようになった。自分が20歳代まで、この様な疎外感で随分苦しんだ。特に“朝鮮”という言葉にとても過敏で、おびえていた事を改めて思い出す。

14歳から26歳まで、わたしは大阪の生野区に住んでいた。父が在日の多い生野区で在日教会の牧師を勤めるようになったからである。中学3年のある日の朝礼の後、突然“崔、あとに残れ”と言われた。理由も分からず立っていると、別の教師が“そいつと違う。別の崔や”と言った、一言の謝りもなく。そのころ私の成績はかなり良かったが、このようないい扱いは普通であった。そのころの在日の子供のいくらかが非難されるべき事をしていたのかも知れない。しかしこのような風にしか在日を扱えない学校や教師への怒りはなかなか無くなるものではなかった。勿論優しく親身な教師もいたし、そのような教師への感謝も忘れないが。

この中学校へは2年の3学期に転校したが、一人通名の在日の生徒がいた。彼はとても優秀な生徒であったが、私と彼はとても親しくなった。二人とも両方の家族から息子同然に扱われ、友情はいまも続いているが、私が3年生になったある日、二人の父親が学校に呼ばれた。府立の進学校へ二人とも志望していた。成績に問題は無かったはずである、親友の彼は後に東大に現役で入った位だから。しかし中学校の教務主任と担任は、とても在日の生徒二人が受けた二人とも通るとは思えないと言った。この高校にはわたしが通っていた中学校から、毎年3人位受けた1~2名位しか通らなかったからである。教師は、二人のうちの一人は別の学区の進学校を受けて欲しいと言った。しかし、我々の親はきっぱりとその提案を断った。結局二人とも志望の高校に受かったが、後で聞くと当時の大阪府立の進学校では、日本人であれば80%の成績で合格したが在日は90%以上の成績でなければ入れなかつたとのことであった。なお、この親友は高校でも通名を使っていた。しかし通和感はなかった。又、高校入試でのことだが、担任の教師は私に大阪の教育大付属高校を受けて見ろと言つたが、“通るとは思うな”と言つた。通らないことは教師も知つていたのであろう。その頃、生野区にあるミッションスクールは在日の入学願書も受けたらなかつた。1960年頃の差別は普通では無かつた。

私が16歳になった後、役所から区役所に来るようになつた。生野区であつたので、多くの在日の人が並ばれていた。区役所の人たちは殆ど命令口調であつた。高校を休んで行ったが、かなり屈辱を感じさせられた。思春期で、誇り高くして傷つきやすい頭であったから余計にそう感じた。10本すべての指の指紋を念入りに探された。今でも何か悪いことをすれば、自分の指紋は全て探されているので一遍に私は捕まるだらうとつい思つてしまつ。

## 2 在日のポジティブさの獲得について

私は民族問題から逃げずに済んだので、ネガティブなアイデンティティーをポジティブなものにかなり変えられたと思う。その二つは、多くの韓国人・朝鮮人の独立運動の本などを読んだ事である。そのお陰で自分なりに、誇れる民族意識と、戦った独立運動家たちへの共感を得ることが出来た。(例えば、松本清張の「北の詩人」等)。第二には、私はその頃在日韓国キリスト教の教会に属し、全国の青年会活動に参加したので在日の友人を多く持てたし、ここで多くの自負心を持つことができた。多分運の良い方であろう。この

青年会の全国組織に全国協議会があり、その中に中央委員会と言う執行委員会があったが、この中央委員会は、教会に属する青年達から絶大な評価と敬意を受けていた。全国協議会総会で、約10名の中央委員に選ばれることは大変名誉なことであった。この中央委員会の主催のもと、毎年夏には全国から150人前後の青年達が伊豆や野尻湖などの景勝地に集まり、いわゆる修養会を開いていた。私も20歳の頃から、運よくこの中央委員に選ばれた。3ヶ月に1回位開かれる中央委員会で、信仰の問題とともに民族の問題や在日の問題にどのように取り組むのかが繰り返し討論された。この中で何人もの在日の友人を得ることが出来た。これらは私にとって掛け替えのない経験であった。ネガティブなアイデンティティーがポジティブなものに変えられていった。(ちなみに私は野尻湖畔での修養会で妻と出会った)。

このような体験は在日の人にとって、普通はほとんど望めないものだと思われる。そう思うと自分は運が良かったのだと思う。現在でも、もしも大学に進んでいて望むのであれば、多くの大学では韓国文化研究会(韓文研)またはそれに近い会があるだろうから、その気があればそこに所属することでポジティブなアイデンティティーを深める可能性は今もありうる。

### 3 私の働いている精神科の職場で

#### 1) 心病める在日の二重の苦難

私は自分が勤めている病院で、自分が在日で、国籍が韓国だからと言う理由で特に在日の韓国・朝鮮人を多く診てている訳ではない。ただ、日本人の医師では自分の民族性を解ってもらえないと思う人や、民族差別を解ってくれないと感じる人を診るので、比較的多くの在日韓国・朝鮮人を診ているかも知れない。

私が今診ている人で、病院では姜良夫(仮名)。(キヨウヨシオと日本読み)と呼ばれている人がいる。病院では保険証の関係で、本名で呼ばれることが多い。もちろん通名で呼ばれる人もいる。姜さんは朝鮮学校に3年間通ったことがある。病気が悪くなると、大声でかつ朝鮮語でしゃべった。混乱はしていたが、沢山のハングル語の文書を主治医の私に書き、「民族意識を高く持て」と書いた。長い間、私は、彼がいつも民族意識を強く持った人だと思っていた。しかし、実は子供のころから通名を使っているし、今も通名で暮らしているとのことである。しかしその人は今、いつも周りの人に自分が在日朝鮮人だと言っているとのことである。なぜ通名を使うのかと私に問われ、子供のころ色々と朝鮮人であるために差別的な言葉を聞かされ、いまでもその恐怖心が無くなっていないと言った。単純な気持ちを言えば、私は驚いた。彼は民族意識をきちんと持ち、「妥協」はしていないと思っていたからである。私はかえって彼に親近感を抱いた。また、差別の後遺症の強さを改めて感じた。ちなみに、韓国でホリシビックが開催された1988年の後位から、在日韓国人と比べて在日朝鮮人に対する差別がゆくらか強いように思う、データはないが。在日朝鮮人を名乗っている上記の姜(仮名)さんは差別が更に酷かったのではないだろうか。朝鮮学校生への暴行が時に起こる。北朝鮮の政治体制の問題はあるが、それと同一視して生徒への雑言や時にみられる暴行などは許されるものではない。

最近、通名を使っているので日本人だと思っていた入院者から、「先生、私は在日韓国人であることを隠しているので、多くの人から非難されていると思う」といわれた。私も

その人が通名を使っていたから日本人だと思い込んでいたので、“そんなことは考えられないよ。私もあなたが在日韓国人だと思っていなかったから”と答えた。事実は解らない。でも彼はほっと安心したようであった。その後彼は回復を続いている。でも、わたしは、精神疾患にかかった上に、民族差別におびえる在日をみて心が痛んだ。二重の苦しみと差別を背負っていることを改めて考えた。そして、なぜ通名なのかも改めて考えた。

## 2) 同僚の中の在日について

職場にも、在日の人が働いている。中国からの帰国子女関係の人もいる。在日韓国人・朝鮮人も働いている。これまでの約30年間、在日韓国人・朝鮮人で、本名で働いたのは数名の看護師や医師である。しかし本名で働いて、そのことで差別が強くなっているを見聞きしていない。皆誠実なスタッフであったので、多くの同僚や入院者から信頼されていると思う。

一方私の職場で通名を使っている在日の職員も何人かいる。しかし、その人から知られない限り、その人が在日韓国人・朝鮮人であるかどうかは分からぬ。職員の場合は特に実情を知ることは無いだろう。何か悲しい気もするが現実である。ともあれ在日韓国人・朝鮮人以外の在日では、通名の習慣はそれ程多くないのではないかと思う。

私の職場では、白衣を着るのも私服で働くのも自由で、ただ胸に名札を付けることが義務なのだが、かなりの間私は名札を付けなかった。入院者のがなりの人が、私と会話をするときに自分の病気についての会話でなく、私が何国人かを先に問うたからである。近ごろは、名札を付けている。なぜか、近ごろ私にルーツを問う人が減ったからである。韓国が世界的に偏見を持たれる国ではなくなったからだろうか。

なお私は職場で自分の民族問題を殆ど言わない。幾つもの差別の中のひとつの差別である。“視野狭窄”にならないように自戒している。

## 4 今の私の家族について

多くの在日コリアンの2世以下では韓国語（母国語？）を話せない。その辛さは良く分かる。私の妻も2世だが、かなり勉強して今は少し“韓国語”を話す。息子の一人は、在日教会の青年会をやるくらいなので、“韓国語”を学びたがっていた。大学を留年したら韓国に語学を習いに行くといっていたが、ギリギリで留年しなかった。

先程も述べたように、我が家には通名は無かった。ただ、私の家族の中では、先ほど述べた息子だけ“チェヒョンイン”と本来の読み方で名を名乗っているが、あとは、“さい”と日本語読みである。父の時代からそうだったので、物心が付いたときから自分は日本社会では“さい”であり、家の中や教会では“チェ”であった。息子が20歳の頃、突然1枚のプリントを作った。そこには、自分が崔=さいではなくチェであると宣言していた。その頃、我が家にはこの息子に多くの電話がかかってきていたので、私は受話器をとっても“はい、さいです”と答えて良いのか、“はい、チェです”と答えたら良いのかわからなかつたので、“はい——”と答えていた。ちなみにこの息子は今年の4月から高知で働いているが、驚いたことに高知の人が在日についてほとんど“無知”らしいと言うことである。在日コリアンの夫婦は、韓国や中国と同じで姓は結婚前と変わらない。だから大体夫婦別姓である。それを知らない職場の人に正式に結婚していることを分からせるの

にとても苦労したと言っていた。また、“いつ国へ帰るのか”と問うなど、“在日”について余りに無知なので驚いたり、時には怒りさえ覚えたと言っていた。私たちには選挙権が無いのだが、それを知らない人から選挙での投票を依頼されることもある。悲しいような、残念な気分になる。無知も在日にとて辛い現実である。（帰化については後述）

私の他の子供も、自分は韓国人だと小学校の頃から言っていた。下の息子が10歳頃のことである。かれは家でも友だちからも、何時もチョンと呼ばれていた。駿仁なので韓国語でチョンイン、略してチョンだからである。クラス会のときに、「自分はよくチョンと呼ばれているが、それは自分が韓国人なので駿仁=そうじんでなくてチョンインが本当の呼び方だからである。家でチョンインとよばれているために、チョンと言う呼び名になつた」といったそうである。また、今28歳になる娘は、小学校の4年生のころ、クラスに在日が4人もいたのだが、笑ってしまう話なのだけど、この4人が自分たちは“4人組”だと言ってクラスメートを羨ましがらせていたらしい。“私は韓国人やで”と言っていたらしい。それをきいた私は余りに自分の子供時代と違うので、本当に驚き、又笑ってしまった。この娘は今の“さい”という呼び名を“チェ”に変えようかと迷っている。あるいは“チェ”と名乗るかもしれない。しかし私は今58歳なので、急に她的の呼び方を“さい”から“チェ”には変えられないと思う。

私は韓国語を90%位はしゃべることが出来る。しかし民族系の学校に行かなかつたから、読むことはかなり苦手で、カタカナを読む程度である。書くことは殆ど出来ない。職場からソウルに何回か職員旅行に行った。ソウルには親戚もいるので、その人の案内でおかの職員とソウルをまわるときには通訳もしたことがある。少しおげさだが、言葉を話せる能力を、民族の和解の道具に使いたいと思うこともある。日本語を話せず韓国語しか話せない人で、心の病になった人を診ることもある。一度は中国の朝鮮族の人が心の病気になって入院したことがあった。私は主治医では無かったが、主治医に頼まれ韓国語でその人と話した。治療はうまく出来たと思う。

## 5 差別と通名との関連

### 1) 差別の状況とその変遷

私が20代の頃、在日の同級生（高校でも通名を使っていた）が京大の航空科を卒業したがどこにも採用されず、家の空調機の取り付け業を継いだ。京大の航空科を卒業すれば普通は大手の航空会社に就職出来るだろうし、就職していれば今頃は管理職に付いているかもしれない。このように当時はどんな大学を出ても日本人のように大企業に就職することは出来なかつた。1985年頃は、銀行は金を貸さなかつた。公団住宅にも入る権利は無かつた。国民年金にも入れなかつた。これらは今ではすっかり変わつたが。

就職の難しさはいまも残っているかもしれない。最近の統計では、日本人は被雇用者（サラリーマン）が8.0%台だが、在日の被雇用者は5.0%台だという。パチンコ、焼肉、風俗、零細企業を経営したり、そのような所で働くことが多い。悪くすると暴力団に“就職”する者もいる。

10数年前、職場に、夜暴力団の人数人が覚醒剤による精神病の人の入院を求めてやって来た。その覚醒剤精神病のひとは既に京都府立の精神科病院に入院出来るように手配は済んでいた。その日の当直医がいくらぞの説明をしても、その人々は“おまえらは自分

たちが暴力団のものなので差別しているのだろう”とドスを利かせて立ち去らなかった。たまたま、私がまだ病院にいたので、外来に起き“自分は崔という医者だが”と事情を説明すると、“極道の妻”を含めたその人たちはすぐに納得して、府立の病院に行くと病院を去って行った。このケースについて私の想像では、崔という在日韓国人が副院長でいるからには、自分たちは差別されているのではないだろうと感じたのだと思う。言いづらい話だが、暴力団と在日韓国人との関連を感じた（！）。

通名に話を戻して考えると、初めに述べたように、1910年からの植民地支配と1940年の創氏改名、そして戦後の“第三国人”から在日韓国人・朝鮮人に移って行くプロセスでの“差別すべき朝鮮人”という烙印抜きで通名の多さを説明出来ないだろう。この重さが一世、二世、三世、四世に引き継がれていると言うべきではないだろうか。その重さは世代毎に低くはなっているだろうけれど。他のアジアの在日、アラブ、南米、ヨーロッパ等の外国人と大いに違うところである。

## 2) 在日コリアンの通名とその他の外国人の名前について

欧米人、東南アジアの人、アラブまたはアフリカの人で通名を使っている人はほとんどいないだろう。中国人は通名を使っているのだろうか。多分、台湾以外は植民地化されてないので、通名の習慣はそれほど無いと思える。プロ野球でも王貞治など本名の人はいても通名の人は少ないだろう。在日コリアンのなかで、歌唱力や体力があると歌手やプロスポーツ選手になっているひとも少なくないが、これらの人達は運のいい人たちである。しかしこれらの多くの人は通名、または帰化して日本名を使っている。その為、そのルーツは判然としないのである。力道山、金田、張本、大山倍達、横綱玉の海、速川などは知る人ぞ知るである。この人たち以外でも、昔も今も歌手にも大勢在日コリアンがいるとのことだが、公開されてないので名前を上げられない。悲しいことに思えてしまう。

孫正義、柳美里、辛叔玉、そして崔洋一監督（！）。本名での在日の人達。本当に本名で日本社会で生きている人を見聞きすると嬉しくなり誇らしくなる。（個人的な例外、在日ではないが指揮者のチョンミョンファン！ 私と妻は彼とN響のコンサートを京都のコンサートホールで聞いた。会場は超満員で、演奏会後200人位の人が並んでいて、彼のサインをもらっていた。私と妻も思わず並んでサインをもらった。N響の名演にもとても感激した。）。

## 6 帰化について

私は帰化について詳細に述べることはできない。しかし、毎年約一人の人が帰化している。帰化していく立派に生きている人も多い（孫正義など）。しかし結婚などのときに困ることがあるのかもしれない。例外かもしれないが新井将敬元代議士のように、“元朝鮮人”と選挙のときにビラを貼られて、汚職に身を汚してついには死んでしまう人もいる。

分かりづらいことだが、在日コリアンが帰化することはそう簡単な事ではない。

植民地の支配を受け、もとは日本人であった過去を背負い、また日本人に成る事を申請し許可されるごとに大きな決断を要求される。

帰化していようがしていないが、大阪の生野のよう，在日コリアンが多いところで育つ人と比べて、周りに在日コリアンがほとんどないところで育った人では、自分の

民族としてのアイデンティティを持つことは誠に困難であろう。小学生の高学年になってやっと親から在日韓国人・朝鮮人と教えられる人も多いようである。だから10歳頃まで自分がコリアンであるとか、コリアンから帰化したとかを知らないで暮らす子供も大勢いるだろう。自分がコリアンとわかつてもそれを嫌うか、無視することはあっても、好きになる可能性はほとんど無い訳だから、そのあとは隠して生きることは良く理解出来る。

ともかく私は帰化を全く非難しない。の中には「帰化しているけれどコリアンだ」と言っている人もいる。しかし、子供はどうなのだろう。周りに「帰化した韓国人」と言えるだろうか。あるいは隠すしか方法はないのかもしれない。親しい友人には告げるだろうか。結婚問題も図る事もあるという。日本人で帰化したコリアンを嫌う人もいるだろうし、コリアンも帰化した人との結婚に躊躇する人もいるという。本人たちが選べば良いのだろうけれど。

#### 7 本名とアイデンティティについて

ここで、通名について私の見解を述べて見たい。いろんな資料を読んでも体験から言っても、通名が無条件に有利ということは出来ないと思われる。本名だから必ず損をするとは限ってないはずである。一方通名でのデメリットも大きい。自分の出自（ルーツ）を隠すことは自分の存在基盤を覆うことかも知れない。自分を隠すのと同じであるともいえる。実情では、差別されなくなったとは言えないのではないか。隠すための苦労があるかも知れない。友情や恋愛、結婚、就職で自分を表出せざるを得ないことが多いだろう。それ以外では社会的に自己の提示が出来ないと見えるかもしれない。大事な事を隠して生きることは、自分の誇りや希望にふたをして生きているともいえる。しかし、現実には通名を使うことはやめられない。辛く悲しいジレンマである。

在日が自分のアイデンティティーをポジティブなものに変えて行くには、何らかの在日のグループに属するか、または大人に成る前の学校生活等の共同体の中以外では困難であるとおもわれる。幼く若いときに自分を名乗る意識をもたせられるのは家庭、それが難しければ教育の場ではないだろうか。現在、在日外国人の民族性を尊重する教育がかなり広く行われている。わたしはたまたま大阪と京都の学校の教師たちの取り組みに接することができた。今では教育以外ではほとんど不可能かも知れない。差別の下にありジレンマや不安を抱えている若い者に、誠意と人権意識と正しい知識がある教師や仲間を除いては困難ではないだろうか。私の息子も、それまでに多くの下地はあっただろうが、最後に決心させたのは、スイス人のドイツ語教師の質問があったからだと聞いている。その教師は息子に、「君には何故二つの読み方の名前があるのですか」と尋ねられ、とうとう決心したと言う。他の人でも状況は似たものではないであろうか。日本の教師の言葉が誰の言葉より説得力があるのは、差別と偏見に負けそうな若者にとっては当然のことであろう。

しかし、言い古された言葉だが、差別と偏見、これらもいやおうなく在日コリアンに通名を使わせていることも疑うことは出来ない。1940年に創氏改名を迫られたこと、そして日本名でないと商売や就職がほとんど出来ないことが大きな背景である。本名を名乗らせない“閉ざされた”日本社会が、他方に存在する。在日コリアンが差別と偏見に過敏に反応する現実が日本社会に残っている。この現実は在日コリアンの方では変えることは出来ない。そして、通名を使う習慣が統一している。本名を名乗るために本人の自覚と決断の

みでなく、日本社会も多文化の受容社会へと変身しなければ困難であると思わざにはおれない。

現在、サッカーのワールドカップの共催などで、多くの市民が、旅行などでの訪問、あるいは食べ物、歌、映画、ファッションあるいは共同での活動や事業等を通して、大きな相互のありのままの認識と親睦をもたらしている。いまは実は大変な転換期なのかもしれない。そんな時代に私たちは生きているのかもしれない。おきな希望を感じることも確かである。

(むすび)

現在ではいわゆるダブル（混血？合いの子？または国際結婚？）が在日の過半数を越えている。この10年余り前から、在日の結婚の80%以上が日本人との結婚である。またその子供も日本人と結婚する。血液（遺伝子）の2分の1又は4分の1だけの在日が増えている。また帰化など多くの在日の形態は変わりつつある。韓国・朝鮮人名で帰化することも最近は可能になっている。在日といっても様々なタイプになった。しかし、在日であることには変わりはないであろう。本人が拒否しても多分。

福岡安則氏の“在日韓国人・朝鮮人”という本では、本名を前もって伝えて都市銀行に就職した人のことが書いてある。その人は本名を韓国語読みで使っているとのことだが、“やはり在日韓国人でもこうしているんだと多くの人に知らせたら、後に続く人も多いだろう”と自信をもって言っているそうである。尚、その人は東大の法学部を出ているから例外かもしれない。この人の生き方はとても重要な教訓を与えてくれている。福岡氏は国籍と“名前”が民族性を支えると言っている。近ごろ日本も変わりつつあるのかなと思う事も多くなった。

国籍や民族の違い、肌の色の違い、障害のある人、老いた者、女性、その他の色々な疎外された人々、これらのマイノリティーと共に生きられない社会は、社会の構成員全てを仲間として生きて行くことが出来ない社会ではないだろうか。在日外国人と共に生きられない社会は、在日日本人をも自由に生かしてくれない社会だと思う。色々な困難はともなるだろうが、誰とでも共に生きていくようにしていけなくて、どのようにして自分の社会から出した障害者や老人と生きて行けるのだろうかとおもう。

これから10年20年が過ぎれば、労働力の充足だけのためだけでも外国人は来るだろう。まだ、留学生も増えることはあっても減ることはないとだろう。

付記。わたしは8年余り前から、京都市精神医療審査会の委員を勤めている。この審査会は法的に大きな権限があるが、これの委員に在日の私が選ばれている。私が1969年から1988年まで約20年間、公権力を行使すると言う理由で鑑定医（指定医）に成れなかったことを思うと不思議なことである。様々な例外が起りつつある。例外が、普通の出来事になって行けば、私の述べてきた事を徐々に解決して行くのかもしれない。

以上

2008.2

連続フォーラム「チョゴリときもの」 NO.15 - 医療と介護の現場で 資料

## あとがき

今回は、「ひと」が避けて通れない、「生」、「老い」、「死」といった医療や介護の現場からお話を伺いました。パネリストは、いずれもその分野での専門家であり、地域に貢献する方々です。

このような専門分野では無論、従事者にとっても対象者にとっても国籍や人種は重要なことではありません。しかし、在日コリアンとして、多様な環境と文化背景を持ちながら仕事に向き合うとき、よりしなやかに「ひと」の心に接し、理解していくことができるトスレバ、反対に国籍やそれに付随する環境というのは重要な個性の一つとなるのかもしれません。

四回の穏やかなお話の中には、それぞれ「ひと」にとり本当に重要なことは何なのか、そして「社会」とどのように関わるのかを真摯に考え生きてきた軌跡が見えます。それは聴くものにとって、改めて「生きること」を考える機会となつたのではないでしようか。この小さな冊子が多くの方のお手元に届くことを祈りつつ、コーディネーターの仲尾先生、お話をいただいた皆様にこころよりお礼を申し上げます。ありがとうございます」といいました。

(財) 京都市国際交流協会 事業課 岡村敦子 鄭昌根(チヨンチャングン)



---

アジアの風文庫 24  
「チョゴリときもの」  
医療と介護の現場で

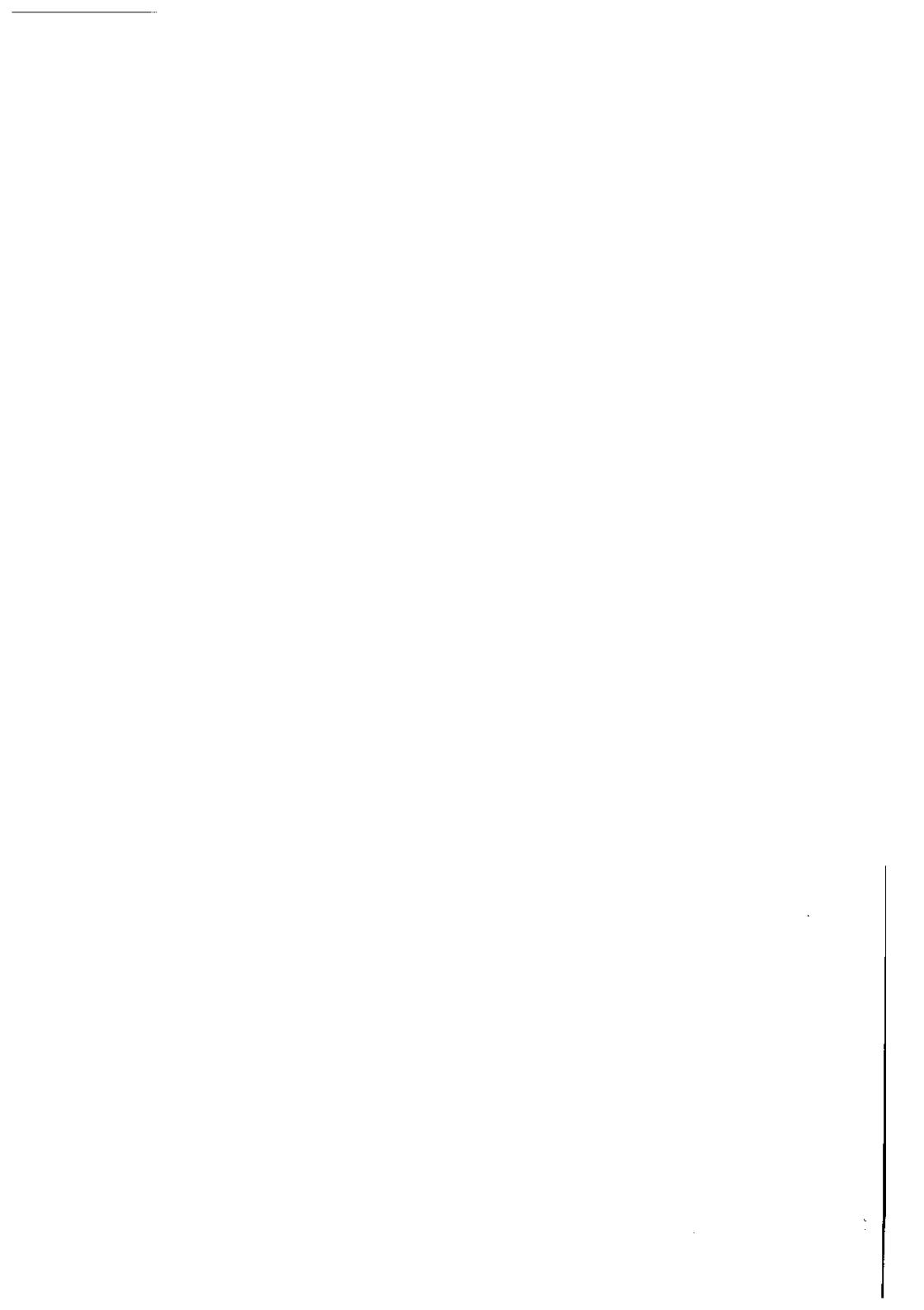
2009年1月 第1刷発行

編集・発行 財団法人 京都市国際交流協会  
〒606-8536 京都市左京区粟田口鳥井町2の1  
TEL. 075-752-3010

印刷 株式会社 アルファ・プリント社

---

写真：「朝鮮通信使駒札 2008設置」





財團法人 京都市國際交流協會  
KYOTO CITY INTERNATIONAL FOUNDATION